

# 川柳塔

創刊大正十三年三月一日發刊  
通卷八三八号



白川協加盟

No. 838

三月号

# 第21回 全日本川柳三重大会

とき 6月8日(日) 午前10時開場  
ところ 三重県総合文化センター・中ホール  
(津市一身田上津部田12334)

宿題 第一部(事前投句・5月10日締切)

「パレード」 成田 孤舟選  
「波」 保地 桂水選  
「民話」 長谷川 美美女選

◎各題2句・無記名・封筒に住所・氏名を明記し、投句料1000円(定額小為替・現金書留)を同封して左記へ

投句先 〒530 大阪市北区天神橋2丁目北1-11  
ステッブイン南森町702号

全日本川柳協会大会係

宿題 第二部(当日出句・午前11時半締切)

「太陽」 早川 双鳥選  
「流れ」 奥田 みつ子選  
「音」 田中 新一選  
「港」 加藤 翠谷選

会費 3000円(昼食・記念品代共)

観光 6月7日(土)・4000円

前夜祭 同日午後6時半・8000円

宿泊 ホテル・サンルート(津駅前)

申込先 〒518-04 名張市桔梗が丘4-1-10 木野方

全日本川柳三重大会事務局

麻生 路郎 33回忌・麻生 葭乃 17回忌  
中島生々庵 13回忌・西尾 栞 3回忌

## 追悼川柳大会

とき 6月28日(土) 正午開場・午後1時締切

ところ たかつガーデン(大阪府教育会館)

兼題と選者(各題2句)

「松」 川柳塔きやらぼく 八木 千代選  
「歩く」 川柳「塾」塾長 寺尾 俊平選  
「こども」 時の川柳社主幹 小松原 爽介選  
「波」 ふあうすと川柳社主幹 藤本 静港子選  
「目」 番傘川柳本社主幹 磯野 いさむ選  
「似る」 川柳塔社主幹 橘 高 薫風選

会費 2000円 懇親会費 5000円

# 麻生路郎先生

橋高 薫風

昨年十二月五日に山陽柳壇は五百回を迎え、記念特集として榎本聡夢、寺尾俊平両氏と私の三人揃い踏みで選評を掲載した。第一回は昭和二十四年十二月三十日の夕刊にはじまる麻生路郎選の山陽川柳で、それが母胎となって今に至った。用心は妻にも記憶して貰い

三原・糸崎 齊藤 正一

これが第一席の句で、二席三席の次の十秀に、福島鉄児、丸山弓削平、浜田久米雄となつかしい名が並んでいるのだが、それぞれの個性の滲んだ句であることに路郎先生の炯眼を感じる。

翌二十五年の九月には久米南町に第三句碑が建立され、日本一の川柳の町として発展する楔のような「俺に似よ」の一基であった。

ところが三十年に川柳岡山社が創立、川柳雑誌社から独立したことで路郎先生

は怒って取り巻きを伴い殴り込みをかける。こういう事件は昭和初期にも神戸であった。「爆弾を抱えてきた男」の演説である。路郎先生の直情は何処かで反転してわが身に刺さってくる。

田辺聖子先生の「道頓堀の雨に別れて以来なり」にも「番叢四十年記念全国川柳大会」に際しての路郎先生の仕打ちを厳しく批判しておられる。少年時代の水府・路郎のまるで琴瑟相和す夫婦のごとき友情が、何時からどうして確執多き二人となったのか。私が川柳雑誌社の編集部に入り、早速、短詩文学連盟主事として連盟通信や揮毫展の世話に奔走した時は、今度は路郎先生が臍を噛む思いをさせられている。それはその前年の三十一年六月に関西短詩文学連盟が結成され、初代理事長に路郎先生が就任されると、水府先生はじめ番叢系会員数十名が繪賈脱会という拳に出られたのである。近江砂人、中島生々庵両氏らが如何に水府路郎の反目に気を遣われたかが想像出来るのである。霹靂火の路郎に多分の負い目がある。そしてその路郎先生のみき理解者が霞乃先生であるが、これは次回に

触れることにする。

路郎先生については八年ほど仕えた間に教えられたことが多かったから、いろいろな機会に書いて来た。そして今改めて思うに、「真底句に生きた人」を第一に掲げなければならぬと思う。須崎豆秋さんを川柳界の一茶と言ったのは路郎先生だが、その気持ちには、俺は川柳界の芭蕉であるとの思いが色濃くあったように思う。芭蕉の「奥の細道」の真筆が出て来て、推敲のあとから句や文に対する厳しさを窺うことが出来たが、先生の思い入れも近寄り難いものを感じた。

資質高き故に容れられぬ経営の悩みもあったと思う。俗に居て俗にまみれ得ず、酒を好んで酒に痴れ得ずの路郎先生でなかったか。また、俊秀の揃う門下生に対しても満腔の信を託し得なかったのではないか。路郎先生の気概をよしとして傾倒を惜しまずに来た硬骨漢東野大八、工藤甲吉氏らも八十を越えられた。

最晩年の先生ならずとも、「孤独」の二字の川柳行脚でなかったか。

六月の追悼大会では、孫の西村哲夫師にその孤独の魂を鎮めて頂く。



座右の句

人生はよいしよこらしよにとっこいしよ (甲 吉)

私の句

風呂敷の小ぎれは母の花時計

相馬 銀波

## 川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 麻生路郎先生	.....	橘 高 薫 風	.....	(1)
たーたん	.....	安藤 寿美子	.....	(2)
川柳塔 (同人吟)	.....	橘 高 薫 風 選	.....	(4)
自選集	.....	東 野 大 八	.....	(48)
川柳の群像 池田可宵	.....	清 博 美	.....	(50)
古川柳歳時記 『雛 祭』	.....	高 杉 鬼 遊 選	.....	(54)
水煙抄	.....	河 内 月 子	.....	(52)
秀句鑑賞 [ 同人吟	.....	宮 西 弥 生	.....	(77)
水煙抄	.....	八 木 千 代 選	.....	(78)
渺湖抄	.....	西 出 楓 棠 選	.....	(82)
茴香の花	.....			

たーたん

安藤 寿美子

母さんがいつでも居間にいる安藤 昭子  
この句を拝見した時、私は昔読んだ小説のひとつの場面を思い出した。それは日頃家の中のただならぬ雰囲気を感じていたこともが、外で友達と遊んでいても、おかあさんがいなくなりはしないかと心配になって、遊びの仲間から抜けてそと家に帰る。そして庭の枝折戸から居間をのぞいて、しずかに縫い物をしているおかあさんの姿をみると、安心してまた遊びの輪に戻る。そうした日が幾日かつづいたある日、こどもがそつとのぞいた居間におかあさんの姿はなく、そしてそれっきりそのこどもの日常からおかあさんはいなくなってしまったのである。

昭子さんの句にある母さんは、そんな頼りない母さんではない。歌の文句にあるような根雪を溶かす大地のような母さんだと思う。外から帰って来たこどもは、しくしく泣きながら仲間はずれにされた悔しさを訴えたり、お小遣いをねだってだだをこねたり、あまり芳しくない通知表をそつと出したりして、再

「菓 子」	.....	亀岡哲子選	.....	(84)
一路集「占 う」	.....	池内かおり選	.....	(84)
「人 形」	.....	吉岡きみえ選	.....	(85)
初歩教室「歩く」	.....	吐田公一	.....	(86)
大空のころろ (74)	.....	橘高薫風	.....	(88)
路郎先生の思い出	.....	吉村一風	.....	(89)
■各地句会だより	.....	川柳クラブわたの花	.....	(90)
二月本社句会	.....	柳界展望	.....	(94)
各地柳壇 (佳句地十選 / 岸 桂子)	.....	三月各地句会案内	.....	(109)
柳界展望	.....	■編集後記	.....	(110)



座右の句  
 恋人の膝は檸檬のまるさかな  
 私 の 句

桃源郷真ん中もない隅もない  
 (薫 風)  
 長谷川 呂 万

び外へ元氣よく飛び出して行くだろう。  
 今はそうしたいつも居間にいてくれる母さんは少ない。こども達も小学校高学年にもなれば働いている母さんを理解し協力して生活している。けれども小さいこどもにとっては、母さんはすべてである。私の孫娘は一年半の頃はじめて言えた言葉は「たーたん」であった。私は「ばあたん」といつてくれたのかと喜んだが「たーたん」は母親の事らしかった。そして彼女はその一言ですべてを片付けた。お菓子が欲しいとき、眠くなったとき、何か氣にいらぬとき、「たーたん」。お父さんもおばあちゃんも「たーたん」。兄貴どものファミコンの邪魔をしに行く時も「たーたん」であった。「たーたん」即ち母親は彼女の全世界なのだ。かくのごとき信頼に対して母親たるものは十分にころろして保育の任にあたらねばならぬ。私は彼女の母親に厳重なる訓戒を垂れた。「しっかりせなあかんで」と。  
 ここまで書いた時、いささか地肌の明るくなった頭を拭き拭き、息子が風呂から上がってきた。そして私の手元をのぞきこみ、にやにや笑いながら言った。「まあな、どんな母親に育てられたとしてもやな、結局は本人の自覚と素質やぞ」途端に私のスネの傷はヒリヒリ・ズキズキと痛みだし、この一文はへなへなと腰がくだいたのであった。



橘 高 薫 風 選

弘前市 浅田隆樹

雪恋し雪国生まれの悲しきよ

撫子の花だけあせぬ古写真

雪が降る次の年への夢のせて

純情をルーズソックスくす笑う

人質に妻にとられた寝言あり

テレビ消す地球の動く音を聞く

稲架掛けは防雪柵になる津軽

吹雪の暫時 津軽富士 浮んでる

地吹雪はハワイの客に地から降る

地吹雪の変幻は白津軽富士

地吹雪とにっこり笑うゴータルよ

地吹雪に負けてたまるか津軽三味

竹原市 小島蘭幸

紙ヒコキに好きだと書いてあった

牛の角も僕の拳も耐えている

テレビを消して昔ばなしもいいものだ

制限時間いっぱい鬼の貌になる

紫の山から下りてくる亡父か

弟の恋を応援してやろう

体温の低きままなる霧の朝

日本海暗くひたすら蟹突つく

無縁墓堆くうるさい電車

奈良坂の佛の顔に泥乾く

なにを抗う歩道橋登る足音

ゆりかもめこの世の空を軽く飛ぶ

弘前市 櫻庭順三

尼崎市 田中薫

松原市 小池 しげお

役に立つこともあろうと縄をなう

ひとことが言えずに落ちた寒椿

敵よりも百円高い飯を食う

ほほえんでいるから怖い仏さん

アホになるくすり食後にのんでいる

赤い花供えてほとけ迷わせる

尼崎市 春城 武庫坊

新世紀につなぐ三年日記買う

昨日今日明日繰り返しつつ年送る

曾孫誕生心もはずむ喜寿の春

逆縁の柩を運ぶ北風はげし

芹匂う粕汁無言通夜の席

裸木をゆすって呼んだ仏の名

宇部市 平田 実男

忘れないと忘れられないとは違う

小姑が入り余計に連れさせ

目を入れてやると達磨もそり返り

味方より敵に素敵な人が居る

いつまでも時効にならぬ胸の傷

よく見れば蟹にもいます左きき

西条市 片上 明水

お隣と同じの種を播いて春

不景気の重さが靴の底へくる

山宿の酒に濁りが浮いて春

ポンと肩叩く力は先を読み

旅仲間鬼も仏も居て愉し

折返し返事が届く春の文

東大阪市 指宿 千枝子

若草に遊ぶ雀を驚かし

春日野の森に人湧く初詣で

煮染昆布の形でみくじ枝にある

ストレッツチ還暦ですが楽しくて

子を叱る声は隣も別らしい

軟禁のごと塾居する昨日今日

豊中市 吉田 あずき

地獄極楽つるり黒豆裏返る

角餅丸餅 天下分け目の関ヶ原

八頭身笑みのそぐわぬ福娘

手の中で寝たみどり児が溶けてゆく

小さな靴一つわが家にあるなごみ

人小さく夕陽大きくなってくる

大阪市 清水 絹子

休肝の日のべは妻に許されず

風向きがかわり妻にも火の粉とぶ

孫の話 夫の用事はあとまわし

ちぎれ雲遅い早いも独り膳  
如月や花にかこまれ花屋さん  
雨傘を売るも薬屋人助け

下関市 石川 侃流洞

梅一輪見本のように咲いて初春  
増税元年静かに除夜の鐘を聞き  
年金が底つき鍍金剥げてくる  
漬物石妻に旧家という重み

育てたのはわたし育ったのは子供  
積むだけが整頓なんだ僕の部屋

今治市 矢野 佳雲

ほっぺにチューこんな親でも嬉しいか  
いとしをして死ぬことは考えぬ

正直な男にもある七曲り

坂道で身ぶるいしてる田舎バス

元氣かと兄の口調は父に似る

いい親になろうなろうと嫌われる

神戸市 山口 美穂

寒風の中でパンジーが笑う

水仙の薫りにアルファ一液をもらう

歳は忘れて赤が似合うと決めている

二人三脚転んではかり老母と老娘と

確実に今日は昨日になる日記

一・一七 わたしの命日だったかも

和歌山市 川上 富湖  
魚眼レンズうしろの正面が不安  
自然薯に歯食いしばった跡がある  
劇中劇今日も一齣演じ切る

愛と書くとき急に掠れるポールペン  
骨拾う箸冷静な太さかな

和歌山市 川上 大輪

無口な男に一発芸がある

正論を吐き続けている牛の舌

愛は無添加 賞味期限は気にしない

最初からグーを出してる意気地なし

耐えてやる笑い話になる日まで

鳥取県 新家 完司

冬の嶺かくあれかしと言う如く

日の丸は成績ばかり気にしている

金髪に染めてみたとて蒙古斑

花道で必ず転ぶ我が家系

さくら咲くまでは鉛の蓋の下

堺市 桑原 道夫

気のおけぬ人と書店で待ち合わず

チンパンジー頭かかえて悪びれず

シャンデリアの下でしっかり握手する

二階から我が家の前の溝覗し

口中で確かめている金米糖

茨木市 井上森生

和歌山市 古久保和子

内からの力湧くかに初日の出

年毎の災禍に深い神の意図

海原に柄杓が挑む精一杯

冬の庭見ながら年金申請書

葉ぼたんはしゃきつとぼくはウオーキング

弘前市 佐治千加子

左脳右脳で聞く除夜の鐘

熱帯の蝶 雪国の昆虫展

あざやかな輪廻遂げよと蝶の翅

しつかりと眉引いてゆく雪の街

絵蠟燭 花燃え尽きて鎮まれり

生駒市 麻生アート

右顧左眄ペンペン草に学ばんか

み仏をハラハラさせて生きて来た

年賀状にはやくも一寸嘘を書き

今は只見知らぬ空に憧れる

来し方が玉虫色に光る午後

寝屋川市 坂上高栄

餌もらう鳩を笑っている鴉

行革は寝て待てと言う丑の年

犁を引くゆつくり大地裏返し

誕生日親子二人の食事会

荒あらしい足音と聞く世紀末

野仏も交通事故に遭った痕

銀行倒産妻がおろおろしすぎて

黙とうの一分ガムは口の中

マリオネットの疲れが溜まる膝小僧

日本語を縮めて親を振り払う

摂津市 井上源一

よぼよぼに成ってあくなき好奇心

臆測と言う物指しに裁かれる

ペン置いてはてさて今日は何曜日

電気メスに両手合わせる冬の蠅

身障の足ひきずるも余命なり

大阪府 八十田洞庵

税務署も妙に気配りこそばゆい

遺産分け揉めてる中に知らぬ人

無理しても次の世紀を見てやろう

汗知らぬ金はやっぱり溜まらない

追い越すと越される気配気にかか

黒石市 相馬一花

ご一緒の墓へどうぞとプロポーズ

お化粧がうまくていつも適齡期

オスメスの区別がつかぬ雪だるま

モナリザの絵が似合わない四畳半

空腹の鳥が無視する木守柿

和歌山市 桜井千秀

真実を突いて肺腑をえぐられる

ちやらんばらん憂愁美人に程遠い

磨かれた鴨居女の怨念か

宛先不明東と西の書き違い

錦の御旗振れば味方が減るばかり

羽咋市 三宅ろ亭

年のせいか無名という字好きになる

丑年か臥牛におちつき習う気だ

油掘り油掘りより油抜き

路のとうへ妻は更なる声をあげ

三月の鎌うち蛙よどいてくれ

米子市 木村春枝

うっすらと埃残して小正月

風動く影も動いて今日動く

心の絵描けない画家のアレルギ―

あの人の通った後は春の香が

春風に年忌法事の年を繰り

出雲市 吉岡きみえ

再会の握手がぬくい雪の街

酒ですむ話いちばんこと易し

嫁にゆく娘がいとし冬暖炉

じつと待つ春にいいこときつとある

雪しんしん猫もわたしもまるくなる

松山市 宮尾みのり

紙人形芯の強さを秘めている

嫁であり姑であり我であり

しっぽだけしっかり出した自己主張

器からこぼれるほどに子がいと

コンビニで余分におでん買わされる

熊本県 高野宵草

旧友となつて近況書く賀状

松三日孫と良寛さんになる

お隣の庭園灯が枕灯

腹がたつ姿婆なり俺もまだ元氣

ミッキ―もミニ―も茶髪春の風

岡山県 大石あすなろ

少女羽化 酒つぐ仕草大人びて

次世紀へわたしの橋をかけ直す

青春の記念にのこす胸ボタン

マネキンが着てれば似合う服だった

疑問符をいつも抱かせるスリガラス

岡山市 時末一灯

百八つ中に祖父母と父母の顔

丁寧な去年の賀状の友は亡き

似顔絵のコピーのように孫がいる

非常口気付いた時は帰りがけ

コンピューターと相性悪いことにする

熊本県 岩切康子

軽快なバイクの音で来るニュース  
新年は守護色変えて上る坂

素晴らしい賀状に記名無いさみし  
待ち合せ六十分をクラシック

白髪抜き何十本で若返る

和歌山市 堀端三男

恩返し済まないうちに先逝かれ  
建前と本音シーソーして困る

ロボットの指示で人間踊ってる

天の恵み四温のうちに旅終る  
めったに無い誘い奇しくもかち合った

米子市 光井玲子

母の芸ひと日ひと日を積み重ね  
マンネリを破りたいから弓を引く

神の森まで開発の手がのびる

この汽車で天国までもゆきたいな  
気ままに生きて恍惚の風しのびよる

静岡県 蘭田 蓑 沓

大晦日ジャンボくじにも見放され  
玄関に松匂わせて丑迎う

控え目に紅ひいて妻三ヶ日

冬の陽はストーンと落ちて滑り台  
弁護士の風呂敷包み抱く希望

広島県 藤解静風

お招きにあずからずとも来るゲスト  
山積みの廃車に呻き声を聞く

葬式で根はいい人とささやかれ  
無器用なところは笑顔で埋め合わす

老残の余熱で明日の詩つづる

松山市 白石春嶺

約束を違えず土を割る新芽  
嫌われぬ為にも貯めている老後

まぼろしの天女が降りる席がない

泳ぐのが下手で冷やめし組にいる  
あんな高い山に暮らしの灯が一つ

岸和田市 高須賀金太

淡々と病状明かす友の顔(柳友入院 三句)  
正月も温い病院いいと言う

負けるなよ春はもうすぐそこにある

買うつもりないけど試食だけはする  
割り勘で飲めば政治は奇麗のに

弘前市 斉藤 苺

成人の誓い高らか茶髪達  
核燃反対一坪の地主とや

真冬日の赤い苺は嘘つきだ

人質を想うなんでもない時間  
窒息をしそうでゴムの葉を磨く

高知市 北川竹萌

暗唱で祖父説き給う国づくし

馬路温泉一期一会の明ける新春

何時来ても里で交わる声温い

餌を撒いて鳩に囲まれ八十半ば

故郷より長薯届く十二月

弘前市 今生恵子

四国旅 漱石の湯に満足し

冬さんご小鳥を待つて朱く熟れ

雪晴れに木花咲かせる岩木峰

銘柄米オンパレードの日本国

春の宵猫はいずこに行つたやら

大阪市 川端一步

直筆の賀状が妙に温かい

文章が荒れたら幸田文を読む

引くことも覚えて将棋強くなる

詰将棋ひとつ作つて日が沈む

昨年の自己採点は中の上

大阪市 神夏磯典子

人を恋う一途に魔法かからない

皮下脂肪木枯らしなんか恐くない

びんずるさん深い祈りに光つてる

反省を促す鏡ありがとう

野茂イチロー 妻が元気になつてくる

河内長野市 井上喜醉

はらはらと柿落しのかぶりつき

台湾でご親切にも風邪もらい

還暦を祝う我が家の古時計

飲み込んだ言葉の嫌な咳ばらい

玄関で妻の小言に襲われる

寝屋川市 堀江光子

一年の凝縮ここに日記帳

米朝をテープに父の寝正月

年始客ワインよろこぶ人も居て

見よう見真似夫のつくる卵酒

救急車一そう深い闇残し

宝塚市 中田純次

長谷観音 光背に似て虹の橋

老夫婦ラスト楽しむ花と旅

メイクドラマ遂にラストを飾りえず

函館の山手教会絵のメツカ

老い淋し酒酌む客の遠ければ

鳥取市 前田一枝

旬よりも一足早いハウス食う

ご破算に願いましたのくり返し

麦踏みの思い出を持つ足の裏

ルールにはあつた逃げ道しめてある

袖の下みんなはたいて無一文

出雲市 伊藤寿美

孫の名で嫁から届くチョコレート  
越境のツルウメモドキ切って活け

初孫のシランQ聞き歳を越す

ふと反乱を呼ぶ声を聞く冬の駅

昨日のことが思い出せずにいる日記

唐津市 市丸晴翠

往時茫茫 歴戦の父日向ほこ

衆をした分だけジムで汗を掻く

箱根路を初荷とたすき競い合う

一枚の絵馬をはみ出す子の願い

除夜の鐘やっぱり仕舞い風呂で聞く

唐津市 久保正剣

ライバルの自負が手酌で動かない

コキコキと妻を悩ます膝の音

口説いてもよきにはからえとは言わず

椅子一つ空けて座ったのが答

不確かな世に逆らわず従わず

唐津市 山口高明

雨の日は出ますと怖い事故現場

越して来た時の景色は消えちまい

本当は淋しい方が分かつてる

急患へ飯を食べたべ物を言う

ピル持った女性が肩で風を切る

富山市 島ひかる

魔のカーブ花の命が散り急ぐ(金山夕子様)  
銘水へ今日のいのちを確かめる

何気なくした指切りに縛られる

知り初めし頃の香りを付けてゆく

水中に流れを秘めている湖面

鳥取市 武田帆雀

餅搗きに一役火焚爺になる

飾り編む指十本は皆動く

さあ来いと内孫外孫松相撲

煎餅の座布団爺に客が来る

福よ来い私が拘った注連飾り

大阪市 玉置英子

ガウデイの塔あり昔バベルの塔

今思う七十歳は若かった

見ている間 私のもので大き虹

板わかめ好きな母から板わかめ

明日しよう昨日の午後もそうおもしろい

茨木市 堀良江

折りじわ一つ新札のたどる道

誠心誠意変な小道具使わない

話題切れ母のこと孫のこと

読み終えぬうちに開いた水仙花

花道となる日のために今日を掃く

豊中市 滝北博史

孫たちに原爆ドーム見せる旅

通院の子定日に丸初暦

初夢に重油ひろがる日本海

医者通い七草がゆを食べてから

心当りない女性から年賀状

弘前市 高瀬霜石

組板の音に正しく眼が覚める

感情線なんともやっかいなものだ

遠くから見るタンポポの美しさ

病人がでて守備位置が入れ替わる

急がない旅なら望むところだが

吹田市 栗谷春子

大切なところはとばし読む新聞

回り道し過ぎて未だここに居る

正月が過ぎて太陽丸くなり

おうおうと話が合うてお正月

糞虫よたまには這うてみておくれ

唐津市 浜本ちよ

何もかもうといがいっち親思い

きりようには自信ない娘の笑顔よし

これダイヤン化け猫の如大きなれ

わたしから離れるでないねーダイヤン

出来不出来血液型でけりをつけ

守口市 森川まさお

轟めいた巷へ遠く除夜の鐘

橙色の風船のような初日の出

初日の出 釣り舟動き回るなり

屠蘇さめて一筋町のもの音

正月や人ごみの中あたたかし

大阪市 本間満津子

ボロにまだ継ぎ当てている智恵袋

その過去を笑うて話す現在が有り

嫁のうどん寒にころもあたたまり

母さんが追剥になる晴つづき

待ち切れぬまだ寒そうな春の服

弘前市 中山雅城

特急は温泉駅を忘れない

平平凡凡平和の鐘が鳴る

ノートから青いインクの匂いする

七草の粥で胃袋整える

一粒も無駄にはしない四十雀

仙台市 川村映輝

トータルで見れば悔いなし九十三

倅せの最中血圧二〇〇越え

予期しない居眠り予定変更す

職業紹介所煙草の煙とジュース缶

年一度来る孫も居てお元日

東京都 山口新子

主のいない部屋で目覚ましやかましい  
今一番ほしい君との長い夜

逢うてきて意気揚々と朝掃除

以心伝心師走の空の青さなり

欠落の心を埋める古手紙

鳥取市 倉益一瑤

ぬくい手をアホな女で持っている

にぎりめし指の太さは母ゆずり

迷う心をねじ伏せて書くさようなら

あの人があつたしの芸に気付かない

バラ色を全部さらって嫁に行き

和歌山市 宮口克子

あなたにもわたしにもある別世界

嫉妬して下さったとかアリガトウ

朝刊を心の糧として出社

その後で安全装置とはいかに

ありました今年最後の探し物

倉敷市 田辺灸六

生かされて生きて絆にある重み

老いの目に浄土がちらり西の空

牛の角真正面に初日の出

無理するなすくなく歩く丑の歳

生き伸びた友を数えて寝正月

大阪市 大塚節子

色足袋を履いた女の暖かさ  
すき焼の世話役しつかり肉を食べ

何事もなくあけてましてまず一献

風邪声で色気ある経和尚さん

呉越同舟 襦袢の朝の露天風呂

出雲市 小玉満江

自販機と千円札の押問答

花の道一句拾って又歩く

猫の爪切って猫を抱いてやる

混浴を一寸恥じらうまだ女

世の流れコンクリートの高瀬川

香川県 堤くに子

七癖が滲み出ている父の靴

煩惱も吸い込まれそな枯山水

裏木戸の手垢に母の泣き笑い

襖絵に栄華を偲ぶ二条城

気付かない振りしてくれる母が好き

岸和田市 寺田甚一

エアメールで初めて賀状孫に出す

五十年まだ独りでは決めかねる

品物も見ずに飛びつく福袋

日の丸が消えて昭和も遠くなり

えらそうに天下憂える評論家

横浜市 菱田満秋

小児科へ来る母親も感冒を病み

トロフィーを並べて過去をなつかしむ

一周忌すむのを待っている話

逢えそうな予感へ爪を切っておく

富士山へかかって雲がうらまれる

和歌山市 山口三千子

出る杭は無言電話で打ちにくる

無農薬虫もおまけに買わされる

夢にまで隣の猫のフン掃除

一枚の賀状肺癌らしい友

歳月が六十路の坂を押してくる

米子市 政岡日枝子

姫ダルマのように座れる七ヶ月

八ヶ月仁王立ちから歩けない

九ヶ月みんな歩いた血筋だよ

流行ではないが可愛い名で呼ばれ

サクラの頃はお手々つないで歩けるね

大阪市 大河未佐子

子に従うまえにちよっぴり好きに生き

詫びられてあの人の夢見なくなり

床の間の席が空いてるお正月

劇場を出てもお七が付いてくる

この道と決めて素足でふみしめる

藤井寺市 福元みのる

風邪馬鹿にして五日まだ咳続く

闘病と力まず和解して癒す

おしやれストップすると老化は進み出す

礼儀正しい人ほど艱難にも強い

忘年の友から生きる知恵学ぶ

八尾市 高橋夕花

色即是空 何度唱えてみたとても

ひさかたの和服に帯が定まらぬ

年賀状百枚繰って会えぬ人

蘭の鉢気どってみても妻の部屋

だんだんと三時のお茶が濃ゆくなり

尼崎市 春城年代

寒牡丹の藁合掌のかたちして

限りある命に対す 明けそめて

会者定離 日頃忘れていたことは

逆縁を受けて老母のことば無し

死ぬること人ごとならず波の音

弘前市 蒔苗果林

寒さより墮落心が着膨れて

編集がまた一点に引っ掛る

しぶとさで胡坐に太い根を生やせ

先の春見えてから葱青くなる

忙しいそがしいとて死に急ぐ

青森県

西谷大吾

京都市

山海友熙

遮断機の向こうに嫌なヤツがいる

吊橋の上で決意が軽くなる

出稼ぎの父がネクタイ締めてくる

伝言を風に託して旅に出る

秘められた過去は問うまい雪女

弘前市

相馬銀波

八尾市

宮崎シマ子

還暦の丑 稲藁を食み直す

鋸 鋏 農夫は冬も休めない

種蒔きの前だ今年の資金ぐり

雪を掻く汗が無職を慰める

背伸び以後 足踏み続く日記帳

豊中市

田中正坊

終日在宅わたしの冬ごもり

緩急と軽重を知りうろたえず

忘れたいことが頭をはなれない

今宵またヘップバーンに逢うテレビ

古希古希と言うてるうちに喜寿がくる

羽曳野市

吉川寿美

いななきの向こう新世紀の幕開け

人間臭く生きて人間やめられぬ

業深し女人高野は時雨する

ひよっとこ面つけて柩に納まろう

河童伝説ふるさと創生は幻

雪解けの水汲む母の頬かむり

梅の香が匂う彼方に棲む母で

梅一輪母の乳房を恋しがる

梅匂うわたしも匂う二年坂

手を握ることを忘れた梅の花

和服着ると父上になるお元旦

ベীগマを二つ飾っているレトロ

気の早い芽吹きを見るに風邪の床

一人臥す一人に皺よせやってくる

夫の炊いたお粥をがまんして食べる

西宮市

奥田みつ子

かもめ群れ武庫川今日も恙なし

頬杖に天の竖琴虹の橋

満ち足りてこれから引き算のくらし

父のハガキ隅に小さく花のこと

行革行革靴を鳴らしているばかり

大阪市

板東倫子

酸欠になって不況の年暮れる

革命のエネルギー欠く我が頭脳

妻たちは松田聖子の肩を持つ

七草トントン新世紀までするつもり

アムラーがたむろしている戎橋

鳥取県 鈴木公弘

元朝の見目うるわしき陽が昇る  
何はともあれ目が覚めておめでと

大吉を財布に仕舞い込んでおく  
お年賀に子連れ狸がやってきた  
寒いから福笑いでもしようかな

鳥根県 堀江芳子

恋しそう冬陽寄りくる足元に  
相傘の重さに負けずやつと喜寿

初鏡変らぬ顔で喜寿と言う

頬杖の不機嫌もどらない返事

叱られる歳になつたかなと笑う

鳥根県 堀江正朗

ひとときの軍歌 戦盲まぎらわす

白杖の行く道決めている心経

酒の味心にしみる雪しんしん

髭をそりながら度忘れ気が付いた

戦盲に歳も手伝う聞き違い

鳥取県 大角正道

空を飛びたい風船をふくらます

四季折々花火の似合う空がある

雪化粧ホームシックになる私

たくさんの夢を残している写真

弱いものいじめのように花を摘む

鳥取県 土橋 螢

あつけらかんと平成も九年春  
青春をもどしてくれる夜明け前

琴弾いて春告げ鳥を呼び寄せる  
慎しみの塩一匙が効いてくる  
天地人真っ白にして雪のんのん

唐津市 山門 幸夫

初夢でハナハトマメと元氣よく  
乳牛も仔牛も楽し年賀状

老牛の行く手は霧の大草原

お年玉手刀切つて並ぶ孫

独り者皆片づいて寂しいな

唐津市 山門 夕三

初日の出輝き違う昨日今日

息子嫁 孫居て屠蘇の味がよい

病んだ身におかゆの温かさ

引かれ行く牛の鼻ぐり頑固なり

牛歩でも思い出作る旅を行く

岸和田市 岩佐 ダン吉

核があり平和守ると言われても

仮設二年もう人災と言うほかは

ユニークなご意見ありがとうとだけ

イニシャルで女神日記に棲んでいる

桜散るレールふる里へと続く

鳥取市 春木圭一郎

おしどりを装う仮面欠けてくる  
わが子らを鷹と信じて育て上げ  
かこの鳥住めば都と飛び立たぬ  
恋心つれば鳥や風になる  
渡り鳥隣の国を語らない

和歌山市 田中輝子

ちちははの封印剥がす世紀末  
子離れのはるか彼方の桃の花  
外灯に少し離れて人を守つ  
帽子の似合う人を警戒してしまふ  
これも冬の所為だろバス停の無口

寝屋川市 岸野あやめ

外国でレディらしくの心がけ(シンガポール紀行 三句)  
一番はホテルの朝のパンの味  
薔薇一輪オープリティと貰います  
胃カメラがシロでよかつた小豆粥  
カサブランカ買つて後顧の憂いなし

大和高田市 岸本豊平次

苔の松 洋花添えて初春の床  
妻病んで年末年始のごみが出ず  
会いたくない人を追い越しそうになり  
気になって覗く長風呂 軍歌聞く  
問診を笑って聞いた聴診器

富山市 舟渡杏花

寄り添つて実らぬ恋の雪の道  
ねんごろに仏飯 母の忌がめぐる  
疑えば音いかかわし鳩時計  
こり性の妻がすすめる加菜めし  
生き死にの話 団子へよく弾む

藤井寺市 吉岡美房

新年の晴着は僕の情熱だ  
元日へ軟着陸が出来たよう  
改まり去年と違う酒の味  
祈るだけ励ますだけの危機管理  
出世して螺子が段々甘くなる

茨木市 島元ふみ

思い思いにラストダンスを老い二人  
子や孫に育てられたと思う今  
五十年約束通りまだ夫婦  
この腕に抱えた孫を見上げてる  
親心美人と思うお振り袖

八尾市 宮西弥生

打明けた本音 逆転して他人  
コンピニの味に慣らされ生きている  
打てばびびくそんな細胞が吐く本音  
急がねば急がねばから切れた日々  
早春の光 茶の間を空にする

大和郡山市 坊 農 柳 弘

二月堂春先達の修行僧

追い出した鬼の寝床へひな飾り

結納が届く佳き日の朝の膳

三月は粗目の雪が降る小樽

三寒四温 梅一輪が迷ってる

倉敷市 井 上 富 子

ティータイム戦後の唄を聞きながら

芳醇な香りが誘う古のれん

肩書を振るいおとした裸木かな

ユニークな風を孕んだイヤリング

張り裂ける胸を繕う一人旅

和歌山市 玉 井 豊 太

手応えの運に背中をむけられる

夢抱いて舟はしずかに帆をはらむ

進めすすめ父は責任とってやる

手で囲い育てた蓄咲きはじめ

泡となる意見を持って進み出る

香川県 川 崎 ひかり

アイウエオこの順番は変えられぬ

一粒の種が知ってた進化論

人間の芝居をサルが拍手する

今少し強い風待つ草の種

湯タンポのようなお人がそばに居る

和歌山市 山 田 高 夫

底辺に生きるしかない深海魚

そっぽ向く他人ばかりの寒い街

聖職という名に遠い凡教師

返せない恩義が敷居高くする

空振りの人生それもよしとする

米子市 中 井 ゆ き

せめてもの腹いせだまし舟を折る

地図ひろげ今日は東北旅をする

鬼でもいいやさしかったらついて行く

春盛り人間やめて花になる

虫たちも裸足仲間だ裸足の子

岸和田市 長 谷 川 呂 万

満点に孫と勝負あげて褒め

入相の鐘にしみじみ父祖の家

あなたを愛すために生まれてきた私

老いらくの恋ひたむきにひとすじに

新世紀国の姿が見当らず

倉吉市 淡 路 ゆり子

たしかさは老ゆることのみ深い皺

ひとときの伴せ掬う花の下

途中下車こころを癒す灯を求め

仏間からわたしの朝が動き出す

七十二歳ボケと迷いの今日この頃

岸和田市 古野ひで

元旦の目出度さ父の笑顔から

早々と初詣でらし話し声

牛の目のあの優しさには勝てませぬ

世にうとい老いの哀しきひとり言

初雀その明るさに勇氣湧き

鳥取県 林 露 杖

だらだらと生きて八十うしの新春

小春日に恵まれ老いの年用意

熱かんと生そばで除夜の鐘をきく

落人の姫か菰着た寒牡丹

小四の孫と書初め墨匂う

米子市 野坂なみ

こみ入った話 円陣つくりましょう

雲行きで海のこころを知る岬

今あなたに逢えばこの腰ピンとする

お寺では点数かせぐおばあちゃん

初春の惨今年は海にやってくる(ロシアタンカー事故)

島根県 小砂白汀

酒うまし米寿の酒はなおうまし

昼の月 呆然自失という姿

七草が土手から消えて川が痩せ

お正月こちら駅伝あちらはゲリラ

ラヴコールすれど雷鳥しやがれ声

堺市 山本半銭

大きい月明日太陽になるのかな

鬼と子等相性がよい福笑い

くたくた鬼福豆欲しい人恋し

子を負うた鬼で前歯が欠けている

生きている褒美に燃える紅をさす

岸和田市 田中文時

炊事洗濯 男だつたら過労死だ

二次会でやつと満足した酒豪

目を見張る十年振りに逢った姪

フルムーン松竹梅の竹の宿

のんびりと行革亀の歩みです

鳥取市 杉本孝男

妥協せぬ相手にあぐら焚められ

横やりが出そうだ早く手を握る

借金がうまく社長に見直され

叱られる時は我慢の亀になる

横着を叱るな末は発明家

弘前市 岡本花匠

一徹な防風柵カッヂも笑顔春一番

春の序曲 背伸びした目に猫柳

ヒヨドリへ父意地になる鳥威し

啓蟄や結跏趺坐とく万歩計

スコップ持ち長靴を履く春の墓参

和歌山市 福井桂香

押ピンも新品を選びカレンダー

苦も楽も反芻をして年女

鶴唳の響き合うては冬の底

早春の街に出て愛ふわり恋ゆらり

天気図に重なるわたし低気圧

京都市 都倉求芽

今年こそきれいに終えたいカレンダー

今の天皇に帽子など似合わない

もう時間ないのに新聞放せない

なかなか塵もつもらぬ低利息

次々と弦が切れゆく社民党

岡山東 江口有一朗

いつ何が起るか隣に救急車

スイッチオン老いが一人で住める訳

忘れてはならぬライターの仕舞い場所

投げたもの己に返るプーマラン

かけた者同士と夫婦のうまが合い

川西市 氏林洋敏

日の丸を誇りに思うお元日

なんべんも落ちたことある陥し穴

お隣の声は聞える耳である

食べて寝るだけの正月風邪を引き

着飾った娘に少し安堵する

大阪市 町田達子

噴水の虹の向こうは考えず

淋しい時不思議と元気な句に出会う

しみじみと現世 憶良の歌をよみ

探梅の足蠟梅の香にむせる

大らかに牛たち未来へのたりかな

倉吉市 野口節子

叩かれて蹴られて何で笑えましょ

欲望の火だるまになることがある

泣くな泣くなと言う母さんが泣いている

世渡りにおとぼけ薬持っている

はみ出したところが良いと申された

岸和田市 芳地狸村

福あめが昔の顔でうけている

戎さん投げ賽銭の危険球

金婚の初春を寿ぐ屠蘇の酔い

手づくりの彩あざやかな年賀状

遠い日の美女に騒いだ同窓会

竹原市 時広一路

蕾から明るい話聞きだそか

プライドを持たぬ花などあるものか

生き方を変えたら僕でなくなろう

助け合う幸を達磨は知らぬだろ

雨の粒数えてみたら恐かろう

和歌山市 池 永 正 甫

焚火には思い出達も寄ってくる  
物置で無聊をかこつ登山靴

心齋橋ひよっこりネアンデルタール

のろのろの暮しに地球一回転

世の中は広いと知ったはぐれ鳥

岡山県 二 宗 吟 平

書き替えた賀状震う手なお震え

ファックスの便り私も文化人

カレンダールの丸に慌てた服や靴

美味しいな孫の馴染みのみそかそば

亡娘の縫うた寝巻を着れば冬知らず

高槻市 川 島 颯云児

追い風へ心の鍵をたしかめる

長い人生泣いて笑って夢芝居

拭いても拭いてもにじみ出てくる汚点

風は他人で人の古傷掘り起こす

真ごころをうっかり踏んだ土踏ます

大和郡山市 榊 原 慧 心

ただひとつ父の自慢の家に住む

コーヒーを黙って飲んでさようなら

帰り道ちよつとスタミナ補給する

白髪の父がだんだん叱らない

一生に一度の啖阿腹にある

京都府 稲 葉 冬 葉

水仙にこだわり新春を祝うなり

どんくさい奴が一番先に酔い

筆の立つ友達が居て書道展

インフルエンザ看護婦をひとり占め

パチンコ屋を出ると血の気が引いてゆく

寝屋川市 籠 島 恵 子

年の暮れ早口耳にこころよい

あなただとわかる名前の無い賀状

心ホロホロ塩まんじゅうの口あたり

妻にだけ敷居が少し高い家

大人だな思ったとおりに言わず

西宮市 池 田 善 守

心配の先取りをして悩む妻

元気な顔思い出させる年賀の字

叱られた先生慕い年賀状

不意の客慌てずにする部屋がもて

電話でノー会えばイエスに変わる人

出雲市 小 白 金 房 子

元朝だ真つ先牛におめでと

飼葉桶並ぶ牛舎も新春の音

どつしりと慌てぬ牛の目がやさし

牛飼で生きる健康今を謝し

牛市のみやげ鯛やき買ってくる

鳥取県 さえき やえ

この家継ぐ孫と境界線あるく  
経験はないが離婚をいさめたり  
せちがらい世に春の種まいておく  
ここいらで手を打ちましょか花が咲く  
春の雪パンジーたちが気にかかる

高槻市 井上照子

快活なあなた私の良い菓  
缶ビール呑むと周りが動き出す  
新年を祝う御節は娘の心  
みえすいてお若いですねでも嬉し  
婿殿よ時には無理も言い給え

茨木市 藤井正雄

自分史も下巻に入る古希祝い  
他人めく妻の帽子とする旅行  
日曜大工道具広げただけで昼  
古里の庭懐かしい井戸と柿  
下町に春の絵を描く水溜まり

弘前市 小寺花峯

正直に愚痴を聞いている皺の数  
歯ぎしりが出来ぬ入れ歯に酒は溶け  
紫陽花がとっても好きな雨上がり  
砂浜に捨てた孤独は北の果て  
均等法後ろ姿じゃ分らない

東大阪市 森下愛論

手折られた柳芽を吹く春の風  
不景気と言うてる割に飲み歩き  
酒は爛片意地なほど癖を持ち  
気の弱さ正座し直し盃を受け  
圧迫を感じ返杯差し控え

岡山市 小林妻子

冬晴れ間冬耕田が待っている  
正月返上冬に厳しい米作り  
冬耕の畦 雑草の強さかな  
寒の七水雪も降り雨もふれ  
栄養剤ばかりで騙す米作り

呉市 榎田英詩

わたしにも冬が来ました仏さま  
輪の外の自由少しはさみしいが  
ベレー帽似合う似合わぬ煩いな  
混浴の乳房よ自惚れすぎないか  
形見分け値のない物は残りおり

枚方市 海老池洋

原発の反対叫び不眠都市  
願うにも五体投地とお賽銭  
万歳の手の伸びる時伸びぬ時  
白鳥が眠る お祈りするように  
赤福も本店で食う別の味

米子市 青戸田鶴

まだ咲けぬ花だがきつと春は来る

米子市 永井三津子

お正月古い道具を出してみる  
小春日はあれもこれもとかけ回る

不運生き米粒ほどの幸に酔う

陽の当る方へかたむく冬の花

泣いている挫折の中で母を呼び

顕彰碑除幕へ冬日温かい

デュエットで三分間の妻になる

黒ビールで別れ惜しんだブラハの夜

手酌酒胸がきゅんきゅん人を恋う

出雲市 板垣夢酔

香川県 木村あきら

ウインクで男脳天断ち割られ

あの時にあの人が居て今日の僕

真っ直ぐにお金も蟹も歩きたし

進まない議論お酒が出て進み

妻病んで長女がおんならしくなり

鳥取市 両川洋々

追いついた途端に霧が深くなる  
藤井寺市 中島志洋

真っ先に君が玉砕してみせろ

こっそりと鬼にも歳暮送つとく

公約の虫干し忘れないでくれ

ふたありのルールわたしに逝く

サラエボよ神様だって泣きなさる

倉吉市 米田幸子

上役の奢りと聞いて弾む酒  
弘前市 須郷井蛙

都落ち酒が五臓によく馴染む

肝臓と胃の消毒は酒でする

プライドが邪魔して輪から外される

フルムーン笑い袋も提げてゆく

女であることをとことん武器にする

マイホーム目ざし夫婦の白い息  
じつと待つこれも修業か診察券

竹原市 岩本笑子

ライバルの影を時々飛び越そう  
春の扉はきつと優しい音がする  
少しほころびて水仙の気高さよ  
霜柱 大地と対話して飽きず  
寢言でも仕事してます夫の顔

島根県 松本文子

愚かものまま鉛筆を削るなり  
それだけで倅せだつたお茶の味  
七曜のわたしの癖も年をとり  
落ち葉踏んでも知らん顔して今日  
空を見上げて雪と戦う日を数え

米子市 林荒介

分け入った森のわたしの指定席  
たましいの在り処に石を積んでいる  
見事な壁だ一言も洩らさない  
裸木の森で心がよく判る  
脈搏も父の寝息のままにある

松江市 舟木与根一

夕やけ小やけ烏決まった家がない  
日本はどうなる凄い紙おむつ  
ポチも俺も飯の時間は小うるさい  
父さんを理想に伴侶探します  
牛歩にも屁理屈があり春炬燵

弘前市 高橋岳水

穢れなき出稼ぎ村の雪の色  
何もかもすつぱり包む雪温し  
寒雷のそれから迷いふつ切れる  
生き残り策へ苦言も入れておく  
抜け落ちた髪に現実見てしまふ

堺市 板尾岳人

靴の紐きつく結んで人嫌い  
気の弱いパズルだ恋をしています  
梅の香ややさしき男眠るべし  
おい妻よ川の流れを変えろべし  
チーズケーキ欲しいと思う胡蝶蘭

大阪市 川内叭笑

愛し娘の晴れ着姿に涙ぐみ  
愛し子の初の土産は着払い  
金運も僕のとこだけ避けて行く  
人様に階級つける文化の日  
アバウトな彼も女にや緻密です

西宮市 西口いわゑ

古い椅子ごめんね処分することに  
風邪の床すこし甘えてみるもよし  
トンネルを抜けて人間らしくなり  
二重まるの妻演じようとて疲れ  
美しい笑顔返事と思ってる

鼻唄は実験室の恩師にも

町田市 竹内紫鏘

お城から脱け出す奇策 詰め将棋

フェイントをサクラが演じ詰め将棋

頻尿の話題で終えるクラス会

エートエートの癖ひどくなるキー操作

豊中市 月原方郎

年金によくやく慣れて年暮れる

紅白を見ながら写真整理する

大正もだんだん遠く除夜の鐘

元氣だそうあと三年で新世紀

客待ちのタクシー見切り発車する

八尾市 吉村一風

初雪に器量を上げたくにの山

無防備な笑いの続くうまい酒

トイレに貼るカレンダー選る大晦日

重ね着を笑う声する冬木立

踏まないでくれと雑草花を付け

神戸市 木村貴代子

恋人と歩けばなんと近い家

愛深き父は言葉を知らな過ぎ

健忘症だから元氣でいるのかも

親の愛重たすぎると言う若さ

娘には多めにとつてある予算

岸和田市 原 さよ子

とつときの酒の封切るお元旦

ばあさんの話し相手をする女神

手袋へ母の祈りも編み込める

気くばりのお茶で話もほぐれ出す

晩学の頭をもやが追ってくる

岡山県 山本玉恵

わだかまりほぐして初春の風の中

たった一人の視野にあしたの服を選ぶ

糸口を掴んでからの迷いぐせ

忘れ上手世渡り上手だったかも

逢うだけで良かった和んでいる空気

岡山県 福原悦子

素うどんのあじわい初心取り戻す

遠い日のロマンを秘めて六十路

老いてなお小さな欲にけつまずき

定退の鬼にあじわう人間味

恋を得て女の顔が冴えてくる

富士宮市 渥美弧秀

富士あざみ老夫婦に語る万歩計

傘寿すぎて詩と音楽が杖となる

望月の夜兎はどこで餅搗きか

お彼岸は其処まで来てる父母と会う

記念切手無沙汰を詫げる使者となる

春風に破魔矢鏑矢とびたがる  
春開く青春沸かず遠花火

高槻市 芦田静江

トンボリの鏡開きに春匂う  
ままならぬ期待に外れた蛙の子

身がまえてホップステップ傘寿の譜

出雲市 板垣草丘

賽銭は神の薄目の届く位置

茶に呼ばれ隣でお酒小半日

雪ぞりは息子洗った金盥

ご年始は明日 香典 今包む

牛の尻眺め田起ししたこと

竹原市 森井菁居

廃船のロマン見つけたベレー帽

暇つぶしだから釣果は当てにせぬ

記念日や妻とタンゴを踊らんか

西空ヘドスンと冬の陽が落ちる

会者定離ほろほろ山茶花散る日なり(N氏へ)

生駒市 北山悟郎

初日の出 進軍ラッパ耳を打つ

白雪へ心が燃えて白くなる

生き抜き義肢を励ます青い天

羽根布団 親想いの娘有難う

右顧左眊しては正道歩けない

ひと区切りつけて男が寄る港

荒波を越えて港の温い風

サービスに女難の相と古い師

熱冷めて割り勘などと言ひ出され

隙間風吹いて酒量をあげている

堺市 吉本菁風

寅さんが身内の中に居て困り

あの人も百科事典の域を出ず

神様と言われ規格に嵌められる

心意気男専科でないと言う

金の有る不幸を一度して見たし

交野市 福崎しげお

世話役という名で元日焚き火番

生きる夢捨てぬ証拠のドック入り

古稀の春旅は牛歩でマイペース

つわものが襖を終えし赤絨緞

公約は方便ですと憚らず

米子市 石垣花子

指切りをした事までも忘れてる

おそろしい力を持っているカード

脈打って居ては渡れぬ三途の川

霞ヶ関に取りもどしたい青い空

時々私は私を飾る嘘も言う

和歌山市 青枝鉄治

青森県 諏訪柳々

億の金つかみ演じるサル芝居

津軽三味鳴れば寒梅ひとつ落ち

野次だけの議員が税を食い荒らす

大粒の涙亡母がくるまでとっておく

たかっても献金というザルで逃げ

冬の山天女の如くヴェール着る

札束で着けたバツジに錆がうき

荒れ寺の朽ちた仏の指二本

解散を待つ一票の敵討ち

訛りないことばでふるさと語りおり

奈良市 天正千梢

十和田市 阿部進

玉手箱そつと開けたしみんな留守

ポンコツのような政治家ばかり増え

ざるそばを肴にしてる昼の酒

生き甲斐は妻と二人で食べあるき

金は二の次手ごたえがほしいんだ

嫁さんに勝った姑孫に負け

大往生落ち葉から枯れ切って

プライドが高くて群になじめない

こころざし半ばか赤い葉で落ちる

現代っ子喧嘩の仕方わからない

豊中市 井上直次

鳥取県 津村八重子

きついこと言うて言われて老夫婦

さんま焼く煙出ずとも味の良し

派手に旗振ったが誰も来ていない

三つ子よりおとる頭脳にむちを打つ

派手な服着ればくすくす笑う影

花言葉信じてくらす平和な日

新世紀へ一歩一歩の除夜の鐘

雪帽子ぬいですつきり春はそこ

松原市 玉置重人

西宮市 秋元てる

することもないのに早メシまだ続き

一病と仲よく暮らすノンシユガー

塩分を仇のように余命表

雪のない都会で喜寿を祝う幸

脱稿のペンにコーヒーよく香る

古里が恋し手毬の手がそれた

てっちりの湯気年金が振りこまれ

福寿草 母の形見の小物入れ

今日と同じ明日がある顔老母眠る  
忘れたいの細々と日記帳

岡山県 矢内 寿恵子

今年また牛歩で行こう一里塚  
使途不明増やし税金上げすぎる

リベラルの主張も時にゆれている  
しがらみの重さに軽くなる命  
再会へ割符の合わぬ五十年

鳥取県 羽津川 公乃

身勝手に余命忘れたスケージュール  
未練なく捨てて男の大掃除  
助手席も居ねむり防ぐガムを噛む  
古い二人法務大臣名を知らぬ  
防寒防災 古い帽子も春を待つ

出雲市 竹治 ちかし

金で済むことでいい人悪い人  
衣食住足り雑草の美しさ  
青空を見せても冬は冬の風  
八十の母が五十の子を案じ  
酒煙草止めぬ長生き法をとる

島根県 西村 早苗

ぼく一人長靴 乗り替え駅の下車  
笑い顔してるが観察してる顔  
めったに見ぬ夢だマブタは開くまい  
隠居部屋テレビがあつて酒があり  
添え書きのユーモア巣立った娘の便り

大阪市 津守 柳伸

風邪気味が晴れば戻る旅カバン  
あま酒としみじみ過去を振り返る  
梅の里 見晴し台の緋毛氈  
過去未来繋ぐボートの高千穂峡  
風花や恋も樹氷も一瞬に

奈良市 宮口 笛生

無職なり今日も名刺の要る処  
ぎつしりと無職につまる予定表  
除夜の鐘親友一人失いぬ  
禁酒など今も思うた事がない  
最後には酒で死ぬよと満足す

米子市 木村 富美子

反抗期父もあの日を思い出す  
ゼロからの出発だから飾らない  
ぐつぐつと命あずける羽根ぶとん  
やり過ぎす事を覚えた腰の位置  
ためされて梢は風に逆らわぬ

弘前市 一戸 ツネ

南無南無と獄窓の月照り映える  
警察に指紋とられたことがある  
指揮棒のリズムに酔うた無我の蠅  
伎楽面明日のわたしが隠れてる  
自画自賛仮面の下はデスマスク

一病の歩調心得寒の道

刈田市 茂見 よ志子

羽繕いせねば明日へ飛び立てぬ

水仙は葉ばかり陽ざし薄き庭

黄昏を嘆いた峠疾うに越え

西宮市 亀岡 哲子

流感へ家族の絆歳明け

更地の隅の大根を抜く笑い声

ノックして確かめあっている愛よ

二人して生きるクイズを解いている

八尾市 大内 朝子

パツと咲くさくら只今準備中

逢いにゆく化粧が匂う日のうらら

わたくしの全部が声になる好きよ

わたくしの勲章かもね笑い皺

鳥取市 岩原 喬水

老妻の主張に太い芯がある

子の顔が他人に似てるあやしいぞ

バラ色の肌に観音様が棲む

人生は鬼や仏になって老い

岡山市 井上 柳五郎

生きてるか確かめるよう賀状来る

入院も二度しましたの年賀状

病名もあらためてふえ初春迎う

ことしまた搦かず買ひ餅雑煮食う

無愛想な老父が泊って行けと言う

恋に生く娘がうらやまし味方する

飽食の鳩もわたしもよたよたと

飼い主の身勝手服着せりボン付け

伊丹市 小熊 江美

夜明けの唄大好き本日午前様

直線の道を探した永田町

初産の女は母の顔で待ち

楽しかったと病院から祖母帰り

岡山県 萩野 鮫虎狼

記念樹の枝がどンドン張ってくる

ボンコツが休耕田に寝てしま

田園に墓地あり家はまばらなり

休耕田の枯れ草食んでいる牛よ

鳥取県 乾 喜与志

家中を磨きひとりの初春を待つ

幸せはこのままでよいサンマ焼く

白昼夢ポケットベルに起される

何かある与作がネクタイしめて出る

高知県 赤川 菊野

糖尿病分別もせず客と食べ

万歩計三ヶ日過ぎ付けてゆく

正月の酒も見ただけ惚けた肝

積んで来た過去の手記をキーで打つ

岡山県 岩道 博友

ひよつとこの顔でおさまる福笑い  
川西市 松本 ただし

ぞんざいな口に情けの滲む語尾  
靴底をほんのり受ける河川敷  
喋らないから連れ歩く影法師

大阪市 黒崎 恭子

大地ふむ牛のようにと此の一年  
初詣でまじめな顔で父 息子  
早ばやと石切さんへまた願ひ  
もち焼けば何故かむかしがよみがえる

香川県 山地 マツエ

よく転ぶ男も女も倦怠期  
極楽へ行ける気である遍路杖  
病む友へ贈る言葉を選っている  
湯どうふの中に溶けゆく痴話げんか

池田市 岡本 吉太郎

お人好し飲ませば秘密ころび出る  
丑年に牛歩で無難に渡りゆく  
しくじって派手なジョークでふきとばす  
腐敗汚職 日本沈没正夢に

北九州市 梅田 宣司

会心の笑みを浮べたのは女  
歩きつつ聞こう話のつてくれ  
山を下りるともう謙虚さを忘れてる  
檀山を反対に行く救急車

寝屋川市 後藤 黎之助

裏口に金庫が置いてある役所  
ねじ捲けば動く時計を恋しがり  
水溜り子供に傘をさしかける  
総選挙済めば遠くに永田町

倉吉市 最上 和枝

愛未完 梢は風のほしいまま  
バラの棘触れて男の不整脈  
脈打たぬカード一枚捨てられぬ  
母の膝リング一つを置いて来た

和歌山市 細川 稚代

初明りひとりの影に負けぬよう  
カフェテラス女二人の小正月  
新しい暦の重き計りかね  
亡き人の賀状と重い対話する

大阪市 榊本 落児

嘘をつく女の顔を猫見上げ  
少しぐらい埃立つのが頼もしい  
砂丘には風の生命がうねってる  
裏通り猫も女も仲がよい

出雲市 岸 桂子

和服着て今日は心をやわらげる  
ジャンケンに負けて体が軽くなる  
どうしても女の方が取り乱す  
嘘言えば顔は斜めになりやすい

直線に歩けば連れに遠ざかる

罪捜す人も溺れる私利私欲

三食が欠かせず笑う老い二人

早々とお屠蘇無くなり喜寿達者

岡山市 花田 たけ志

靴提げて裸足子供になる砂丘

前向きに生きよと巢立つ子に贈る

お神輿だ酒だ故郷秋祭り

坂道で夫婦の絆強くなる

箕面市 椎江 清芳

先ず一献今年もせわし桜さくら

遠霞向こうは何か光ってる

節約がけちに変った日本語

貧も富も公平に着る羽根布団

寝屋川市 太田 とし子

心根の優しさ一枝活けて初春

日記帳先ず健康と朱を入れる

裏町の人情木枯しに乗る話

茶髪から明日の未来が溶けそつな

和泉市 西岡 洛醉

まだ傘寿 卒寿を目指す万歩計

駆け落ちした昔を偲ぶ旅カバン

徒らに尾を振り針路見失う

老梅の香りが癒す旅疲れ

寝屋川市 北岡 波留吉

迎春の筆の勢い年男

闘牛もいて年男高笑い

手の届くところに酒あり年男

しあわせの花をブルーへ贈りたい

広島市 森田 文

四時に起き海へ男の日曜日

冷蔵庫開けて忘れた時がある

遊びましょ一升瓶を提げて来る

野生馬は岬に立って春を待つ

米子市 鷺見 正子

むらがつて咲く花楽しそうに咲き

雲の動きへ木の芽草の芽

中小の企業いじめるアドバルン

初詣で両手を孫が引いてくれ

今治市 越智 一水

原稿紙 一字を埋める手が止まる

うろこ雲読めばよむほど数を増す

ひと日無事おなかの上で手を合わす

婆ちゃんは野仏さんに願をかけ

相生市 中塚 礎石

実のならぬ梅もふつくら綻びぬ

実をつけぬ樹へ心配をしてあげる

情をかけた答のように花が咲き

還暦の春とはこんなものらしい

鳥取県 西原 艶子

老いふたり桃一枝のひなまつり  
大阪市 井上白峰

呑み込んだ話が肚で疼きたす  
任されて苦勞してますお人好し  
どちらとも取れる言葉の言い逃れ

羽曳野市 酒井一壺

風通し悪くなつてる三世帯

嫁ぐ朝やわらかだった里の風

出る幕でないとわかった役不足

納得のいかないままに幕が開き

出雲市 園山多賀子

絵にもなるレモンと柿が転がつて

ペットには愛想のいい嫁を見た

牛の瞳の鷹揚対峙出来ません

昨日泣いた替りに今日は笑うだろ

鳥取県 石尾かつ乃

居心地がよくて納屋から出られない

田を鋤いた牛と歩いた道がない

納税だ働き蜂にある頭痛

春の陽にかたくなな紐解けてくる

大阪市 大野武太

敗戦の日々回想の老兵で

甥姪に医師弁護士のない家系

医科と歯科 子約よやくに縛られる

手のとどく次の世紀に夢がある

影までも背中を曲げてあかんたれ  
見送りの母へ背を向け辛かった  
職安で首の値踏みをしてくれる  
虚飾など入らぬ三代丸く住む  
鳥取県 黒田くに子

モーツァルトかけると花が踊り出す  
追伸の中に隠れている本音

大阪市 小糸昭子

長い列 太左衛門橋たこ焼屋

本能で蛙は雨の匂い嗅ぐ

占いは夫の居ない夜にする

芋煮会おいしい風が吹いて来た

鳥取市 坂田和歌子

秀才がなかなか列に従わぬ

日めくりへ優曇華の花ちらされる

会社迄メークが持たぬ花粉症

年金者買物籠の質が落ち

岸和田市 井齋一齋

耳に栓何を聞いてもにっこにこ

追伸の一言火種残してる

花いちもんめ両手で幸を温める

大阪市 川原章久

寒風に掛大根の足二本

クリスマス紅口ウソクは紅涙

また来いと妻娘に渡す車代

皿洗う夫が居って家平和

香川県 工藤 吟笑

旗色を見つつ編みだす和解策

妻の振るタクトにとても逆らえぬ

いさかいは後は副食にあらわれる

富田林市 松本 今日子

我が儘も鞆に詰めたる里帰り

公認の彼女を連れ初詣で

枯葉焼く焼芋ころり出て来ぬか

話題なき夫婦へテレビだけ叫び

豊中市 安藤 寿美子

三月はまだまだ安心出来ぬ春

ええ匂いしてるなと息子帰宅する

アップルパイ甘さにつながる恋がある

演奏はピアノニッシモ携帯電話鳴りひびく

西宮市 久保 まさお

ありがとう私育てた広い海

老友のいのち届かぬ年賀状

二人三脚紐しめ直す初日記

凧揚げて天女の琴を聴くうらら

横浜市 清水 潮華

洗面所鏡の明り変えて見る

カラス待つ正月明けのゴミ置場

タイミング逃しの餅やっど切り

パンジーの美事を通行人が褒め

島根県 森 茂美

ごまめ炒る香りが包む大晦日  
老妻がテレビクイズに手を挙げる

国債が子孫に残る遺産とは

妻病めばひとりの夕餉風の音

鳥取県 橋本 多哥由

一つ許すとすべてを許す私です

悟り切る姿で花は散るのです

ネクタイの要らぬ職場で太りだす

七色の夢に期待が捨てきれず

竹原市 石原 淑子

平常心 誓い新たに日記帳

結婚のイベントだけに懂れる

それからの真剣勝負忘れてた

自画像の修正ばかり老母と住む

大阪市 渡部 さと美

七福神めぐり湯どうぶが本音

嫁達も娘も来るワイン買って待つ

恋よりも楽しい若い友と逢う

老いらくの恋のときめき齢はなし

大阪市 稲本 凡子

いい子感するので玄関を洗う

その時は苦勞と思てない日記

賛成はするが票には考える

幸か不幸か五十回忌の亡夫の年

米子市 茂理高代

誰にも告げぬ哀しみ雪が降る

旧友とベッド並べる奇蹟あり

病室のボスが病を重くする

この夜景旅で見るなら素晴らしい

八尾市 高杉千歩

すみれたんば筆よ踊って蝶になれ

モーニング早昼にしてネジを捲く

プレセントしたエプロンでもてなされ

可笑しいなじつくり聞けば犬のこと

大阪市 奥田良子

小正月日記帳まだ白いまま

ぼたん雪若きカッパル窓にいて

お留守番犬もため息ついて待つ

こいさんと呼ばれしままで古稀を越え

和泉市 岡井やすお

お願いもせず十円で初詣で

葬式に行ったのに来た年賀状

ありがたや傘もはらずに食べている

嗚呼日本なんでこんなに狙われる

米子市 林瑞枝

みんな元気で揃い公孫樹酒を酌む

シベリアへ飛ぶ白鳥よ仕合わせか

キャッチボールのかたち仁王の手の形

大好きな帽子と生きてきた手足

池田市 金崎峰子

あの人にあんな二面があったとは

孫ふえる度祈りたいこともふえ

名前までつけて子犬をくれた子ら

三歳児母そっくりに喋ってる

鳥取県 上田俊路

長生きの秘訣を読んで寝正月

人間の弱さへ響く銭の音

エリートは無理阿呆にもなりきれず

独り立ちした鍵束が重くなる

和歌山市 木本朱夏

その人の名は伏せておく寒椿

首をすくめ父は時々亀になる

妻の座が崖の途中に落ちている

振り向けば皆嘘になる風の中

静岡市 安本晃授

人妻の手紙に揺れて回る独楽

無愛想な鏡が笑う妻の朝

愚痴言うな今年は千支の年男

誇るものないが山茶花庭に咲く

姫路市 古川奮水

山の幸老母口伝てで灰汁を抜く

鉢巻が似合い爺さんらしくなる

堪忍の袋繕う針見えず

ゆく春も来る春もない是空の旅

十和田市 小笠原 敏人

雪のない正月ですな曆はぐ  
野暮用が九連休を食い潰し  
ひた走る女の駅伝光る風  
区割して同じ作物しのぎ合う

岡山市 福原 辰江

一滴が大海までの夢運ぶ  
哀愁の泣きそつと舞う落ち葉  
何もかも捨てて翔びたい主婦の夢  
蓼を食う虫の魅力をそれなりに

鳥取県 谷口 次男

碧かった海海海がどす黒い  
温泉に勿体なくも我一人  
五 六人 乗せてフェリーが滑りゆく  
ジュースにも見えて困った酒の缶

高知県 小澤 幸泉

父と息子の振れるタクトが乱れ出し  
年金を調べ明日へ生きる術  
学ぶ子らのかくれた夢と苦しみと  
十戒がまだ生きている罪の河

東大阪市 安永 暁子

学生もシルバー席で目を瞑る  
街並に温い風吹く芦屋川  
山焼きをのんびりと見る奈良の旅  
床を空けて待つておりますお雛さま

寝屋川市 酒井 勇太郎

次男坊がき大将で親思い  
世界地図広げ今年の旅を練る  
嫁姑仲良く風邪でダウンする  
四月には米寿祝と鼓舞をする

寝屋川市 太田 藍子

受験生気を遣つてる両隣  
バラの字が書ける貴方がまだステキ  
ベッドから日本中を旅行する  
カットして頭の中も春の風

砂川市 大橋 政良

孤独とは自問自答をくり返す  
過疎の道 夢の一つも落ちてない  
窓一つ一つに灯る夜のドラマ  
天国と地獄を見せる酒がある

堺市 近藤 豊子

児の腕をひしとひっぱる初詣で  
神苑にやどり木の照るお元日  
やどり木のふるさと星ながれます  
やどり木と交信つづく枯椏

豊中市 湯浅 馬洗

大晦日 西のパリでやつと暮れ  
機内食プロイラー並み餌を貰い  
ノートルダム寺院 破魔矢なくても初詣で  
留学生 円安もろに日々の糧(百円二十二フラン)

寝屋川市 柴田 英壬子

端正にのりかしこまる朝の膳

一度お逢いしましょう一枚の賀状

通院とお見舞いならぶジャニユアリー

足許にすぐ降りてくる駅の鳩

大阪市 藤田 頂留子

人柄がモロにでっかい笑い声

当り年なのに暦は黒い丸

急ぐ日は時間どおりに来ないバス

お水取り土の下では春仕度

西宮市 牧 淵 富喜子

年明けて淋しきものの残りいる

この辺でわが古里の雑煮汁

早合点ひとりよがりよ金平糖

平凡なはなしが続く小豆粥

鳥取県 土 橋 はるお

残業と言う口実はすぐバレル

飲みに出るええ口実が仕上がらぬ

こっそりと変なビデオを見ているぞ

おたがいに金に不自由してますね

鳥取県 土 橋 睦子

リゾートの浜に並んだ味処

玉砂利を踏んだヒールが泣いている

信念を崩してしまふ今朝の雪

生き方をすこし変えれば揚羽蝶

鳥取県 田村 きみ子

一途と言う短所があつて叱られる

少し位くずれて見たい花の下

雪国に住んで人情もろくなり

娘とのギャップ笑いで吹きとばす

岸和田市 藪野 けい子

長生きに貧乏よりもこわい老い

ていさいを貫き通し生きている

九十歳 娘と住んで寂しがり

焼肉は炭とこだわる店がある

奈良市 吉田 笑 女

転居して今更悔いても戻れない

鳥かごのひなも寒かる冬の奈良

奈良の冬こんな青い空もある

淋しい日孫の写真へ話しかけ

宝塚市 嵯峨根 保子

葛根湯すきま風さえ針の風

キムタクがかじる林檎よりもレモン

妻も公認ペアでラテンを踊ってる

後になりあれば皮肉と気がついた

大阪市 松尾 柳右子

パソコンに馴じめぬ馬鹿で生きている

下戸なれど最後の少し金の酒

マスクして歩け歩けと犬のあと

久し振り別れにくいね立ち話

和歌山市 堀 畑 靖 子

逆境に育ち節目の多い竹  
タテ社会生き抜く名刺持ち歩く  
ああいいなあやつぱり白い割烹着  
屑カゴに山盛りにしたラブレター

池田市 栗 田 久 子

年を経てひな飾る日も遅れぎみ  
梅だより桃のたよりも連れてくる  
風向きはそろそろ同居打診され  
きのう今日変わらず生きる我がくらし

寝屋川市 富 山 ルイ子

生命とや存在確認出来ぬまま  
死への道予行演習したくなる  
思案してもどうにもならぬ母のこと  
生者必滅 悲しいさだめの計報また

豊中市 松 岡 久留美

子供等のもめ事じつと見てる父  
雨降って二人の前に虹の橋  
相談をしてみても解る人の欲  
潮時とそろそろ本音出して来る

芦屋市 黒 田 能 子

居眠りをしながら答え待っている  
一滴も飲めぬお人が祭り好き  
古い古い話を知っている帽子  
解放感おんな一人の旅をする

香川県 池 内 かおり

本番に備えノドアメ舐め過ぎる  
発表が終わって笑顔取り戻す  
人生の先輩の知恵頂こう  
明日からの力を溜めている眠り

豊中市 稲 葉 眞 郎

正月も暮れをも越えて行脚僧  
戦友を励ます電話大晦日  
初詣で孫の御守り買って来る  
子が帰省話の度に笑う母

藤井寺市 高 田 美代子

残り福をぶらさげてゆく笹の枝  
古釘の意地かすんなり抜けません  
流れ雲あての無い日の友になる  
このままでいい筈がない夢を追う

堺市 中 野 櫛 子

いい天気いの一歩に朝を入れ  
固い握手励ましの愛耳の奥  
冬本番うまさ本番お大根  
病癒え明るさ連れて髪染める

守口市 結 城 君 子

二十一世紀へ続く体力蓄える  
ひとわたり花を見渡し福寿草  
商家なき街に静もる松の内  
行けそうもない長江を見ています

出雲市 久谷 まこと  
ありのまま書くと佗しい日記帳

懐が温そう顔もゆるんでる

福の神山から下りぬボタン雪  
ひとり旅行く先風の向き次第

堺市 黒田 真砂

夫入院独りのテレビ隙間風

学生時代つまずいた娘が今賢母

手の届く範囲で妻が謀反する

微熱の目に床の水仙凜と咲く

鳥取県 乾 隆風

賽銭をしぶると神は横を向く

七坂を越えてホルモン剤を飲む

ふる郷のとちもち荷札から匂う

檜山の麓で子らの手紙よむ

西宮市 山本 義子

相づちが下手なのは親ゆずりです

山で逢う夕日すっぽり手に入れる

山小屋はおとこの役の鍋料理

失意などわたしの辞書にありません

島根県 藤原 鈴江

耐え抜いた私にそそぐ初日の出

お正月去年を脱ぎ捨て泉にひたる

曾孫できこんな嬉しい日に出合い

可愛さをもてあましている若夫婦

大阪市 清水 利武

跡取りの腕を信じている老舗

梅の花咲いて浪花へ来た角力

迎えたいオリンピックを大阪に

新年を迎える餅へ子の笑顔

八尾市 生 鳴 ますみ

ロボットの足かと思うスキー靴

帰省子の匂いを吸った布団干す

幼子のマシユマロのよな手のぬくみ

赤いセーター息子が贈る御年玉

枚方市 八田 敏

一枚の賀状が繋ぐ遠い女

出来合いのおせち並べて寝正月

日に一句老いの生甲斐重ねつつ

シャボン玉一つ一つに青い空

吹田市 古川 喜美子

平凡な旅のラストの雪景色

ラストではスピード出すと牛が言う

私らしくなる為に顔洗ってる

このままでいいの言いわけなどしない

今治市 野村 京子

ぬるま湯になったポットに用はない

冬ざれの野菊一本水子像

多数決牛一頭が屠殺場

ポケットに石より重い拳ある

和歌山市 玉置当代

蓄持つ蘭置き換えて初春の庭

セリナズナ摘んで七日の朝の膳

初場所を餅焼きながら妻と観る

鷺が舞う終の住処でティータム

竹原市 古谷節夫

日が昇るメイクドラマを待つ朝だ

故郷の銘酒に酔った夢を見る

故郷がテレビに映る誇らしく

孫とするキャッチボールに肩がこり

富田林市 池森子

母が逝く飢餓海峡が越えられぬ

一月の風は去年の亡母を恋う

倅せな笑いに鬼の面割れる

目を閉じる時間が長くなる夕陽

西宮市 門谷たず子

好きに生きて鼻梁涼しきテスマスク(丸山よし津さんに捧ぐ 二句)

あざやかに消ゆ旅の鼻緒の切れしまま

ひとりよりふたりと思う酒の味

橋無事に渡る祈りを深くする

大阪市 辻川慶子

うかうかと過ごせば早も古希が来る

椅子に座しお雑煮祝う世の移り

おみくじの中吉はよし初詣で

古希はまだ青春ですよ空の蒼

河内長野市 植村喜代

それはそれこれはこれ割り切れぬ心

五勺の酒せめては美味いあてを上げ(病院正月外泊の夫)

家と病院毎日通つてとしが明け

有難う言えたらきつと楽だろう

鳥取市 美田旋風

金のなる木には狂わす毒がある

素通りしたあとで気付いた福の神

逃げられぬオウム日本は狭かった

タネのない花へも愛の水をやる

熊本市 永田俊子

広辞苑座右にまだ持つ好奇心

ステップを踏みそこなつてケチがつき

ジーパンの折り目消え節度消え

晩節を託して活ける白い菊

大阪府 榎山隆盛

高層のビルの窓をば数えけり

激流へいやが応でも消費税

一年の逃げ足老いに速くなる

真っ直ぐに歩く錯覚かも知れず

島根県 佐々木鳳笙

白鳥の視界に湖の紛れなく

博労の打算が映る牛の瞳よ

掃除機に追いたてられて父のとど

母ちゃんのどつちの瞳にも僕がいた

鳥取県 幸家 単車

吹く風も私に味方してくれる

サービスの良さを惚れたと勘違い

法螺吹きと知りつつ罨にはめられる

飛び込めば許してくれる母の胸

寝屋川市 江口 度

早よ呆けた方が勝ちだと妻が言う

妻のうたた寝 顔はテレビを向いたまま

とんびの輪ゆっくり流れ行く時間

重油回収 緑の船は現われず

西宮市 菊池 トミエ

口数が多過ぎ話進まない

除夜の鐘想う神戸は汽笛泣く

葛湯して心も風邪もほのぼのと

しみじみと亡母見る如く初鏡

寝屋川市 森 茜

のつたりとあぐらかいてるお月さま

いたわれられ脳波検査で寝てしまふ

妖怪の顔した小犬もらわれる

公園デビュー鼻ちようちんの女の子

松江市 柳楽 鶴丸

ラブレター絵手紙でする妻と僕

裏の裏のぞいていますオンブズマン

妻の手のひらから落ちぬように遊ぶ

天国から今年も来た年賀状

鳥根県 榊原 秀子

大樹の気いただき仰ぐ初明り

風邪にねて十日振りなる洗濯機

漸くに頬のふくらみ知る鏡

崩したい想い炬燵の火をほじる

柳井市 弘津 柳慶

正月の遊び孫等は機械化し

息子より嫁が逆にたよりなり

新入社早速座禅の指導受け

元旦だ今日一日は酒で暮れ

海南市 三宅 保州

手拍子で踊ってくれた車椅子

真筆の証は癖のある書体

物置の隅で眠っている昔

村長も迎えてくれたUターン

鳥取市 西村 黙光

続きまで夢に出てくる痴話喧嘩

火傷して人の情けの裏表

酒量減り禁酒すすめた子が案じ

打ち明けて解けていったわだかまり

大阪市 中田 あい子

ママとなる月かきそえた年賀状

箱根行く駅伝の足鹿のごと

ルミナリエ光の壁に合掌す

臘梅の匂いに御寮人さんしのぶ

鳥取県 石谷 美恵子

美しい言葉で他人攻めてくる  
糸図から水軍の血を少し嗅ぐ  
割り勘へ大風呂敷がホツとする  
配給に並んだ癖で列が好き

鳥取県 太田 幸枝

気がつけば子供部屋から音が消え  
背伸びしてアキレスケンに無視される  
家柄を選んだ嫁にいびられる  
好きに生きスツと消えたらばんざいだ

米子市 白根 ふみ

迎春に鶴の気分で酌みかわす  
七草粥のみどりに朝がほのぼのと  
落着いてこたつ無口な一体感  
風もまた水に動いてさざ波に

藤井寺市 田中 透太

点滴にときざませて夜明け待つ  
てのひらに福寿と書いて屠蘇を酌む  
急所には触れずにおこう紙コップ  
父の樹を揺すってみたい齢になる

吹田市 山本 希久子

午後のひととき陽だまりの牛になる  
楯となる人のうしろで吠えておく  
後日談あり仏壇に灯をとます  
反発をバネにこの坂越えてゆく

高石市 浅野 房子

生きているあかし雨戸は起き抜けに  
訳のない別れなどない言わぬだけ  
喝采は所詮ひとごと絵そらごと  
見逃した合図私も惚けてきた

伊丹市 山崎 君子

雨しきり亡夫の傘をさして出る  
七日粥一草入れて朝の膳  
大判小判肩にサラサラ残り福  
寒ぼたん夢の中まで孤かぶり

富田林市 片岡 智恵子

夢賭けた子が夢消して親になる  
足腰を鍛えて明日は孫を待つ  
夢を買い夢を萎ます宝くじ  
酸欠の街を幸せ食べ歩き

唐津市 田口 虹汀

何の負い目か母に敬語を使う父  
煩惱を捨ててしもたらあの世やで  
紋付も背広も似合う丁丑  
千人の味方もいるが敵もいる

唐津市 仁部 四郎

殺したい人を数えて出た欠伸  
一円を拾う視線に虹がある  
質問を受けて訓示が面白い  
協調をお上が説くと風が出る

大阪市 河井庸佑

潔く思い止まるのも勇氣

一步退き譲るゆとりが身を守る

拱いていてもやっつては来ぬチャンス

春寒が祖母の子定を狂わせる

奈良県 長谷川春蘭

冬銀河ふと眼裏に過去が来て

満ち足りた心湯舟の隅に居り

賀状書く生ける証の幼友

孫しぐさ目の中にいれ日向ぼこ

寝屋川市 平松かすみ

洋風がなぜかそぐわぬ日本晴

二泊目の孫から貰う笑い種

ジャンケンに弱い男がもっている

おひな様今年もご無事いいお顔

大阪市 上田柳影

ゆく年くる年鐘のひびきに残る悔い

鳩時計晦日も同じ音で鳴り

淋しさは今年も賀状減って来た

八十路ごえやと放さぬ白い杖

池田市 藤井計光

虫を呼ぶ匂いに色に花の性

妻入院ボディプローのように効く

肉親のようで他人の夫婦仲

神様が絵筆加えるポインセチア

堺市 柿花紀美女

暮れの街老いもつられて小走りに

一步一步牛歩で余生踏みしめて

遠い日の夢をひそかに持ち続け

達筆な師の賀状に安心し

大阪市 北勝美

祝箸妻はスプーンに持ち替える

八十五年生きて元日不精髭

病妻より先に逝けない替おむつ

冗談の主治医に少し春が見え

奈良市 米田恭昌

初春に牛も負けじと天翔ける

椅子蹴ったサムライ今は素浪人

砂かぶりいつもの席に粹な女

滑走の勇姿を偲ぶ雪しきり(先聲急逝)

廿日市市 林野甦光

犠牲者が出るまで待つっている悪路

今は昔漁況の島も日々寂れ

瀬の音も緩み山雀の唄聞ゆ

春近し水族館へ足を向け

富山市 酒井輝

平成の母は可愛い名で老ける

泣き砂の我が影に見る母の影

頼る日もある褒めどこの無い自分

補聴器へロックが邪魔な深夜便

出雲市 富田蘭水

吟醸についつい妻が歌にのる  
山茶花の心まっかに雪に耐え  
めがね変え新たな年の練るプラン  
長寿法粗食野草が光ってくる

貝塚市 池田寿美子

血圧が下がる「田園」聴いている  
無料パスも無い不満にも元気です  
フアックスで怒り反応アンケート  
抵抗感背すじに溜めて若返る

倉吉市 松本よしえ

初日の出 神様だろう目が眩む  
拝殿の板の間冷えて神の声  
目の前の正月さんに餅を搗く  
宝くじ当たった時を考える

美祿市 安平次弘道

父の木が揺れるまだまだ越えられぬ  
腕力があるから誤解されるのだ  
相性は良いが先立つものがない  
止まり木が揺れてストレスたまりだす

大阪市 寺井東雲

孫の手になりたいような娘さん  
箱跳びを見ている親が汗握る  
杉丸太 砂で磨いて床柱  
包丁を夜中に研ぐの止めてんか

枚方市 前たもつ

お年玉に今年の景気聞いてみる  
あの人が来たのでみんな揃ってる  
丑年へ義母はペン取る九十六  
しんがりを気にせぬ児らのよい笑顔

豊中市 江口明光

孫みんな女で声が轟しい  
良心が信号無視を戒める  
天ぷらを食うから舌がよく回る  
セリの牛パソコンで決められる

箕面市 岩津ようじ

四代を生きた大腿骨のオベ  
ブライドが邪魔 役の来ぬ元スター  
臘梅や障子の中のお念仏  
思春期の扱いにくい美しさ

鳥取県 西川和子

なるようになると流れに逆らわぬ  
ライバルを意識してから首がこる  
おみくじが私の前で売り切れる  
てっぺんに納まり下に目届かない

枚方市 二宮山久

インシュリン打っても酒はやめられず  
めくばせがとつてもうまい退社ベル  
みちたりた幸せ願う初詣で  
夫婦円満たまには喧嘩したくなる

吹田市 瀬戸 まさよ

古代史は男女平等暮らしてる  
生きてきた勲章しみもその一つ

裏の裏読めば人間心理学

生産休業空の青さよお正月

八戸市 島田昭治

佳子さんの葬式トップにかけつける

三十五 神も仏も無いものか

年明けて懲りずに禁煙言っている

### この一句

栄光の日も一日は二十四時

薫風

この句は私が川柳に興味をもつようになって、初めて出会った句、そして私の心を惹いた句である。私の年代の殆どの人は「努力」という言葉、また「成せば成る」という信念をもって事に当って来たと思う。成功する者にも、脱落する者にも一日は二十四時間であって、成功に繋がる者はこの二十四時間を三十時間、否もつと長い時間に値するべく努力する。一方、脱落する者は時間に甘え二十四時間を無為に過ごすからであろう。今、私は二十四時間をなんと勿体なく過していることか。与えられた時間を大切に、生きていく喜びを認識し、よい一日を送らねばならないことを改めて感じている。(井上照子)

## 第12回国民文化祭・かがわ97



# 川柳

作品募集要項

「みずみずしい詩歌を玉藻の国から」

一 応募受付期間 平成九年四月一日(火)〜六月三十日(月)(当日消印有効)

二 応募規定

(1) 作品

一人各題2句詠(未発表作品に限る)

宿題(事前投句) 石 打つ 島 寺

照る ドラマ 瞳 情 橋 幕

宿題(当日投句) 絵 情 橋 幕

一人につき一〇〇〇円

香川県実行委員会作成の「募集要項」を御覧のうえ、

所定の応募用紙を使用して御応募ください。

香川県高松市番町二丁目八十一番

〒七六〇 香川県高松市番町二丁目八十一番

第12回国民文化祭高松市実行委員会事務局

「文芸祭」川柳係

三 選者

第一次選者(五〇音順)

(事前投句) 石井 有人 石原 伯峯 谷口 幹男 西田柳宏子

藤沢 岳豊 松岡十四彦 山田 良行 吉岡 龍城

(当日投句) 安藤富久男 片岡つとむ 塩見 草映 渡邊 蓮夫

仲川たけし 西村 在我 福家珍男子 福田 白影

宮本 時彦 宮本 時彦 福家珍男子 福田 白影

文部大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・香川

県知事賞 他

川柳大会(入選発表・選評等)

平成九年十月二十六日(日)十時〜十四時

高松テルサ

入選作品は、作品集として刊行し、応募者全員に無料

配付します。

六 問い合わせ及び募集要項請求先

〒七六〇 香川県高松市番町二丁目一一一

第12回国民文化祭香川県実行委員会事務局

「文芸祭」川柳係

(tel)〇八七八一三一一一一(内線三三七〇)

文化庁 香川県 香川県教育委員会 高松市 高松市

教育委員会 (御全日本川柳協会・香川県川柳協会) 第

12回国民文化祭香川県実行委員会 第12回国民文化祭

高松市実行委員会

七 主催者

# 自選集

小出智子

はらわたを切つても突つかいにもならぬ  
昔のように春の来るのを待つてみる  
仲好く暮らそうと約束ができた  
身の上がどこか似ている一夜干し  
こっそりと夢を仕掛けて冬籠り

小西雄々

元旦に付け替える面用意する  
シナリオになかった初春の風が吹く  
家族より大事にされた過去の牛  
歩くうち心の刺が抜けてくる  
金婚へあと三年の初春迎え

松川杜的

福笑い眼の上に鼻ワツハツハ  
書初に『高官無恥』と書きました  
ワンバンドぐらいがよろし始球式  
塵払い大仏さまの掌がでかい  
私なら戒名禪定門でよろしおす

恒松町紅

几帳面と依怙地がつのる指の先  
休肝日 空念仏ののど仏  
見合いさせ親の方から断わられ  
制服の背を漲っている活気  
同期生と書いた供花が目痛い

野村太茂津

叶うならリマの人質身代りに  
摩訶不思議ポキンと折れた鉄の船  
迷惑千万 生命の海を汚される  
人質の胸中察し落ち着かぬ  
トウバク・アマルよ人間ならば心せよ

月原宵明

起きて食べ眠る日記で長続き  
無粋には知る由もない枇杷の花  
生きざまを見る金曜の終電車  
矢絣のひとが故郷の森にいる  
笑つてる遺影に日々を許される

黒川紫香

その中に裏が白紙で来た賀状  
留守番がひとり笑いをするテレビ  
食事まで夕暮れの町歩く旅  
桃が咲きさくら咲いたと仁王さま  
煙草吸うだけに女が来る喫茶

小林由多香

出しゃばりと控え目が居て会和む  
おめでたい日へ体調を整える  
万札を撒く人もあり初詣で  
あといくつ平均寿命までの距離  
露天風呂もつたいないが一人だけ

波多野五楽庵

春までは私も花も冬ごもり  
ブランコをはずし忘れた低気圧  
粥食べて一人笑いの愚かなり  
爪を噛みああ私も敗残者  
咳一つ夜の病棟かけめぐる

八木千代

風邪十日 窓をみつめて蹲る  
きらきらと出窓に春が透けてくる  
寒椿おぼろに熱の中で咲く  
椿銜えて春をくわえて歩きたし  
春という美しきもの溢れくる

正本水客

たくましい筆思いがけない年賀状  
夢捨てた男に春の陽があたる  
胸ひらく故郷のテレビに雪こやむ  
脇役としてほめられている不満  
笛吹けどおどらぬ人として

奥谷弘朗

大山の見える景色がお気にめし  
血の通う言葉一つに心満つ  
シベリアで耐えた力を信じ切り  
手作りの価値を知ってる目が光る  
光らない人生なんか無価値だぞ

藤村女

茨の道も思い出となる八十路  
九十九歳明治は強し義姉の顔  
それなりに路傍の草も花が咲く  
箸紙にそれぞれの歌旅三日  
故郷の山にまだある数え唄

野田素身郎

凍てついて字が書きづらい後遺症  
恩讐を越えて届いた年賀状  
風邪ひいた兆しの軽い咳が出る  
妻の愚痴聞きたび耳鳴りひどくなる  
老骨の手におえなくなった孫二人

西田柳宏子

僕だけが知ってる口がむず痒い  
門外不出 陽の目を見ないまま朽ちる  
計算は合うがいつでも銭足りぬ  
氷河期の門美しく閉ざされる  
怪しいとデカつかまえて叱られる

高杉鬼遊

右の物ひだりへやっつてことがすみ  
新年会気やすめに飲む陀羅尼助  
背の高い分だけ頭ふかく下げ  
悪い子になってあなたにする電話  
スツキリとした顔トイレから戻り

藤井明朗

北風が梢を渡る雪予報  
わたしに似合う統計の職務へ湧く元気  
梅だよりこころは春の彩になる  
米寿祝を感謝しながら夢は続く  
花の宴会う楽しみにプランたて

辻白溪子

癖のない男が欠伸を繰返す  
相談があつて電話で呼び出され  
合鍵を持っているから疑われ  
胸に顔埋めて泣くのを持て余す  
名前なぞかつて呼ばれたことがない

河内天笑

引き受けてあとでゆつくり悩みます  
文明がせわしない世にしてしま  
菜園は無限でわたくしの宇宙  
モンゴルもハワイも髻がよく映り  
やさしいとやさしそつとを分けている

遠山可住

人間が行く山が泣く海が泣く  
パチンコへ来て折り返す不況風  
好物を送つて母にある季節  
ひと言のズバリ無口だから怖い  
マイホーム小さな夢を積み残す

金井文秋

雅子さまにも子供まだかと言ういじめ  
脇役に徹して居れば親しまれ  
ころぶ時は転びます杖持つても  
かねが全てと見せられ政治離れる  
裏切れぬように弱味を押さえとく

橘高薫風

父は古里をその子は国を捨て  
マイカーは街のかまくら雪しまき  
雪風巻三十階の英国屋  
ある日突然ボッキリ折れるスツポリ抜ける  
三代の寝太郎揃う松の内

## 池田可宵

東野 大八

大正十年(一九二一)の春、大阪時事新聞にほんとうの母は寫真で見たばかり 可宵の句が渡辺虹衣選の特選になったのを機に、それまでの俳句から川柳人への第一歩を踏み出した。時に23歳。

本名は正雄。山口県防府市に明治34年10月11日に生れ、若かっただけに、地元の川柳の大先輩片岡四迷子に動かされて、防府川柳会の草分け『詩草』を四迷子らと発刊したのが大正15年である。このころ創刊した小田夢路主宰の『はこやなぎ』と柳誌同型とあってこのグループと親交を結ぶ。

しかし、昭和3年9月、朝鮮へ家業の衣料品店を仁川に出すため渡鮮、「仁川の可宵」の柳界への誕生となった。

当時、朝鮮では、京城が全鮮川柳界の中心

で、正木柳建寺中心の朝鮮川柳会と、和田天民子の南山川柳吟社が、まるで川中島の武田と上杉両派の様相で対立、火花を散らしていたが、可宵はこの両派の主催大会ごとに、仁川の同志数名と参加した。双方とも上位入賞をガツパリ頂戴して、この双方が「仁川の可宵」獲得にシノギを削ったとある。

「こんなわけで、朝鮮川柳界のご本家は仁川じゃあないかという声も聞かれたほどでした。好作家可宵先生は、甚だ美声の持主で、マイクのない時代だが、京城日報社の大講堂の隅々にまでひびき渡る披露は、誠に圧巻であった。(中略)当時の可宵先生は、お家の商売柄いつも和服で、すらりとした袴姿も身についた美男子ぶりに、大会後の慰労会では京城の花街旭町のきれいだころが捨ててはお

かず、大変なモテ方であった。(中略)犬猿の仲の朝鮮川柳会と南山吟社双方の句会にも気安く出席、一筋に中道を守られた。先生は柳建寺、天民子の双方のリーダー二人の信任篤く、若手川柳家の中でも頭角を抜いた可宵先生は、小なりといえども立派な仁川城主の貫禄でありました」(ながさき59・10号)可宵先生の青年時代(樋村天流)

「こんな雲行きに仁川川柳会だけに、昭和九年『長鼓高麗』を久良岐先生のご指導で創刊。一方、天民子博士主宰の『俳詩』も同じころに創刊され、朝鮮の短詩型はとみに活況を呈した。仁川には、矢田冷刀という実力者が私の協力者だった。

ともあれ、小田夢路、馬場諦二の番傘派の両者との交友は、一日一信を二年半の間も実行し、この二人と私が川上日車、木村半文銭両氏の革新系と大阪で会談した折、保・革両様の川柳界を凝視した意味合いは大であったし、全国の柳界動静がよくわかった。

想えば衣料品等の販売等で、商売は好調、朝鮮の山や土地、家を買いたり、在鮮十七年間で、巨万とまではいかなくてもかなり貯め、やれやれの時に召集、竜山へ入隊すると同時に終戦。昭和20年11月博多港へ、リュック一つに金千円也で引揚げて上陸の際、置いてき

たその財産の膨大さに腰が抜ける想いであつた。

いまに耐えきのを思い明日を生き「可宵の句は、その時の心境として生れた。ともあれ敗戦後の暮らしのため、東京の三越や各地の各デパートで私の色紙、のれん、短冊がよく売れたのも、思えば終戦後のどさくさのためでないかと考えている」(筆者宛書簡)

このあと可宵が戦前在鮮の有力柳人を地元で糾合して昭和24年末長崎川柳社を結成「川柳ながさき」を創刊する。

この翌年、番傘主宰の岸本水府を長崎に迎えたが、長崎の番傘同人は可宵一人だけであつた。このあと昭和30年県文芸界の要請により長崎川柳協会を結成して会長となる。

雲仙で阿蘇の煙を見てかえり 可宵

の柳界でよく知られる可宵雲仙句碑が建てられたのは、昭和34年のことである。現在もこの「可宵句碑まつり」は、長崎柳界名物の川柳大会として、毎年その盛況ぶりは全国の柳界でもよく知られている。この句碑の句は昭和28年前川千帆・池辺釣・宮尾しげを可宵が長崎へ招いた折、雲仙の天皇歌碑へ案内した折に作句したものを、雲仙国立公園内に入つた大石を碑に選んで建立したものである。

また、平成5年末、長崎市の松嶋稻荷神社

に建立された、老人のボケ防止の「不呆尊神」

(ふほうそんじん)の石像が建てられたが、

この高さ80センチの大黒様と寿老人を合体させたほえましい石像の前に、可宵第三句碑

松嶋や呆けをしずめる福の神 可宵

のみかげ石角型の手頃の句碑が建てられ、長崎の新名所ぶりを發揮している。

可宵はまたさきに諏訪神社境内に蜀山人の大きな石の句碑を建立しており、またこの年の平成2年春には、平成天皇即位の大嘗祭の祭主もつとめるなど、川柳人可宵は、神仏奉

賛の祭事全般の世話人として、長崎市民に広く知られている。

また、この人の本領は、「長崎大乘会」の会長として、その年一回の祭事である法句経・

般若心経の奉賛集会の座主として、昭和47年から数人とはじめたこの大乘会百会記念には

「仏心に生きる」という記念出版を行い、その発行人もつとめている。その文中、

「大乘会と名乗って百会一十年一日の如く

三千六百五十日を延べ七千人の参会者で賑つた。その体験句を「人生の旅路の中の今日の

今 げに有難きかな大乘会の今日」

の歌詞を添えている。

筆者の居室に、今も掲額しているのは

人生の旅路の中の今日のいま 可宵

のスズメの絵の一幅はその上句である。

可宵はこうした神仏関連の催事の世話人の

ほか、長崎市のもう一つの愛郷グループのリーダー役をつとめている。また引揚以来、長

崎刑務所を訪れ、川柳講話のあけくれを過ご

すなどで昭和60年には藍綬褒章を受章したことから平成3年5月には両陛下や皇太子さま

などの各皇族による赤坂御苑に可宵夫妻も招待される筈に浴している。

お言葉の赤坂御苑若芽萌ゆ 可宵

がその折の九十一翁可宵の句である。

こうした善根奉謝のキメ細やかな晩年を過し、平成8年3月17日死去、享年96歳。

昭和36年の初夏、天皇・皇后両陛下を長

崎へお迎えした折、私の手描きののれんの天覧を賜り、そのあと雲仙の薊谷へお立ちになり

「スカーフに若やぎ給う薊谷―と詠ませて頂いた感激は今もって忘れられません。長崎川柳協会を結成して会長に指名頂き、山田和幸氏を理事長にあて、爾來微力を尽くして参り

さらに私の長崎川柳社も、坂本柳峯氏はじめ

同人皆様によるあたたかい御支援、御激励により、機関誌『ながさき』も通巻二百十号を

越え、深謝の極みであります」(筆者宛書簡)

▼次号は「江原とみお」

# 古川柳歳時記

## 『雛祭』

清 博 美

「灯りをつけましょばんぼりに、お花をあけましょ桃の花」とは、雛祭を歌った童謡だが、幼女が雛壇の前にチヨコンと座って嬉しそうに雛を眺めているという雰囲気がよく伝わって来る歌である。

さて、『源氏物語』や『栄華物語』、あるいは『狭衣物語』などに、ひいな遊びのことが、しきりに記されている。平安時代、玩具の雛をひいなと呼び、幼女がひいな遊びと称して、これに乗物や食器あるいは館などを使い、ままごと遊びのようなものを行っていた。

雛祭の語が文字で見られるのは、寛永二年頃かららしいが、それ以前にすでに民間では雛流しが行われていた。雛を流す前には、一時、屋内で飾つたに違いない。

三月三日の節句は、三月の最初の巳の日に

行われ、この日宮中では節宴を挙げ、供物をし、鬮鶏や曲水宴が催されたりした。その供物には、桃花餅・草餅、後に桃花酒や白酒が用いられたという。

この節宴と、平安朝時代から行われていたひいな遊び、さらには民間で行われていた雛流しなどが結びついて、江戸時代初期に、いわゆる三月三日の雛の節句となったものらしい。

『了阿遣書』を見ると、「三月の雛遊、骨董集上編（下巻前、廿一葉左）曰、天正の頃も、いまだ三月三日に定らざりしが、御傘にも、雛を雛とす、増山の井（寛文三年印行）三月三日の条に云、雛遊こそ髓なる期もあらねば、打まかせては雛なるべし云々、聊あひしらひあらば、此頃の俗にまかせて、今日の

事にもなりぬべし云々、とあり、是等を合せ考えるに、三月三日を期せしとは、遠からぬ事なるべし、天正以後の事歟」と記して、その歴史のあまり古くないことを推測している。

江戸時代初期には、菱餅と白酒を供える程度で、極めて質素なものであつたらしいが、時代が進むに従つて、雛も華美豪華になり、飾りつけも派手なものに推移していった。

『骨董集』に「寛永より元禄のあひだの絵どもを参考するに、当時の雛遊は、いたく質素なりき。たゞ座上に敷物してすゑ置のみにて、壇をまうくることなし；其角が五元集に、段のひな清水坂を一目かな、といへる発句もあれば、たま／＼段をまうけたるもありし歟。享保にいたりて一段をまうけたる図あり」などと記されている。また「我衣」には、「八九年のころは役者の似顔或ひは傾城買の風俗、も、引き半天などの人形も十間店に見へ候。しかし余りあほうらしよき人は買はざりし」とあり、文化年間の細工雛の流行を伝えている。近年もその季節になると最近話題となつた人物などの雛が店頭に飾られるが、こうした際物の雛の制作は、既に文化年間の頃から見られるという次第。

また、華美豪華になつた雛人形を、江戸幕府が見逃すはずもなかつた。当然締めつけが

行われる。「雜一尺余ハ来年(寛政二年)より充候事不二相成一候段、町奉行より問屋々々ハ御触出候ニ付キ、当春ハ定めて尺余の雜ハ安からふと皆々調へに參候ニ付、却て例年よりハ高値ニ御さ候由。尤節句限りニ候へバ、跡に残し候て役にた、ぬから安く可レ売事と存候へ共、存之外左様ニ無レ之、随分来年迄も困置、来年古道具屋へ出し古雜のつもりにて充候心得の由。どふも油断のならぬ奴也と申候さたのよし。来年わりハ金入ハ不用ニ候へ共、其代りニびろうど、どんす、こはく、さやちりめんにていか程も当世風ニこつくりとしミニ衣裳を仕立候よし、雜の値段来春よりハめつきりと格別高値にニ可二相成一との事のよし。当世風ハ余りけやけきよりハヒミにこつくりと落つて金の入候やうに見せるが当世風のよし、雜も金入を用るハ却て昔風にてこつくり仕立が当世風じやとさたのよし」などと「よしの冊子」は当時の混乱を記している。

さてまた、少々長くなるが、原胤昭氏が雑誌「江戸時代文化」第二巻第三号に、「八丁堀の雜祭」として、当時の飾りつけについて詳細に記述されているので、紹介しておく。

「雜の飾り段 九尺四方、わく組立て左右背三方は襖、段七段、上の段人形の背後に小屏

風を立て廻し高くみすを掛ける。正面の前は鴨居の上ランマ、紫幕ふと房、正下面段の前、金の小襖を締める。雜人形 内裏、五人雜子、左右大臣、唐子、犬はりこ、人形の数は多くなかった。人形の大きサ七寸、高サ七寸は法定の人形尺だ。面白い事まで法制があったものだ、享保三年の御触にそれがある。顔は惣じて京都顔、みやびた目鼻立ちの揃った若い面貌。雜の道具 座右品、納戸品、化粧具、茶器、香具、楽器、遊戯具、膳部、其他、道具の形容は、重ね簞笥にて高サ六寸。雜の供御 二日の昼、三日の朝、昼に細小な料理を整へて供へる。膳部の器具は、他に較べて大形。膳の径で五寸。それは女兒が互に友達を招いて喰べきせるので。雜の飾付 二月の末に飾る。三月二日を宵の節句、三日を本節句と云ふて、女兒は皆礼服を着、来客を迎へ、互に家々へお雜様を拜見に行き来した。…」とある。

最近の雜をえらく派手なものになったと感じていたが、これを見るとどうやら昔の方がはるかに豪華だったようである。昨今では、これだけの雜を飾るには住宅事情が伴わないであろう。先ずは、娘が喜べばそれによしとするほかはない。

木娘も世帯しみたる雜祭

六二 3

一飾付けにたすき掛け。

雜まつりおらん所へも来なといふ

明六鶴 2

一娘同士が雜を見せ合つ。下町のおちやつ

びい達

雜まつり是からこふは姉様の

明七礼 3

一母の雜、妹の雜なども一緒に飾つてあるが、自分の雜が一番いいと思つている。

村の嫁今戸のでくてひなまつり

天元天 1

一豪華な雜がある一方、今戸焼の土人形で雜祭りをする所もある。

雜まつり旦那どこぞへ行きなさい

明四礼 2

雜まつりはいしゆ大きにてれて居

明四智 1

一雜祭りは女の節句、男は居場所がないのである。

雜祭り皆ちつほけなくだを巻キ

宝十義 3

一気のわるい生酔の有ル雜まつり

宝十義 3

一気の悪いは、酔態を見てみだらな気になるの意。

美しい生酔のある雜まつり

一四四 28

一娘が白酒に悪酔い。当時の生酔は泥酔の

意。

労咳があるので淋しひ雜祭り

傍 24

一労咳は肺病。娘が病気で楽しいはずの雜祭りも。

# 秀句鑑賞

同人吟 河内 月子

—2月号から

ならず、よろこばしい限りです。

遺書にしてあれこれ指図してやろう

林 荒介

昭和四十五年の堺川柳会の新年句会で、中尾漢介先生が現在日本の川柳作家の平均年齢が五十二歳ですという事を教えてくださいました。当時、私は未だ三十歳になっていませんでしたし、つき子さんが平均年齢を大きく引き下げてくれましたなどと、ユーモアをまじえて励ましていただいた事を思い出します。ところで、最近ではその平均年齢がずいぶんと高くなっているような気が致します。しかし、日本人の平均寿命もその頃から考えると、ずいぶん高くなりましたので、平均年齢の上

がったことは余り気にかけないことにします。それより時代感覚をしっかりと掴んだ作品を作ることや、世間に特にわれわれより若い世代に受け入れられるような作品を作らねばならない、という私なりのテーマを持ちつつけて来ました。そしてとてもよろこばしいことに平均年齢が高くなったにも拘らず、作品は逆にずいぶん若返って来ているように思えてなりません。これは指導者層の方々のみならず皆様方のためまざる精進のたまものにはか

川柳作家はみな大なり小なり一言居士の要素を持って居られます。然し死んでしまえば意見も述べられないし、それが悔しいので遺書にして指図をしてやろうという算段です。ユーモア感覚のたのしい作品であると共に、一つの会の運営を司る立場にいる人の心づかいも窺われて味わい深い作品となりました。

山頂の露天風呂から見る夕陽

山門 タミ

読むだけで心が洗われてゆくようなおらかなひろがりのある作品です。幸せな自分そのまま言葉に表わすことは難しい事ですが、川柳作家の表現力は軽々とその難しさをクリアしてくれました。素敵な作品です。

水ぐるま流れに背きたくなつた

鈴木 公弘

悠久の流れの中で水ぐるまは回りつづけています。作者も一つの流れの中で水ぐるまの

ように回っていますが、水ぐるまと違つてころは意志を持った人間です。そしてたった一回きりの人生だけしかないので、自分にか出来ない大事な事があれば、流れに背いてもやらねばならぬという強い反骨の精神が詠まれていて、頼り甲斐のある男性を思わせてくれました。

年金をもらうと命おしくなり

藤田 頂留子

年金を手にはじめて感じた自分のいのちの重さ。表向きにはそうでしょうが、現実には振り込まれた年金を引き出して、スーパーに行つて買物をしてしみじみ年金の有難さを感じたのです。「まだまだ死ねないぞ」と強く自分に言い聞かせる作者の顔が大写しになっています。

人生のあちこちにある急カーブ

高瀬 霜石

ご自分の体験を通して生れた警鐘の句と受け止めました。「好事魔多し」の格言があるように絶好調の時こそ気をつけないと、急カーブをスピードのまま走つて取り返しのつかない事になりますよと教えてくれています。

方位学行きたい方を吉とする

川上 大輪

何とすがすがしい作品でしょう。プラス指

向の句は見るものを勇氣つけてくれます。因習や人の意見にとらわれず自分の道を信じて進まれる姿ははた目にはとても魅力的です。ご自分の力量や方向性をしつかりと見据えて生きて行かれる姿は尊いものです。

ふと妻が弱気を洩らす湿布薬

蘭田 蕨 杏

私を励まし続けてくれた気丈な妻。私には百万馬力に思えた妻がある時、気弱なことをつぶやいた。こんどは私が励ましてあげなければと感じた時にこの句が生れた。奥さんのつぶやきを聞きのがさなかったのはいたわりの心でしょう。

コーヒの香 散歩はここで終りです

榊 本 露 児

家の近くの喫茶店でしようか、散歩の終点はここに決めて居られるようですね。最近はお社本会もずっと奥さまご同行ですから散歩も多分そうでしょうね。おいしい珈琲の香りに吸いこまれてゆくご夫婦の姿は絵になりませ、いつまでもお元気で。

ゴキブリの肌は時間を煮た色か

桑 原 道 夫

人類より何億年も前から地球に存在していたというゴキブリ。あの嫌われもののゴキブリもよく見れば美しい餡色をしています。時

間を凝縮すればきつとあの色になるに違いありません。テフォルメの句。

闇魔さん今も信じて嘘言えす

金 崎 峰 子

「嘘ついたらエンマさんに舌抜かれるので、ヤットコで」。小さい時に聞いたおばあちゃんのことばが未だに耳底に住んでいるのでしょう。人を喜ばしたり励ましたりする嘘や、いい意味での嘘も結構たくさんありますので今まで嘘ついた事はないとは言わせませんが、この作者、嘘は多分下手でしょう。おばあちゃんのヤットコの話が強烈で、その時のカルチャーショックは死ぬまで治らないのです。

じいちゃんの馬鹿その齢で二日酔い

岩 津 ようじ

とても愛情のこもった「馬鹿」です。これからすればうちの主人は「大馬鹿」です。何べんも二日酔いをしては「もう飲めへん」と言うていましたから。

もういいかい まあだだよとは死ぬ話

板 東 倫 子

生きるの死ぬのといった、ともすれば深刻な内容をこんなにもユーモアたっぷり表现出来的のはさすが川柳作家です。目を皿のように探してもユーモア句がすぐれないのは、作品の軽さとはうらはらにユーモア句を完成さ

せる難しさをのりこえる信念が必要だからです。この作品にふれた時の嬉しさは比べようもありません。須崎豆秋作品を彷彿とさせてくれました。

大海に出てふる里の井を忘れ

井 上 白 峰

「井の中のかわず大海を知らず」の格言はどなたもご存知ですが、感覚としては今や化石のようなものです。この作品は逆に自分を育ててくれたふる里を見向きもせぬ現代を痛烈に批判されているのです。格言を材料にされた作品はどれも焼き直しの感があって、成功しにくいのですが、この句は見事にそのバーをクリアされました。

部品ガタガタ心は若いままでいる

最 上 和 枝

部品のガタは大なり小なりお互いさま、あとは考え方で勝負といきましょう。作者は中七下五と心強いことばで作品をまとめられました。プラス指向は川柳で培われたのでしょうか。いつまでもこれを自分に言い聞かせること。つまり脳内革命は生きている限り忘れないことです。

終りに雛の月にふさわしい句を……

お雛さまも孫もはたちの春となる

西 村 早 苗

# 水煙抄

## 高杉鬼遊選

横浜市 伊藤ふみ

横浜市 丹下智洋子

電線へひと休みする昼の月  
水面下くぐった金は錆びてくる  
神様の賽銭取賄ではないか  
会ってどうも別れもどうも通じあう  
佳い年へ牛車の轍続いてる

富田林市 山原昭水

禁酒中梯子酒する夢をみる  
すき焼をいっばい食べて誕生日  
賞罰無し平凡に生きとろろ汁  
会釈する女を妻が問いただす  
古寺巡り地酒とであう嬉しさよ

尼崎市 長浜澄子

一刀彫りの木偶と刹那を通じ合う  
爪先に迷いが見える厄おんな  
軽々しく言えぬ愛とや生きるとや  
頼りたいおとことおけら火を回す  
コックリさんに夢中になったことがある

一人立ちせよとクツション外される  
年金の先は確かか長寿国  
奢られる裏推し量り渋る箸  
地吹雪の唸りじよんがら三昧に聴く  
画題読み余計解らぬ絵を睨む

秋田県 湊修水

色どりに赤いらデイッシュユ七日粥  
当選の誓いを破る不埒者  
老人の薬値上げに荷担する  
すき焼きに噂の男煮えつまり  
厚相になった矢先に裁かれる

東大阪市 谷口義

これが最後これが最後と母が来る  
あわてまい後ろの席はあいてます  
長男は帰って来たらすぐわかる  
身の丈に合ったところへ嫁にやる  
葬式の幕も流行があるらしい

鳥取県 山本正光

葛藤を捨て切れぬまま年が明け(昨年妻死亡)

中天に初日を拝す喪のさなか

亡きあとも亡妻の時計が止まらない

喪のなかで嘘考える足のうら

日本の無い人生で愚夫愚妻

倉吉市 山中康子

花鉢の機嫌さとして冬ごもり

暫くは今のまんまで様子みる

手加減をせねば沸騰してしまふ

体調をやいやい言われ医者に行く

梅の花ちらほら咲いて春匂う

八尾市 神原まさと

ポーナスも忘年会も無くて除夜

流感に妻がかかって寝正月

出せば来ず出さねば届く年賀状

退職後買うものとするカレンダー

大阪城光ってますと梅便り

今治市 渡辺南奉

ライバルと言われうれしい時がある

油断する鬼で可愛いなと思う

ときめきもしびれも鈍くなって来る

華やかに咲いても所詮曼珠沙華

生真面目に生きても敵は山と居る

米子市 猪森スミエ

数の子が子供増やせとひとりごと

福の神舞い込む扉開けておく

不整脈 面に出さず嫁姑

裏方でコツコツと居て波静か

診察券見分けて医師を梯子する

横浜市 金森徳三

結び目のほつれたままに年が暮れ

夢で見るトイレいつでも清掃中

密談が気になる春の部長席

古い二人イブはとん汁ワンカップ

止むを得ずくすり一緒に年を越す

和歌山市 吉村さち子

元旦の計報に屠蘇も冷えたまま

不意の死に金の在りかに狼狽える

一寸先の闇のことなど考える

使用済み通帳なぜか捨てられぬ

進学の孫にはしごの神頼み

新潟県 高野不二

兵隊の気楽さ前を向いたまま

やつと満期の保険に税がつきまとう

眠れぬと言いいい楽にする昼寝

貰う方も指折って待つお年玉

ニュースにも馬鹿さ加減に腹が立ち

謡曲をうなり候 事始め

兵庫県 倉垣 惠美

春を舞うしよくばんまんのほっぺして

良い知恵を出さねばならぬ冬の蠅

わがままに祈る悪女になつてくる

振り続けなければならぬ母の鈴

大阪市 和田 和風

お歳暮に近所はばかりの小役人

太陽党 民にとどかぬ冬日射し

家長の座あつさり譲る紙オムツ

老兵は消えたいけれどままならず

よろけつつ起てた歩けた梅ひらく

横浜市 鈴江 純子

名を呼ばれつい返事したかくれんぼ

横になるスペースだけはとつてある

ぎこちなく抱いて母親一年生

長電話 洗濯の水止められる

主婦業を休めと旅の案内書

泉佐野市 山本 蛙城

これからは邪険覚悟の一円貨

大発会めでたく下げて政不信

喜寿の賀詞 念を押されたなと気付き

ビッグバンドどこ吹く風の国である

頼もしや重油禍浜もポランティア

散らかったままで正月来てしまふ

先ず母を見舞うてからの初詣で

頼みごとあつて玉砂利踏んでいる

タイミング合わぬニューヨークが宙に浮く

夢たんとつめこみパンクしたプラン

豊中市 石川 勝

好きなもの食べよと医者に見はなされ

水はきたがカレライスはまだこない

どう電話きいたか香典もつてくる

酒が出てうっかりお辞儀してしまふ

ご用心妻がやさしい声で呼ぶ

兵庫県 円増 純子

想い出の歌で終りを締めくくる

団交が終つて元の部下上司

まぐれでも糸が通つてほつとする

エンジンがすぐにかからぬマイペース

感謝さえしてればこの世素晴らしい

伊丹市 榎谷 郁子

新聞のちらしが威張る十二月

喪の家に喪の知らせ来る歳の暮れ

碁敵に一步遅れて永遠の旅

窓拭けば師走が見える茜雲

歳末の中に居りたく街へ出る

今治市 越智青園

喜び上手でいい事ばかり寄ってくる

黒い海地球がせまくなつて行く

胸の刺抜けばふき出しそうな血

もう欲は出さぬと宝くじやめる

肩書きが消えて名刺も売れぬなり

今治市 村上久美子

笑うても泣いてもつまり皺になり

死んだふりする虫ケラの生き上手

艶歌など唱えぬ冬のキリギリス

長生きのためのおすすめもの足りず

陽の射さぬところではぐれる影法師

横浜市 福田由美子

大病院 氣力を試す待ち時間

留守電へ一息入れて話し出す

帰省して嫁をすっかり演じきる

年賀状 仲良さそうな夫婦の名

特番が続き正月騒がせる

香川県 田中ふみ

カルチャーの席が取り持つライバルで

肩の荷を下ろせば温い風と会う

年金で義理を果たせる有り難さ

老いの身を淋しくさせる童女の死

大切に生きよう命ある限り

宝塚市 飯西ミサヲ

義理人情借りも忘れて寝正月

終盤が近くなつても先見えず

箸ナイフ両刀使いで母達者

尊厳死それでいいのか〇をつけ

岡山県 土居ひでの

牛の瞳にはほほ笑み映るおらが春

宇宙から見れば地球も小さい星

掌の樹が愛しくて積む夜なべ

山茶花の真紅に炎えている二十歳

羽曳野市 安芸田泰子

米一合炊いて無口に日を過す

耳掃除 冬の日差しへ膝を貸す

冬枯れに命の色の寒椿

かけがえのない一日が無為に過ぎ

横浜市 菊地政勝

いい夢をみたくて枕買い替える

じゃんけんはいつもこぶしを出すばかり

助手席でナビゲーターは妻の指示

ワープロに相手されずに書き続け

熊本県 増田一乗

日本海 重油が漁業駄目にする

気おくれで普通ハガキに書く年賀

寄った孫それぞれ帰る始業式

大蔵省株価下落に手が打てず

和歌山市 水田 秀男

ナイアガラ水は何処から湧いてくる  
欠点を隠してもまだ三枚目

おみくじの重さに耐えている小枝  
紅白を見てわが歳を感じたり

益田市 岡田 たけを

愛想よい隣の嫁が良くみえる  
正月が荒れる神様留守らしい

追ひ羽根を知らない娘等のシヨッピン  
子の部屋の鍵が絆を遠くする

堺市 梶本 哲平

五百兆借財あつて国の春

今はもう反骨かすれ粗鬆症  
家族写真いつもまんなか妻が居る

花八分さざんか三分われ枯葉

米子市 小塩 智加恵

ひとり子に嫁いだよめだ受け入れる  
ニューストップ リマ報道が今日もゆく

子や孫が帰って老いの寝正月  
片ちびの靴が慣れてるシヨッピン

横浜市 宮村 ちよ路

ホスピスでストレスもなく延命中  
カイワレがまだ拗ねている碗の中

開けてから無駄とわかった福袋  
こんな坂なんだと影もばす腰

横浜市 近藤 道子

願い出ておこう私の安楽死  
五感みな全開にして春を待つ

防腐剤入れておきたい脳の中  
春なのに一つの窓が開けられぬ

松江市 松浦 登志子

子葉がカーサンゲンキ電話口  
お年玉期待どおりで有り難や

初春に花びら餅の味くらべ  
牛二頭ねずみ2匹の弥次郎兵衛

兵庫県 谷田 多美子

世渡りの下手な女の一人言

大正の丑の女のクラス会  
投句して今日はしばしの休息日

叩いても埃も出ない歳の暮れ

河内長野市 水谷 笙子

おみくじにルージュをつけて結んどこ  
正月の活け花 主婦を主張する

年賀状もうクラス会キープされ  
嫁孫らスキー 犬だけ里帰り

高槻市 傍島 克治

義理堅いお方肩こり直らない  
語意違う妻の辞引と俺の辞書

行平のお粥なつかし風邪の床  
北風よ心して吹け仮住い

独り居は気ままな時に初詣で  
浄土から年賀がほしい初夢に  
今日もまた後家のがんびり肩こらす  
過去の苦はあなたの棺に入れました

尾崎市 小川富江

母さんにリングを送る北勤務  
お屠蘇だけ許し下さい禁酒中  
子の風邪に姑が慌ててとんでくる  
世情騒然 忘れられてる北の島

尾崎市 尾宮弘治

資格取るまでは何にも目をくれぬ  
本人の都合も聞かず首にする  
さわやかな嫁で仏も御満足  
口実と知らずに何もかも信じ

鳥取県 山内芳江

蟻の列はじかれそうな改札機  
列島の穴場知らずのパスポート  
地球儀に明日の予測がでかかねる  
玉に疵始末に負えぬ理論好き

東大阪市 松山隆

悟りきって風より軽い頭陀袋  
運動会とつぜん妻を借りられる  
親展に息の乱れが入れてある  
原罪が脱ぎすてある乱れ箱

鳥取県 原みさを

子が巢立ち孫も巢立って一人住む  
鷺一羽小雨の夜は何処で寝る  
漁師町 海辺の匂う千かれい  
長い国 表は晴で裏は雪

八尾市 高橋明子

思いつ切り脳波ゆさぶる春一番  
少しだけ私も浮かれだす芽吹き  
深山のエキス五感を包みこむ  
森に来て昨日の私脱ぎ捨てる

広島市 流奈美子

冬將軍 風邪を率いて攻めてくる  
別れ道仲間の多い方へ行く  
同じ道同じところでもまた迷い  
噂では僕が酒豪になっている

八尾市 村上剛治

欲張って後ですばんでくるプラン  
目くばせがわからずほんまのことをいう  
明るい話ときどき人をつき落す  
大魔王とジャンケンをして勝ってやる

羽曳野市 徳山みつこ

私にも意地があります風車  
申し訳ないが女房が一人いる  
砂浜の噂は知らぬ深海魚  
不倫かも知れぬ吊橋また渡る

岡山市 藤原一平

和歌山県 木村初子  
ありがたや天がおまけにくれた喜寿  
唯老いる無為反省の屠蘇祝う

伴せは疎遠の友と逢う賀状  
悟り切った姿勢崩さぬ寒椿

鳴門市 八木芳水

風船をつけて年金振り込まれ

妻が居て返事に困る電話口

理想とはいよいよ遠く世がかわる

糖尿病候補になった万歩計

尼崎市 森安夢之助

淋しいな忘れられてる俺の貌

リストラの首が浮いてる露天風呂

母さんの一言岩も崩れだす

柿の渋ぬいてバツイチ恋をする

富田林市 中井アキ

私のバランスシート狂いだす

言い勝って哀しみ色が深くなる

昨日とは違う私が見えて来た

言い訳を黙って聞いて寒い耳

和歌山県 杉山精子

ひとりぼっちの窓から今日が夕暮れる

自惚れのページが白いまま残り

なないろの葉に私支えられ

情念の川に積もらぬ雪が舞う

夢袋まだ繕って古希の春

金婚へよくぞ続いた夫婦若

清らかな心に怖いものはない

爪に火をともしポックリ寺参り

綾部市 藤田芳郎

無事が良し平凡が良し白く干す

安らぎが欲しくて群と手をつなぐ

万策の尽きて美学が見えてくる

その時の三途の川は泳ぎ切る

大阪市 一本勇太

居酒屋で父が落して来た影絵

半音が狂う凍天父の戯画

夫婦別姓男胸毛が退化する

八十年飽きず寄り添うシルエツト

尼崎市 河津正治

嫁ぐ娘に嬉し淋しい酔芙蓉

二番手と呼ばれ氣を揉む福寿草

コスモスが揺れて笑顔の瞳と出逢う

背信の影追いかける丸い月

横浜市 秋元和可

美容院女の憂さの吹きだまり

ハンドルを切りそなた今この位置

暖房の部屋で各地の除夜の鐘

平日もお子様ランチ日章旗

兵庫 大谷 幸次郎

あかぎれの足も入ってくるこたつ

年金のへそくり予算組みかねる

虫喰いの穴見てからのナフタリン

生くさい顔が精進料理食う

和歌山 楠見 章子

カレンダ―の壁キムタクに乗つたら

脳内革命そのうち読もうと年が明け

写真たてどれも幸福だった頃

無言電話ストーカーにちがいない

徳島 安宅 美代子

かけ足で近寄る年を突き離し

明日もまた心ふき掃きして暮らそ

身勝手なエゴが築いたピラミッド

茶摘み唄流れて嫁の里帰り

尼崎 田辺 鹿太

妻よ子よ演歌は僕のラブソング

しあわせは小さい方が性に合う

迎合はしないわたしの鼻柱

やっこ風 本音は高所恐怖症

高槻 乙倉 武史

歩いては来ない健康歩かねば

呆け防止春七草の名も覚え

自分史は自分を褒める外はなし

うどん食う知恵割箸が性に合う

鳥取 藤山 弘子

独居には電気こたつが丁度よい

官僚へ重さくらべの贈り物

プライドが病を重くしています

お宝はないが幸福ある家庭

愛媛 中居 善信

背伸びする男に腕さつきまとう

護岸工事にメダカの住めるところがない

バランスを保つ人事に踊らされ

淋しくて僕も開けるよ玉手箱

静岡 小木 久子

覚えのないに噂が一人歩きする

手紙書く返事はみんな電話です

慎重に過ぎて解決延びにのび

納得がいけば協力惜しまない

寝屋川 井上 すみれ

タテマエと本音とにあるきしむ音

兄老いて位置づけしかと咳ばらい

サロンパス遂に相手にしてくれず

痩せたい齡太り肥えたい齡に痩せ

唐津 宗 弘

平凡のなかに実のある年願う

無神論者わが家の先祖だけは別

六十の舌に駄菓子恋がある

素肌美が不安になって化粧する

セピア色の夢立ち上る木の芽どき  
人波にもまれ何故ひと恋し  
成田市 齋藤 房子

今日こそは明日こそはと薬の馬

ボカボカ陽気 街へ若さを吸いにゆく

兵庫県 高見末野

成人の孫から貰うお年玉

母と娘がゆっくり話す小正月

神様へ使い古した身をゆだね

穏やかに押して押されて初参り

唐津市 江川青琴

お年玉嬉しい悲鳴孫五人

年賀状書き終え肩の荷を降ろす

正義感強いばかりに敵ばかり

散歩道きつと待つてるよその犬

吹田市 石原靖巳

寅さんのいない正月物足らぬ

たかがカードされどカードで火の車

手土産の賞味期限が過ぎている

冬の蠅のろのろと哀れなり

鳥取県 権代康女

仲なおりひにち薬で待つとする

運の好いドングリだけが生き残る

方言の方が心が通い合う

責任は持てないからと言っておく

相槌は打つが主張の無い男  
お互いに凭れかかって居る夫婦  
妻の掌の上で堂々巡りする  
へそ曲げた存在感で自己顕示  
海南省 谷口義男

砂川市 武田正美

からふるな電話で夢を語り合う

作戦を変えても同じ路地の風

いつまでも続く私の冬の刑

告白をされる一瞬夢が覚め

静岡市 佐藤次枝

読むよりも眺めて楽し孫の文

遺品整理かたくなまでの母の性

政官業癒着 福祉も泥まみれ

ゆっくりと煙草ふかせて妻の留守

羽曳野市 川田晋

新巻の熨斗つけかえて提げて行く

出す出さぬ毎年悩む年賀状

日曜は炬燵の城にこもり切る

つい声が洩れる起つにも座るにも

横浜市 豊田羊子

我が家にも年末年始風邪が来る

ペースメーカー無事に牛歩の年が明け

数え年書いて驚く祝い箸

残り火に心ならずも灰をかけ

横浜市 川島良子

折り返し地点で鶴が舞いはじめ  
化粧する女いつでも翔べるよう  
ダイヤルを何度も回す胸さわぎ  
行き届く気配り足が崩せない

大阪市 福岡雅子

長生きをすればするほど一人きり  
散る紅葉ラストダンスを風と舞い  
自己に克つ好きな言葉であるけれど  
ゆっくりと雲を見つめてお正月

富山県 増田紗弓

亡父亡母に今でも逢えるお正月  
富山では鯛の恰幅祝い膳  
ふぞろいの折鶴が好き白衣着る  
リハビリの目標にする鶴千羽

大阪府 澤田和重

降りる駅 切符改札機が食べる  
一人居に猫が家族の顔でいる  
山ほどの葉に今日を生かされる  
遠慮して食べると味がでてこない

大阪市 三浦千津子

本腰を入れよう春の幕が開く  
学歴に差があり前へ進めない  
若さにはついて行けない鬼ごっこ  
反対へ回る人にもある都合

八尾市 鷲見章

歳末の妻の多忙を見るばかり  
年新た煩惱多き我なれど  
新春を待つ我が家にも福寿草

兵庫県 北川とみ子

髪染めて翔んでる妻の酔い心地  
温かい言葉に飢える紙コップ  
裏切りの科白は雑魚も持つている

和歌山市 木村親路

憲法がもういいかいと顔を出す  
大都会二度と会わない人ばかり  
セクハラも好きな男は別ですよ

大阪市 川久保睦子

電飾を消され枯木になる寒さ  
前頭葉叩いて知恵が出るのなら  
油断です歌を忘れて泥の舟

北九州市 岡田幸生

⑤は梓だけもらい空いている  
カラ出張 身内の官もあきればはて  
窓際に苦労を捨てる籠がある

神戸市 船津とみ子

借家でも堂々として住んでいる  
新しい駅舎掃除が行き届く  
打ち水を踏んだ靴跡かんにんね

今治市 渡邊 伊津志

幸せは裏を返してやって来る

褒めるところ探しまくっている苦労

チリメン雑魚の雄と雌とが気にかかり

大阪狭山市 伊藤 尚子

真つ直ぐに伸びたい枝を無理に曲げ

叱ってる私の方が悲しくて

内職に丁寧すぎて断わられ

八尾市 山本 宏

福袋いらぬ物を買ってくる

どのあたり心の旅路二度童子

どう見ても母似ではない高い鼻

富田林市 藤田 泰子

スタートライン引いて後ろは振り向かぬ

流れ星 私胸に突き刺さる

三年の時間に心癒される

和歌山県 中後 清史

構図通り吹いてはくれぬ娑婆の風

拒まれたときの台詞も整える

ラブレターなど焦れたいギャルの恋

八尾市 平川 幸枝

生ゴミが高張る暮れの勝手口

この流れ捕らえなければ逃げられる

逃げもせず病に飽きる日向ぼこ

尼崎市の場 十四郎

晩成の子に背負われて春を待つ

風雪を濯ぎ通した妻日記

三角が崩れて丸くなつたなか

神戸市 向井 泰子

孫嫁のリズムで初春の街を行く

小吉のみくじがぬくい杜の風

ああ重油三千トンを汲むひしゃく

兵庫県 西川 一 繁

いつも見て通るお宮へ初詣で

八ッ当り妻にすまんと胸の中

手みやげの重さでウンと喋ってやる

鳥取県 埴 寛子

不景気が信心させるそれもよい

鎮痛剤 余生延びたり縮んだり

アドリブでつなぐ二幕目老夫といふ

和歌山県 吉田 武治

諦めが早いぞもつと考えろ

お陰さまおかげさまでと今日も暮れ

これで良いのか日々反省を繰り返す

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

絵ハガキの思い届かぬ花言葉

城が浮く夜の都心にいる寒さ

十二キロ孫の重さに負けた腰

富田林市 大橋鐘造

今年こそ今年こそはと来た今年

花咲いてやつと気がつく野辺の草

節分の鬼を集めて相撲とる

横浜市 保田絹子

酔い醒めの口もと拭い無表情

着ぶくれの座席少うし摺り寄せる

太々し居眠る髭の青二才

兵庫県 仲井素水

久しぶり和服で通す三ヶ日

億に兆 夢にも見ない腐れ金

六文があれば逝けると負け惜しみ

横浜市 山下省子

人並みにインフルエンザ招き入れ

気は心でも欲しくないから困る

肩パット薄くしてから変わる視野

兵庫県 安達厚

菊の香を葉ぼたんに替え暮れを待つ

孫が来てはしゃぐ食事度を過し

古稀迎え牧場の牛のように生き

羽曳野市 西村りつえ

笑ってるわりには福が遅すぎる

水ぬるむ凍てた心もとかさねば

無理せずに甘えなさいと影がいう

大阪府 奥野義夫

ダム工事一つの村が泡になる

ときめいてやがて空しい待ちぼうけ

救急車近くで止まる妻走る

横浜市 後藤早智

水やつと合ってきた頃辞令出る

雲の上このまま宇宙へ行こうかな

わたくしのつつかい棒が疲れてる

静岡市 中西雅

水仙の風にもめげぬ心意気

健康法あれこれいわれ身につかず

初詣で山ほどかかえ願いごと

八尾市 井尻民子

質流れブランド品が客を待ち

給料日風邪で休んでいる夫

見て来たよ夢の四馬路の街の灯を

寝屋川市 瀧本八十八

行革も開けゴマには程遠い

図に乗った住専のつけ背負う民

株式も世相どおりの乱調子

松江市 安食友子

歯抜けだが浅漬だけは止められぬ

ファックスのざんげ律儀にすぎないか

イエスマンそんなこんなでやっている

和歌山市 津村武春

なみなみと注いでお客を逃がさない

追い風を待つて勝負を賭けてみる

何処にでもひびつてゆく絆創膏

東京都 瀬戸きん子

老梅も先を急ぐか暮れに咲く

お正月食う飲む寝るの牛ばかり

凧揚る空地明日からビルが建つ

愛媛県 安野案山子

恥ずかしい過去ばっかりを思い出す

よく動く妻に感謝して朝寝

講師から夢を貰った村おこし

吹田市 西岡豊

親友を悪友にして言い逃れ

板張りの町の会館暖かい

冗談がほんまになった顔と顔

枚方市 森本節子

極楽を味わっているお正月

黒豆は切子硝子の鉢に映え

シグナルの青がつづいて今日は吉

羽曳野市 森田四三郎

初孫もやつと言えたかオメレトウ

神田川 銃はやっぱり出なかつた

献血車協力したし出来ぬ齡

大阪市 立蔵信子

言い訳のたばこの煙見えています

悪口を言えずバリユウム飲んでいる

ふるさとの話をするときりが無い

高槻市 小林一閑

見舞客自分の話して帰る

生きている年が明けたよ私にも

ほそぼそと生きてる味をかみしめる

愛媛県 宮本末子

平凡なくらしの中の寒の入り

年明けて閣僚の名もまだ知らず

若き日の姿見を拭く老いを拭く

和歌山県 藤井春子

本音いつ出するか女の小引出し

雑踏の中へ私を置いてくる

ひと眠りすれば答が見えてくる

唐津市 林公一朗

戦争の美化はやめろと特攻機

リストラの男 空缶じつと見る

一年を牛にゆられて旅に行く

川崎市 和泉見早子

賀状書き終えて忘年会にゆく

握る手をゆるめ何かを子は見つけ

マスクした風邪が無口にさせている

姫路市 服部 一典

残り火を燃やしつづけて灰になり  
娘のバイト彼が居るからよくつづく  
箸に棒にかからぬ男街でもて

大阪府 原 みえこ

セピア色の話は子等に嫌われる  
不用意な一言でした親として  
安いなあ言うても買えぬ宅地の値

河内長野市 印 藤 智 子

病室でお節料理とにらめっこ  
遺言状書いて入院したけれど  
結核になるは美人と決めていた

高槻市 江 原 秀 夫

物忘れほどほど二人丸く住む  
鬼は外 鬼は隣の庭に逃げ  
下向いて黙っているからなお怖い

鳥取市 森 明 美

ふるさとをじっくりと煮る自在鈞  
ふるさとの電話時どき牛の声  
おたがいに天国下見しておこう

横浜市 上 野 天 々

賀春とも良い年にも書けぬ鬱  
七福神 姫一人でも揉めぬ歳  
五分の税のせて駆けだすランドセル

米子市 服部 朗 子

丑だつてこらえておれぬ事もある  
草冠に菠稜草と書いてみる  
助かった命へせめてしおらしく

高槻市 執 行 稲 子

時差づかれ残りのパンの美味しさよ  
カプチーノの泡に魅せられ春を呑む  
千羽鶴 千の願いを聞いてます

和歌山県 村 中 悦 男

朝機嫌良くて一日いい運び  
お愛想がよくても油断出来ぬ人  
過去を追う気持はないが夢をみる

鳥取市 藤 ふうこ

ダイエツト出来るか腹の虫にきく  
屋根で見た花火美し父も居た  
花が好き痛みのわかるひとである

大阪府 団 野 恒

春の水春の音たて茶をそそぐ  
離れすむ子も孫もきて雛の宵  
古都巡り母にまさかの旅となる

松江市 佐野 木 み え

ベイブリッジの見える新居に越すつもり  
朝市でろう梅一枝分けてくれ  
Uターンして農業も活気づく

岡山市 清水 金太郎

日本語は便利 宜敷く願います

銀行も株価下がって利子を下げ

流出の重油ひしゃくが役に立つ

今治市 野村 清美

ひとり寝に風が暴れておびやかす

白無垢を着たまま逝った白椿

難病を治す薬の後遺症

大阪市 平井 露芳

瀬戸大橋の下です皆さん起きなさい

豊作で神も困った米あまり

ひむがしの野にかぎろいを撮りに行き

尼崎市 岩倉 キク子

五パーセント民のかまどは苦しман

つまずいた石をよけるも蹴とばすも

終着駅きつときれいなところだらう

倉吉市 田中 八太郎

花の咲く頃に不思議と金がない

カラオケが下手でスナック遠ざかり

酒のんで転んだ打身とは言えず

島根県 菅田 かつ子

ダルマさんとてもあなたに勝てません

玄関をひとり占めた蘭の鉢

ブルドッグ風格のある鼻の位置

島根県 松本 聖子

年毎に別れがづらい父の顔

あれこれと思い惑うて夜が白み

死亡欄だれもが先に見るといふ

島根県 武島 ちよえ

気持だけ若返らせて年女

長風呂へ時々声をかけてあげ

陽を吸ったふとんやたらと叩かれる

島根県 福岡 博利

美しい顔で寝棺の同い歳

百八つ半分聞いた高いびき

山みちの刺激よろこぶ足の裏

倉吉市 大下 智子

いいところほめて調子に乗せる母

腕よりも免許の方がいばつてゐる

目の前の酒よりほしい手巻寿司

松江市 松本 知恵子

初春なれど地球の裏が気にかかり

重詰めに年毎煮物多くなり

冬晴れ間訪ねて友と小半日

和泉市 横山 捷也

留守電に咳一つしてメッセージ

特価品 嫁った娘の分も買う

タレントは噂流して生き延びる

島根県 谷岡ふみ

子の帰省うれしい多忙三ヶ日

大寒がすめば一日ずつの春

ひな祭り女系家族のあでやかに

箕面市 木村天弘

すかたんも愛敬となるお人柄

酔い心地やたら名刺を配る癖

喉元を過ぎて誓いが風になる

堺市 志田千代

おいでおいでされても梯子のぼれない

しんがりの気楽はくせになりそうで

輪になろうトップとラスト手をつなぐ

鳥取市 岸本宏章

書き初めに平和と書けるありがたさ

受取の期待などせぬガン保険

人脈が切れて梯子を外される

岸和田市 亀井皎月

その話妻もわたしも聞いていた

パン食が食事楽しむこと忘れ

人生にああ疲れたと何時言おう

倉敷市 家守政子

エプロンのままおめでとう嫁と姑

不況でも値下げの効かぬお年玉

三が日過ぎれば元の過疎となる

三重県 佐々木森哉

ハートには激しい恋の火の痕が

飽食のところが抱いている湯き

降る雨の闇へ沈んでゆく孤独

兵庫県 徳平毬子

夢だけはことしも抱く初詣で

新春を年がいもなくうれしがり

ダイエットダンベルウオーク食へらし

東京都 井上つよし

おーいお茶 儂が淹れたよあらどうも

書き損じ切手シートが良く当り

第九と艶歌が競う暮れの町

島根県 三代朝子

ここだけよ尾ひれがついて飛ぶ噂

ワープロの手紙名文届いても

来る年へ夢描きます願います

高知県 百田幸

バーゲンのチラシを先にみる女

町の子に山の空気を送りたい

口下手に居心地の良い隅の席

河内長野市 木太久正一

病院へ妻に付添う小半日

正月を元気に妻と迎えられ

里帰り熱出す孫に大慌て

突然に故障 炊飯器も年か

電球を余分に買うと永く持つ

初咲きのハイビスカスが黄金色

今年こそはもう聞き飽きた日記帳

閑空を見れば不況を知らぬ国

延命治療まだ相談はしていない

眠ってる振りして見るとよく見えた

言い訳を考えている仕舞い風呂

人並みと言うものさしが払う足

咳払い私はちゃんと此処にいる

男ではない女でもないハーフ

知っている事などたかが知れている

神様に見られてるのに気がつかず

子が乗ればわけなく動く一輪車

生き物を飼えば別れが悲しくて

しばられた蟹どっかりと腹を決め

チャンネルのどこもクイズの馬鹿笑い

天井の安い店さき混んでいる

沖繩県 杉谷 一栄

努力した数だけ咲いた赤い花

賑やかな事が大好き招き猫

世話になる嫁さんだから大事にし

転勤は水になじんだ頃に来る

墨の色この濃淡にある深味

森に入り風の形と色に触れ

孫からの漢字が増えた初便り

持ち慣れたバッグを夢でふくらませ

花の芽も寒さに耐えて春を待つ

理屈には合わないけれどその通り

留守番にまかせていても気にかかり

かんじんなことを忘れて酒が好き

定年の賀状が増えて老い深し

境内で梅とおみくじ競い咲く

お月さんもう地震など来ないよね

儚さを幾度か知っている命

上げ膳で女の影が薄くなり

好きだよと山彦返す春の山

十和田市 阿部 喜久江

鳥取県 高尾 京

泉佐野市 稲葉 洋

大阪府 野村 タホネ

大阪府 島崎 孝一

羽曳野市 内田 さとみ

羽曳野市 三好 専平

堺市 井崎 ミサ子

大山市 早川 盛夫

岡山県 富坂 志重

大山市 早川 盛夫

岡山県 富坂 志重

羽曳野市 三好 専平

堺市 井崎 ミサ子

大山市 早川 盛夫

岡山県 富坂 志重

羽曳野市 三好 専平

堺市 井崎 ミサ子

大山市 早川 盛夫

岡山県 富坂 志重

羽曳野市 三好 専平

堺市 井崎 ミサ子

大山市 早川 盛夫

岡山県 富坂 志重

高槻市 左右田 泰雄

琴の音に歩みを合わす書道展  
鬼よりもすごい怪獣子等にもて

北の駅お国訛りのアナウンス

和歌山市 森口 美羽

将来性ありにうっかり乗せられる

コーヒーがだんだん冷めてゆく別れ

後味の悪さ空しい夜にする

鹿児島県 大山 舞鳥影

お若いと言われて歳を思い知る

焼酎と洋酒がもめる税談義

皆勤の通院かせて欠席に

鳥取市 有沢 せつ子

健康が味方 少ない歯をみがく

効能を信じて薬のんでます

きたなくて狭い店だが味がいい

広島県 森川 抜智

客もなくしずかにすこすお正月

カレンダーあまりに先を急ぐなよ

老いの身は日向ぼっこで爪を切る

兵庫県 緒方 美津子

母が居てふるさとのあり寝に帰る

定年という秋のきて個の舞台

人生のラストダンスはソロとなる

高知市 細木 子龍

税務署は妻に任せている黙秘  
贅沢は敵かヒカリが旨くない  
激安の大バーゲンに耳に慣れ

和歌山市

福重 美子

男と女暖簾が変わる旅の風呂

妻病めば何にも出来ず狼狽える

下の世話嫌がる人が世話になり

東大阪府 今岡 貞人

一坪の庭饒舌に四季の詩

一日が終る辞典の背を揃え

枯野から苦惱をこえた風の音

豊中市 岸田 知香子

初春四日一人で祝う誕生日

足慣らし神護仁和寺 初春の寺

年始め人質 重油 多事多難

大阪市 中井 正秀

班長会遅れて座る前の席

釣銭をゆつくりと出す販売機

ハイビジョンつけたら部屋が狭くなり

大阪市 杉澤 汀

犬どうし先ず仲好しになる散歩

背水の陣にも舟という手立て

丸顔と四角い顔のタイア婚

尼崎市 松下比ろ志

前後左右人がいるから温かい  
余命など解るものかと予定組む  
碧く澄む一会の空を雲がゆく

東大阪市 北村賢子

今年こそことしこそはとお正月  
ことしこそ空泳ぎたい池の鯉  
スタートは同じかわい産声で

河内長野市 妹背尽呂久

人材に飢えた社長の神詣で  
人事部が独り将棋を指している  
神のミス飽食の民飢餓の民

静岡市 増田扶美

厄除けの団子栄える女茶屋  
栄光の過去はさらりと二度の職  
形見着て今日は一日母という

鳥取市 山本崇

酒宴より喫茶の席に花が咲く  
去年今年同じ言い草年賀状  
過疎の村総出で海の重油処理

羽曳野市 芦田絢子

外面がいいのは夫も私も  
都合よく忘れて老母は生き上手  
おみくじを結んで気持切り替える

鳥取市 近藤秋星

飲んで寝てまた飲んで寝て三ヶ日  
お年玉あげてるほうがわびている  
役人は嚴重注意だけで済み

出雲市 梅ミツエ

スーパージングルベルが鳴りひびく  
ばたん雪さざんかの花好きらしい  
田の中に落穂拾いのすずめたち

富田林市 欄智久

芽吹くのにそんなに切っいいのかな  
厄除けの破魔矢もそれる事があり  
いつも暇近所の世話をやきたくて

和歌山県 中村君枝

根回しもさることながら出た効果  
レモンティー恋を語るも別れるも  
身から出たさびだと口を戒める

北海道 中里つね一

降る星を妻と眺めて小半時  
セーラームーンわたし聞き役孫がよむ  
過疎の村追いうちかかりダムの底

今治市 塩路よしみ

疲れたら故郷へ足が向きたがる  
故郷の匂いを乗せて過疎のバス  
塗り箸に里芋機嫌とりかねる

札幌市 三浦強一  
駆け込みで十大ニュースくる師走

年金の出ぬ奇数月我慢月  
コップ半分なら分かるまい休肝日

東京都 清原悦子

この町に慣れて地酒の味を知る  
部分染めちよつと白髪もいきに見え

ときめいた愛だが今は一人いる

大阪市 小林周信

残雪を踏めば春待つ露のとう  
ローン終え猫の額で深呼吸

紅白のト리는演歌でホツとする

大阪市 鈴木トヨ子

午前さま足音そつと勝手口

初日の出平和を祈る牛のどか

これも本能我が子が分かる運動会

静岡市 大村正雄

御期待に添って元朝晴れわたり  
外来で難句をひねる待ち時間

千金の時間うっかり寝て過ごす

島根県 岩田三和

酔いどれの殿をいましめくれぬ妻

デパートのトイレファンで今日も行く

健康へやせる気力もない日本

鳥取県 橋谷静江  
大声で笑って見せる気の弱さ  
生きるとは西も東も見るゆとり

伊丹市 延寿庵野鶴

カメレオン迷彩服をいくつ持つ

月冴ゆる鎮守の森を抜ける鐘

滋賀県 中宗明

プロジェクト期待されすぎ胃が痛む

孫が来て昼寝の時間うばわれる

鳥取県 国森武子

お互いに見て見ぬふりも必要ね

少しずつ欲という荷をすてて生き

福岡県 本田忠男

大根蒔く兼業ながら畑がある

子の帰省 妻は家計簿無視をする

横浜市 荒井広和

四季の風素直に受ける石仏

それぞれの歩幅で歩く黄泉の道

今治市 中村好恵

よいことがありそう福寿草の色

他人ごとだから答えがすぐに出る

大阪府 大家風太

なみなみと注げば愚痴だけ返される

飽食へぶっかけ飯もたまに良し

二枚腰 三従の道来た女  
ふところで言いたいことが泡になる

和歌山市 山根 めぐみ  
鳥取市 石上 悦子

元氣出す言葉を決めて眠くなり  
風見鶏自分の意志はどうしたの

千葉県 大川 晚翠

手を合わす幸せがあり神仏  
寅さんの柴又までを散歩する

交野市 山川 日出子

古ピアノ孫と連弾冬休み  
シャンソンは貧しい人も慰める

島根県 児玉 幸子

口紅を少し差してはおばあちゃん  
入舟の七福神を床に掛け

橿原市 西本 保夫

今日来ない妻とわかってバスを待つ  
朝退院昼からベッドすぐつまる

岸和田市 不破 仁緑

血糖値 赤信号の餅一つ  
お年玉貰う時だけいい返事

倉敷市 戸田 正志

闘争心ないが負けると泣けてくる  
シクラメン買えば嬉しいことがあり

べんちやらは嘘も方便ペロを出す  
一枚の義理もやつとこ書く賀状

池田市 木村 一笛  
香川県 向山 治延

ヨチヨチ歩きフツと手を出す親の愛  
豆まけど心の鬼は追い出せず

鳥取県 奥田 信敬

正月が来ないペルーの大使館  
健康の字に迷わされ買ってくる

日立市 加藤 権悟

ホームレス男の美学かも知れぬ  
雪虫やつるべ落しの陽は寒い

尼崎市 中澤 向西

ありがたや屋根から初日拜まれる  
疑って見ても地球は丸かった

尾張旭市 三浦 きぬ

元旦版五日がかりで目を通し  
老い二人妻の目薬さす夫

泉佐野市 大工 静子

仲直り今日の電話に花が咲き  
生かされて孫の婚儀の間に合った

富田林市 杉本 とも子

日が昇る新たな出会いありがとう  
幸せの奴隷になって出られない

空澄む子供の家の肌寒い  
久しぶり子供家族と囲む膳

大阪市 塩谷 徳子

電卓が「願ひましては」遠ざける

大阪市 田中 節子

口惜しいが無言電話に手立てなし

大阪市 尾崎 黄紅

昔はむかしじいちゃんよるさいよ  
ふるさとに指紋残して戻れない

西宮市 井上 俊二

はずむ声娘一家の初電話

八尾市 與田 明

ストレスを忘れる趣味でまた悩み

和歌山市 武本 碧

増税のグシに老人使われる

振り向いた方へ差がつくニュールック

横浜市 明渡 トヨ子

若死にが増え老骨がたくましい  
差出人なかつたわよと電話来る

島根県 槻谷 仲子

里帰り孫が手を出すお年玉

撫で牛に今年の幸をもらいましょ

そよと風 路地にも春が訪れる  
僕の趣味明るい内に飲むお酒

羽曳野市 山本 たけし

十人十色だれの心も計れない  
説法を聞いたその場は為になり

倉吉市 山本 玲子

文化祭で名前を覚えられ  
根昆布を毎朝飲んだ友も逝き

広島県 山本 示風

あきません儲かりません売れません  
木登りの上手な人に道を聞く

和歌山市 和田 美寿子

正月も一日だけの骨休め  
痩せ蛙深夜作業に狩り出され

大阪市 岡本 久峰

内定の夢を見たよと母が言う  
町起こし銅鐸がする恩返し

吹田市 野下 之男

老いてなお節目節目の筋通す  
生き抜いて今日も素顔の少子算

鳥取市 富山 雄幸

日向ぼっこゆっくり脳を遊ばせる  
天二物与えず金に縁遠し

和歌山市 松本 良

枚方市 二宮紫鳳

数の子を食べろ食べろと孫を待つ

ジャズダンス エステもしてこの程度

鳥取市 岸本孝子

奴唄こころ許したふりをする

こたつから何度も跳んだ子も巢立ち

静岡市 松下正枝

水琴窟 余韻ひたすら追いかける

戦後処理解決までの遠い道

兵庫県 西山八重子

振り返る月日に歳をいとおしむ

深爪の痛さに堪えた冬木立

尼崎市 長谷川佳山

詩心があいさつになり札になり

真剣さその輝きを失うな

堺市 上野楽生

ちんどん屋昭和が遠くなりました

きびだんご食べれば鬼も元気づく

岡山市 国米きくゑ

内緒内緒つぶやいている冬苺

好い報せあつてペダルの軽い朝

豊中市 みきわきみ

去年こぞとくに腹立つことの多かりき

蟹かにさせるうちに徳利がさめていた

出雲市 加藤スズコ

好きなこと一ぱいあつて喜寿の春

探しものやつと見つかり気が晴れる

鳥取市 山本益子

ストレスの解消先ずは旅に出る

エリートエリートの位置が邪魔して嫁が来ぬ

鳥取市 向井末貞一

三日目のハワイの旅でうどん食べ

詩人ぶる山野気ままなひとり旅

鳥取県 宮脇道子

戦争の幻背負う肩のこり

自然賛歌虫も葉っぱも我が世界

松江市 浦辺静江

ポケベルがお茶の誘いに返事する

ショッピングバッグあちこち連れ歩く

先月分

広島県 山本示風

瀬戸の海昔返せと魚が言う

敬老会上には上があるもんだ

親に孝 古くはないと子に教え

岡山市 富坂志重

母と子のほどけぬ繩を愛がなう

うら切らぬ土に答えた花の種

次の世の電話番号しりたくて

—水煙抄

# 秀句鑑賞

—2月号から

宮西弥生

大人にもなれずおばあさんになった

谷口 義

現代社会には、なかなかこんなタイプのパターンが多いのです。完全な大人とは、どんな人でしょうか。嘆かないで毎日を前向きに燃焼してゆくのが大切でしょうかね。

どنگりの家族で意地も欲もない

渡辺 南奉

響きのよい句でホッといたしました。作者のお人柄、毎日の生活がリズムカルです。一つの屋根の下は、個性もあれば主義主張もあります。この句がすべて解決してくれました。

別姓の墓のデザイン考える

神原 まさと

現代の新しい結婚観として話題になっておられます。私は古い感覚なのでしょうが、むずかしいですね。むしろ流行・風潮よりも、中

味の重厚なことに問題があると思われまふ。  
無精ひげあなたは夢を捨てたのか

石川 勝

男性の無精ひげだけはいただけませんね。どんどんひげそりの新兵器が開発されてる世の中に不思議です。男性も女性同様に輝いて自己投資を惜しまずに前向きに気持を改めては如何でしょうか。もてますよ。

生きているからゴミが出る愚痴が出る

早川 盛夫

森羅万象、自然の摂理に逆らうことはできません。有難い生きるといふ生命に感謝をしましょう。愚痴も程々にとは無理でしょうか。生活のまわりにゴミを見たら拾うという謙虚さも、今は遠のいたように思えてなりません。

プラスばかりで人間生きていられない

村上 ミツ子

そつです。私腹を肥やすのみでは淋しいです。簡単なことが人間避けて通るという情をミツ子さんはさりげなく五・七・五に詠まれるところ、実に感心いたしました。

六十九まだまだ積木積んでいる

藤原 一平

七十歳と六十九歳ではニュアンスが少し違いますね。さすがに巧い。五十歳・六十歳は

あつという間に過ぎます。でも年齢で人間を評価してはいけません。一期一会、人間のふれ合いを大切に、そして知恵をいただいでどんどん大きな芽吹きを期待いたします。

生かされて生きて歩いた靴の減り

杉山 精子

私の姿ではなかったかとハッといたしました。作者も永年の御勤務の御経験の方ではないかと推察いたしました。朝夕のラッシュ、一日、職場で粉骨の精神、緊張に堪え抜く日々のすべてを靴が知ってくれます。見るたびに傷みのはげしい靴を毎日磨いて生きものでした。

身についた作法崩さぬ老いの足

丹下 智洋子

磨かれたお人柄に敬服をいたします。

犯人が隣に住んでいる都会

古谷 ひろ子

現代社会のどこかで起つてる現実の恐怖を素直に作者は着眼されました。隣は何をする人ぞ。引越して来ても隣・近所とは没交渉、目と目を合わせても挨拶なし。見て見ぬふり等々で都市は砂漠になりました。せめてお隣同士は気持の通い合う仲間意識をもちたいものです。

# 沙湖抄

八木千代選

痛い歯に触らぬように噛んでいる

笑いぶくろ何時か背いて泣いてやろ

ちっぽけな私ですが零でない

朝のごみ場でふいと鳴るオルゴール

漂白剤まだ諦めることはなし

河になるまでは便りが届いていた

驟雨海峡を包み見知らぬ夜

哀しみを焚きつづけるかわたしの木

斬られて役死ぬ時だけが活きる時

見届けて置かねばならぬ縁の下

ピンキング缺で冬の絵を切ろう

人垣を抜けてあの世の露天風呂

初日の出牛にはただの朝である

ゴミの日にわたしの恥も出している

どこまでを味方というか橋揺れる

米一粒ころがり存在感を主張

冬は真ん中泣いたら明日が消えて行く

薄い涙で塩からくなった私の海

いつもひとりいつも誰かを待っている

松原市 小池しげお

今治市 村上久美子

海南市 三宅 保州

弘前市 斉藤 岳

和歌山市 田中 輝子

米子市 鷺見 正子

尻崎市 田中 薫

和歌山市 野々 圭子

藤井寺市 高田美代子

横浜市 丹下智洋子

倉吉市 淡路ゆり子

和歌山市 古久保和子

鳥取県 新家 完司

川崎市 和泉見早子

西宮市 牧洲富喜子

米子市 政岡日枝子

西宮市 奥田みつ子

富田林市 池 森子

宝塚市 永田 暁風

吹田市 山本希久子

標的にされたのだから耳が痒い

老いたかな縦のルールに喧しい

白椿白を愛して生き難し

自律神経が気圧の谷に沈んでいる

へんてこな色に染まったまま死ぬか

自らを律して冬の天守閣

心解き放つ指輪の輪の中で

唯我独尊 無心に還る暇がない

幸せを掴んでからが難しい

小引出しあれこれ薬溜まり出す

小銭から心が閉まることがある

わたしの体わたしが守る今日の無事

人魂が月ある屋根を出て行った

火膨れが癒えたらきつと火に向かう

狂わないように風穴あけておく

あと少し私に出来ることさかす

信仰論 虹に階段ある如し

見て見ぬふり私のなかにいる他人

じつとして居れぬ柳の芽が着い

この命 魂ふたつあるのかな

捨て石の形に母は老い給う

いまだきと言ういまだきを考える

九十歳 童話の国で遊び出す

助けた亀に毎日のせてもらっている

太陽を拝みたいから森を出る

筋書きをかえると笑いとまらない

和歌山市 木本 朱夏

鳥取県 鈴木 公弘

羽曳野市 吉川 寿美

寝屋川市 森 茜

鳥取県 土橋はるお

堺市 桜沢あかり

和歌山市 川上 大輪

鳥取県 土橋 螢

倉吉市 松本よしえ

岡山県 小林 妻子

唐津市 仁部 四郎

大阪市 辻川 慶子

米子市 林 瑞枝

和歌山市 川上 富湖

鳥取県 西原 艶子

米子市 青戸 田鶴

唐津市 久保 正剣

尼崎市 田辺 鹿太

香川県 木村あきら

吹田市 栗谷 春子

弘前市 高橋 岳水

西宮市 亀岡 哲子

米子市 石垣 花子

鳥取県 さえきやえ

米子市 光井 玲子

八尾市 宮西 弥生

綾取りの指が少女にしてくれる  
 天女には更年期などないだろう  
 どん底でない鉛筆を持つゆとり  
 二十一世紀を迎えに鶴をいま飛ばす  
 改めて吾が子と思うベッドの息子  
 この辺で一息ついてから歩く  
 両の肩揃うて描けぬ日の焦り  
 品物を値切る快感知っている  
 知る人ぞ知る山陰の蒼い空  
 お地蔵さまにそつと告げ口 市場籠  
 亡父の声で目覚める明日は一周忌  
 妻の留守厨に立てば格闘技  
 ご先祖の松が枯れたよばあさんや  
 ふんばってグレーの波をかわして  
 お見合いの梯子へ薬が見えてくる  
 春の芽は不思議な力持っている  
 オクターブ下がって母の座がゆらり  
 心眼がくもり霜柱と歩く  
 訂正印ばかり目立って年が行く  
 いつまでも後ろ姿を見ていたい  
 何万の人をつないで電線よ  
 絶対の刻は目覚まし信じない  
 酒ぐせを知らぬ酒屋が酒を売る  
 瞬きの動きで読んでおく勝ち気  
 喜びを一人じめするのも間近  
 精一杯生きて実らぬ冬草

綾部市 藤田 芳郎  
 鳥取市 岩原 喬水  
 岡山県 江口有一朗  
 三重県 佐々木森哉  
 西宮市 門谷たず子  
 米子市 木村富美子  
 寔屋川市 岸野あやめ  
 和歌山市 堀畑 靖子  
 出雲市 竹治ちかし  
 八尾市 高杉 千歩  
 国分寺市 山口 新子  
 鳥取県 林 露杖  
 兵庫県 遠山 可住  
 富田林市 中井 アキ  
 寔屋川市 江口 度  
 和泉市 中川 楓  
 八尾市 高橋 夕花  
 米子市 白根 ふみ  
 唐津市 市丸 晴翠  
 藤井寺市 田中 透太  
 大阪市 神夏磯典子  
 尼崎市 長浜 澄子  
 米子市 小塩智加恵  
 和歌山市 桜井 千秀  
 倉吉市 奥谷 弘朗  
 倉敷市 田辺 灸六

福袋大きいつづらは戒める  
 女には七人よりも多い敵  
 灰色の風景になる業務停止  
 退屈でひび割れてきた土の鍋  
 仕合せすぎて聖書を棚に積んだまま  
 輝ける風が眩しい盆の窪  
 温もりがあった膝詰め談判に  
 初夢は雨降りお月さんに逢う  
 私にできないことを妻がする  
 ふとこに言っちゃいけない泡の数  
 福袋魔女も買ってる運だめし  
 枯れないうちあれやこれやのスケジュール  
 枯菊やのらりくらりのちゃんちゃんこ  
 抱き上げた母の軽さに背が寒い  
 その日まで女は捨てぬ初鏡  
 人の声風の音さえ煩わし  
 鏡の中のピエロわたしを笑ってる  
 松枯れる育てた亡父を追うように  
 雨傘をたたんで人の声を聞く  
 絵蠟燭亡母に詫びたきことばかり  
 行きどころない鬼だから飼うている  
 ひとはみなひとりで生きる冬木立  
 手のひらに雪のなごりの水愛し  
 じつとだまって雪は悲しみ消して降る  
 抜け道を知らない街の独楽である  
 くるしさに負けなまけなと冬の天

鳥取市 武田 帆雀  
 宇部市 平田 実男  
 和歌山市 福井 桂香  
 富田林市 藤田 泰子  
 枚方市 前 たもつ  
 広島市 流 奈美子  
 和歌山市 宮口 克子  
 鳥取市 坂田和歌子  
 大山市 早川 盛夫  
 和歌山市 山根めぐみ  
 富田林市 片岡智恵子  
 貝塚市 池田寿美子  
 守口市 森川まさお  
 寔屋川市 坂上 高栄  
 岡山県 矢内寿恵子  
 和歌山市 玉置 当代  
 西宮市 西口いわゑ  
 岸和田市 田中 文時  
 大阪市 一本 勇太  
 弘前市 佐治千加子  
 和歌山市 細川 稚代  
 豊中市 田中 正坊  
 広島市 森田 文  
 尼崎市 春城武庫坊  
 弘前市 相馬 銀波  
 岡山県 山本 玉恵

駄目なこと駄目と自分に言い聞かす  
 墓の賛否を通夜の誰彼はばからず  
 幕引きの台詞が出来て楽になり  
 大きい箱選んでからの回り道  
 髭ダルマたまに笑ってみたくなる  
 鶏口になれと鞭うつ額の父  
 啄木のねころんだ草さがす春  
 ありがたいありがたいなあ水がある  
 背景に楯山がある古帽子  
 じゃあまたね後ろは見ないこととする  
 食堂の残飯飢餓はよそ事か  
 散りざわの美学に椿酔っている  
 離少し向きを直して祈る幸  
 小道具のよさに薄れている主役  
 反論がぬけがらになる喉仏  
 七日粥の安らぎもとの二人きり  
 初夢の牛は衣装を変えたがり  
 終駅は菩薩の顔で下車したい  
 横文字のフレーズ風をそそのかす  
 水仕事女は手から老いがくる  
 夫婦別姓 遭難のときややこしい  
 新世代 指令塔にはママがいる  
 追憶の夜の景色に声がない  
 息災のために一病構えとく  
 あともどり出来ぬそろそろ日が暮れる  
 柵に縛られている雪月花

大阪市 津守 柳伸  
 尼崎市 春城 年代  
 羽曳野市 酒井 一壺  
 和歌山市 山口三千子  
 静岡県 藪田 狭杏  
 和歌山市 青枝 鉄治  
 鹿児島県 大山舞鳥影  
 鳥取県 谷口 次男  
 砂川市 大橋 政良  
 米子市 木村 春枝  
 八尾市 神原まさと  
 大阪市 鍛原 千里  
 茨木市 藤井 正雄  
 枚方市 森本 節子  
 大阪市 板東 倫子  
 高槻市 江原 秀夫  
 和歌山市 玉井 豊太  
 和歌山県 中後 清史  
 鳥取市 春木圭一郎  
 大阪市 川原 章久  
 京都市 都倉 求芽  
 兵庫県 大谷幸次郎  
 八尾市 村上ミツ子  
 鳴門市 八木 芳水  
 米子市 中井 ゆき  
 今治市 渡邊伊津志

自信過剰逆転劇を見ぬように  
 陽に干してご苦労でした冬毛布  
 だんだんと大和魂老けてゆく  
 自画像にまだ足りません笑い皺  
 米食べて食べてと米屋から電話  
 贈り物きわめつけには僕の愛  
 出し抜けに暇をくれと妻の乱  
 録音のない留守電にある不満  
 三ヶ日犬と遊んで愛しがり  
 大好き顔にしっぽを振っただけ  
 パワー全開のおばさん達に来た噂  
 宵越しの金があつちり使う主義  
 目覚ましが鳴るか鳴るか寝つかれず  
 わがままでか鏡に聞いている孤独  
 障子に映る母そっくりのシルエット  
 神よりもわたしに夫ありがたい  
 五年の牛をいつでも嘶かせ

大阪市 三浦千津子  
 出雲市 板垣 夢酔  
 和歌山市 池永 正嗣  
 寝屋川市 籠島 恵子  
 高槻市 乙倉 武史  
 東大阪市 北村 賢子  
 鳥取市 杉本 孝男  
 横浜市 菱田 満秋  
 岸和田市 古野 ひで  
 横浜市 保田 絹子  
 大阪市 渡部さと美  
 倉吉市 米田 幸子  
 岸和田市 井齋 一齋  
 河内長野市 水谷 笙子  
 岡山県 福原 辰江  
 八尾市 生嶋ますみ  
 横浜市 山下 省子

小池しげおさんの歯は痛そうです。一日中それこそ眠っている時でさえズキンズキンと疼く歯はたぶん奥歯でしょう。奥にあつた痛み続けているのは心の哀しみです。忘れる事の出来ないつらさは姑息のようであつても、なるべく触れぬように咀嚼の度ごとに意識して吾が喉仏に流しこむしかないようです。村上久美子さんの笑い袋はまわりから信用され過ぎたのです。どんなに泣きたいときも明るく笑ってくれると期待されて、実は情性なんだけれど。背いてなどと言わずに正直に大声で泣きましよう。笑い袋にきつと弾力が戻ります。三宅保州さんの個性在感は大きくて零どころか体内に大宇宙さ躍動している。自信に満ちた声が響くではありませんか。

■各地句会だより

## 川柳クラブわたの花

吉村 一風

わたの花教室の内容を書くようにと編集部から依頼がありましたので、どんな型でやっているかを並べさせていただきます。昭和五十年頃から、八尾市の公民館川柳講座へ川柳を投句、添削していただくだけで、顔も合わず文通だけでした。それが高杉鬼遊先生担当で教室講座になりました。それを平成元年（昭和六十四年）に宮崎シマ子さんをリーダーとして「川柳クラブわたの花」と命名し、二十数名でスタートいたしました。

現在八尾市には普通の句会として「八尾市民川柳会」があり、川柳の教室として「川柳クラブわたの花」があり、この二つで今日まで来ております。ところで、このわたの花教室は、勿論、普通の句会とは異なり、現在、八尾市生涯学習センターで第四金曜日午前十時から十二時まで行っております。先ず前回の宿題のうち、一題を鬼遊先生宅に前以て十



日までに葉書に二句書いて送り、その句の良し悪し添削批評を混ぜて一人ひとりについて発表、鬼遊先生独特のユーモアをまじえ、時々、横道へ脱線して皆を笑わせながら作句の在り方や、古い人の句を引用していろいろと比較し、普通の句会では何故没句になったか解らぬ味を上手に分かるように分析、欠点を教えていただく。二十数名の内容を全員コピーを見ながら一時間余り勉強いたします。続いて宿題の二題（夫々二句投句）を一人

で披露、選者も一名は川柳塔社の同人（五名）が行い、あと二題は残り全員順番に選者となり、選句眼を養うと同時に、選者としてのマナーの良し悪しを指摘してもらいながら、他の句会で選者に指名いただいても困らぬように、勿論、人のふり見て自分も学習する。また、脇とり記名の役も全員順番にやり、記名の要領を各自が体得する。

課題吟の披露が終わったら、あと宿題ひとつ全員一句ずつ投句、これを黒板に番号を付けて表示、鬼遊先生に一句ごとに読み上げていただく、全員に投票用紙を配り、良いと思う句を二句番号で記入、自分の名前も書いて投票。それぞれ何票入ったかを一目で分かるように黒板の句の下へ記入、それを鬼遊先生に一句ごとに票の無い句から、一票句、二票句と順に良し悪しを先生独特の技術で分析してもらふ。同時に、一票以上入っている句については、それぞれ投票した人に、どこが良くて票を入れたかをひとりひとり意見を出示してもらい、ここでまた選句眼を養う。

それと共に人の前での対する意見発表の体験をする。なおまた、投票のトップの句には鬼遊先生の短冊を贈る事になっており、勿論、他の課題吟の天位の句にはいつもみんな持ちよりの品を賞品として贈ります。

## 首香のむ

西出楓 楽選

さらさらと我が手をこぼれゆく時間

忘れてたよんで覚えていた唱歌

影うすい女が神を説きに来る

期待した言葉が辞書に見つからぬ

春の音 森も小川も喪があける

冬ざれに残されている黙秘権

小豆もち塩をきかせた負け惜しみ

コンビニへ通う乾いた台所

なるようにならねば先へ進めない

平凡な事情で埋まる日記帳

血の通うはなし小箱に入れておく

春うららお塩加減が狂いだし

詫びられて相手がひとつ上と知る

突張棒捨てれば青い空がある

確執へ雪が積もってゆく時間

顛末はシャツが知ってる形状記憶

写真整理まだこの世には未練ある

一枚の紙が人間裏返す

逆転のシナリオ紅を引き直す

吹田市 山本希久子

吹田市 茂見よ志子

米子市 鷺見 正子

西宮市 奥田みつ子

大阪市 三浦千津子

寝屋川市 籠島 恵子

寝屋川市 太田とし子

倉敷市 井上 富子

藤井寺市 高田美代子

和歌山市 古久保和子

八尾市 宮西 弥生

和泉市 中川 楓

横浜市 明渡トヨ子

横浜市 清水 潮華

和歌山市 福井 桂香

米子市 政岡日枝子

和歌山市 山口三千子

西宮市 西口いわゑ

羽曳野市 芦田 絢子

乗り継ぎのできぬ切符を持たされる

鉛筆の芯尖らせている独り者

学歴という物差しのない仲間

四Eの靴と気の合う万歩計

ふと鏡三つちがいの姉が居る

必要となれば尻尾も振ってみる

言い訳はすまい日記に書いておく

鶴を折る午後の陽ざしにたわむれて

赤を着る言い訳なんぞナンセンス

逃げ道をきれいに掃いて啖呵きる

父の樹にもたれてそっと嘘を言い

清濁を分けて夫婦の城まもる

亡母の年はるかに越えて紅をさす

セロテープ秘すべき事の一つや二つ

正月のぬくもり猫も参加する

宵戎 出来ぬ相談遠慮する

狂い出すリズム植木に水がない

鍋磨くしばし無心になりたくて

白波の海とうさんと呼んでみる

掃きよせて落ち葉の流転話きく

昨日の続き演じられれば倅せな

福の耳持つて風の音ばかり聞く

晩学の一步一步は牛に似て

手造りの弁当に妻付いてくる

負けん気がちよっと出てきた回復期

和歌山市 森口 美羽

熊本市 永田 俊子

和歌山市 吉村さち子

富田林市 片岡智恵子

寝屋川市 井上すみれ

和歌山市 山根めぐみ

今治市 野村 清美

弘前市 一戸 ツネ

松江市 安食 友子

和歌山市 木本 朱夏

岡山県 山本 玉恵

岡山県 福原 悦子

横浜市 後藤 早智

羽曳野市 吉川 寿美

大阪市 板東 倫子

西宮市 牧洲富喜子

横浜市 川島 良子

富田林市 藤田 泰子

今治市 野村 京子

米子市 中井 ゆき

西宮市 門谷たず子

大阪市 鍛原 千里

大阪市 辻川 慶子

横浜市 丹下智洋子

寝屋川市 森 茜

影曳いて世の移ろいに遠くいる  
雑談になるといきいきした姿

木瓜の花 亡母といっしょに見ています

玄関で眠りつづけて居るピアノ

芒野に有情無情の風の彩

ピアノにはいつも弾んでいてほしい

カーテンを閉めて虚ろな風の私語

今日までを洗い流せぬ洗面器

分度器で測る乳房の角度など

冬ごもり湯呑みと温め合っている

水を飲む忍の一字を飲むように

ひとり炊く米一合とひと握り

どんな本読んでもダメと体験者

広重も芭蕉も陽の目見る紀末

まな板に浸み込んでます亡母の喜怒

お正月漬物たんと買っておく

捨て鉢になって仏間の小半日

他人には言うが妻には内緒です

ひとり居て宵のうちから灯を点し

初鏡 帯心地よく締め上がる

化粧水たつぷり肌の曲り角

エプロンを外すとやおら眠くなる

チクチクと言葉に刺され目に刺され

男だと思ってくれる妻といふ  
皺寄せは福祉に向けている視点

和歌山市 桜井 千秀

米子市 白根 ふみ

大阪市 町田 達子

米子市 石垣 花子

岡山県 矢内寿恵子

米子市 木村富美子

出雲市 園山多賀子

和歌山県 杉山 精子

和歌山市 川上 富湖

大阪市 日阪 秋子

弘前市 佐治千加子

寝屋川市 岸野あやめ

和歌山市 宮口 克子

和歌山市 細川 稚代

大阪市 川久保睦子

鳥取市 坂田和歌子

兵庫県 北川とみ子

鳥取市 植田 一京

大阪市 本間満津子

茨木市 堀 良江

寝屋川市 平松かすみ

川崎市 和泉見早子

鳥取県 西原 艶子

米子市 小塩智加恵  
広島市 流 奈美子

宅配の初荷は兄の旅みやげ

日だまりに鳩もすずめもふくらんで

早朝に歩き一円拾うなり

除夜の鐘 消して暴走族が来る

わたつみの若い生命を読み返す

部屋を広さがわびしくさせる冬水仙

かくれんぼみつかるまでが負の時間

にこにこと叱られているおじいさん

逢う人を想って紅の色選ぶ

稜線をしらずしと舞う遠い春

潮みちて産声まさに桃太郎

ひめ椿きもち宥めて咲きなさい

わたくしの勝気情けにすぐ負ける

守口市 結城 君子

東大阪市 北村 賢子

大阪市 松尾柳右子

横浜市 豊田 羊子

横浜市 保田 絹子

尼崎市 春城 年代

八尾市 高橋 夕花

堺市 桜沢あかり

横浜市 秋元 和可

米子市 林 瑞枝

米子市 光井 玲子

米子市 服部 朗子

八尾市 大内 朝子

希久子さんの句―「さらさら」の中から、並々ならぬ思い入

れが伝わってくる。容赦なく近づいてくる老境へのあせり、よ

どみなく流れている日常が変ることないようにとの願い。おわ

りを「時間」で止めたつき放した表現が、読み手と考える余地

を共有できる所以だろう。よ志子さんの句―唱歌の性質をズバ

リと言いついてはいる。ちなみに一年生の孫の教科書を開くと、

ひらいたひらいた、かたつむり、たなばた、うみ、ちようちよ、

チューリップ、ひのまる、たきび、などが健在でうれしくなっ

た。正子さんの句―「なるほど」と作者の観察眼に敬服。新興

宗教にのめり込むから影が薄くなるのか、影が薄いから神にの

めり込むのか、などと思いをめぐらせ、しばらく遊ばせてもら

った。みつ子さんの句―「辞書」の使い方がおもしろい。

菓子

亀岡哲子選



地図にないお菓子屋さんを知っている  
 双六の上がりに置いてあるキャンディー  
 手作りの菓子のゆがみも受けている  
 流し雛あられ三粒をのせてあげ  
 コンクール食べるに惜しい菓子の家  
 そつとくれたのど飴の味忘れない  
 ひっそりと駄菓子屋がある裏通り  
 花びら餅少しゆがんで初荷つく  
 ましゆまるのようにふくら優し嫁  
 綿菓子の中に児の夢ママの夢  
 京菓子の一つ一つにある風情  
 遠足の菓子里に芽生えた小さい恋  
 今日中におあがり生の菓子届く  
 コーヒーに合った茶菓子を下げてゆく  
 菓子折の底まで神も見ておくれぬ  
 密閉の和菓子寿命が延びました  
 菓子箱があとでじんわり喋り出す  
 居眠りをしても綿菓子放さない  
 鍵っ子が犬にお菓子を分けてやり  
 菓子折に感謝の思い詰めてある  
 紐一つ打って仏の菓子貰う  
 ドラマ読む妻の片手は菓子袋

公 弘 正 雄 愛 論 シ マ 子 美 子 道 子 さん 子 ひ で 源 一 さ ち 子 あ ず ま 實 た だ し 芳 郎 康 子 旋 風 仁 緑 京 子 善 信 宵 明 一 風

子の派閥お菓子をくれる方へ行く  
 菓子折をさげてやんちゃを詫びに行く  
 名物の菓子も調べる旅プラン  
 菓子折の小判見付けて等ならしい  
 駄菓子屋にほんわか子等の夢がある  
 菓子好きの男を甘く見た誤算  
 裏切らぬ草餅ひとつ春の風  
 顔中を綿菓子にして肩車  
 ポン菓子里にむかし昔がよみがえる  
 春は梅秋はもみじの菓子の里  
 詫びに来た子らに持たせた菓子包み  
 鍵っ子のメモを押えているお菓子  
 菓子包む祖母の手付きになっている  
 名菓とはも少しほしいなと思う  
 ふるさとの香りいただくりんご菓子

大 輪 照 子 正 子 朝 子 清 芳 あ ず き 瀧 洋 諷 云 児 三 和 鉄 治 正 劍 富 喜 子 ト ミ エ 荔

綿菓子がすきおっちゃんが好き村まつり  
 子の帰期待つお帰りと書いた菓子  
 負けた日は菓子の甘さに救われる  
 駄菓子屋へ少年の日を買いに行くと  
 不揃いの母のお菓子にある温み  
 人 ばあちゃんばあちゃんばあちゃん  
 地 路地裏のボン菓子遠い風になる  
 天 回り道このお菓子は老母が好き  
 軸 和菓子屋にえくぼの嫁が来てうらら

とし子 彩子 たず子 岳水 ちかし 伊津志 権悟

占

池内かおり選



水晶玉の向こうに揺れている未来  
 大吉のお札を風に持ち去られ  
 先行きの不安を易の灯にすがる  
 古傷の天気予報がよく当たる  
 占いを信じぬ父の太い指  
 厄年という占いに勝ち残り  
 狂う世に細木数子も負けました  
 赤ん坊寄ってたかつてみる手相  
 人の世も所詮は下駄の裏おもて  
 占えば沈没しそう日本丸  
 占いの梯子楽しむコギャル達  
 占いが好きな女で独り者  
 占いの女難の相に北叟笑み  
 大吉のふくじの裏も読んでおく  
 減反を占う二十一世紀  
 雨になる明日を占う膝小僧  
 ガン末期まだ占いを信じてる  
 土壇場に来ると占い師に頼る  
 相性は犬凶と出てまた夫婦  
 占いを信じて手術台に乗る  
 四面楚歌天中殺を恨む日々  
 最後には努力をせよというお告げ

寿 美 和 歌 子 諷 云 児 正 子 た も つ 蝋 螢 黎 之 助 正 簡 高 風 一 風 し げ お 志 洋 シ マ 子 隆 風 清 美 剛 治 あ き ら 久 美 子 満 秋 正 雄 あ ず ま

晩年はいいがあしたのパンが無い  
手相見の暗示がくれた起爆剤  
その他に努力もいると言う手相  
占いはどうあれ二人もう一緒  
花びらで占っている淡い恋  
初詣で三社のみくじ皆違ひ  
占いの暗示にかかる無垢の花  
占いが時たま当るから困る  
当たらない占いだけに面白い  
胎教のひとつとき易に凝る日向  
ルーベから運命を聞く銀座裏  
星占いラッキーカラー身につける  
振り袖が面白そうに易に群れ  
花占い花の痛みに気がつかぬ  
宗教に凝って占い捨てました

佳

盗み聞きしたい易者と美女の客  
占うにはとても貧しい両手で  
見料がここから高くなりますが  
占いのレンジ覗いていくトシボ  
星占い母が少女の瞳に返る

人

コンピュータ占い律義すぎないか  
表なら地酒裏ならブランドー

天

生命線が何さ母は九十五

軸

バスター占いごっこして終る

可住 岳水 志重 典子 周信 美子 勇太 清芳 保夫 宵明 道子 隆盛

編 洋

京子 重人 姪子 たず子

保州 芳郎

松川 杜的

人形

吉岡きみえ選



セルロイドのキューピーさんを持つている  
両親の人形となった晴れ姿  
人形の母に成り切る母亡き娘  
人形を抱きしめている氷点下  
今朝も雪こけしは背なを向けたまま  
晩酌は博多芸者と差し向い  
あるときは人形になる保身術  
マネキンもスカーフ変えて春を待つ  
人形は昔の儘の笑顔です

佳

人形の巡査に睨みつけられる  
雛壇に乗せられているお人好し  
人形と一日過ごす二度童子  
人形が突然物を言うこわさ  
うたがいの目で人形が僕をみる  
文楽人形愛もなさけも知っている  
裏切りは決してしない縫いぐるみ  
人形の瞳は嘘言わぬ澄んでいる  
人形に語りかけてる淋しい夜  
人形の涙は誰も見えていない  
人形になりきる妻の黙秘権  
淋しくて姉様人形のひとり言  
独り酒棚のこけしに見詰められ

隆盛 高栄 源一 多賀子 黎之助 志重 道子 幸夫 豊城 高夫 ひで 善信 岳水 次男 倫子 大輪 寿恵子

佳

人形の齢を知らない帯の位置  
人形とはなし終れば春になる  
人形を抱かなくなった娘の脱皮  
人形がひとつぼつんとある訣れ  
人形の涙を知ってから大人  
人形の値札は足の裏へ貼る  
人形をたたくと百円玉が出る

包み紙解くと人形呼吸する

天

川島諷云児

人形が広めたいはずも安来節

軸

玉恵 杜的 好恵 ちよ 正剣 シマ子 寿美 京子 奈美子 公弘 章久 英子 あすま 宵明 彩子

佳

しげお 可住 保州 美代子 ちかし

明水

螢

# 初歩教室

題一歩く

吐田公一

川柳塔昨年十月号の薫風主幹の巻頭言の中で、中島生々庵元主幹の辞として、『榮養も過剰になることは意味のないばかりでなく、榮養不足よりも危険なことがある』と。

このことは添削についても言えることと、自ら忸怩たる思いがした次第。自分では善かれと思つた添削が、却つて投句者の個性を傷つけ、私のカラーに染めてしまい、伸びようとされている芽を摘み取つてしまつていゝるのではあるまいかと。

幅広く理解し、できるだけ句の意を体して添削を心掛けねばと、意識はするものの所詮は凡夫の浅薄さでどうしても自我が先に立つ。添削句

○人並みに歩ける脚をいとおしく 奴夫  
下五の感情表現が安易すぎるのでは。時には発想の転換(創作)も必要では――

▽人並に歩いてみたい車椅子

○曾孫守り今日は万歩を越しました 志重  
曾孫としくなくても孫だけでよいのでは。原句では感情が詠まれていない。

▽孫の守り今日も楽しい万歩計

○黒い瞳に遊び歩きをしてしまふ 多哥由  
中七以後が説明句となつてゐる。

▽黒い瞳に誘われ歩く夜の街

○とつおいつ一駅歩き思案する つよし  
着想はいい。下五が弱い。敢えて言えば、

「とつおいつ」で思案が含まれてゐる。むしろここは単純に表現されるといい。

▽一駅を歩いて思案まとまらず

○たまに出て歩むとすれば花散らす タツエ  
句意が汲みかぬ。歩行困難で花を踏み散らすの意だろうが、むしろ久しぶりの外出での景色の変化を詠めば

▽たまに出て歩けば花も散り始め

○直線を歩くとおつた落し穴 明美  
「直線」と固い言葉を使わず、率直に

▽真つ直ぐに歩くとおつた落し穴

○ソンドラの夕陽の行進懐かしむ 隆  
旧ソ満国境守備隊兵の注釈あり。技法に少

少問題があるが、回想録としていい。  
○立止り歩幅を合わす孫と散歩 まさ  
下六で縮りが悪い。

▽立止まり歩幅合わしてくれる孫

○百貨店見て歩くだけ今度買おう 苑子  
下六でかつ説明的。百貨店へ行く目的(流行・値段・バーゲン等)を詠めばよい。

▽流行を見て歩いてる百貨店

○初詣で一家総出て歩きます 利徳  
中七以後が冗漫となつてゐる。始めは視点を広げてみることに。つまり初詣での情景をあれこれと思ひ浮べる。次に視点を一点に

絞り込むこと。参考句も上五が安易だが

▽幸あれと玉砂利を踏む初詣で

○ひたすらに歩いて二人の縄電車 八重子  
中七にしても句意を損なわないのでは。す

ばらしく見付けがいいだけに惜しい。

▽ひたすらに歩く二人の縄電車

○老の坂歩くよりは這つて行こう 富江  
中六下六の破調。合計で十七音字となるが、

語呂リズムが悪く、留意されたい。

▽歩くより這つて行きたい老いの足

○一步から散歩を始め一万歩 日出子  
原句では何故一步から散歩を始めたのか、その原因が分からない。

▽一步から始めた試歩も一万歩

○減量に歩きいつもの二倍食へ 智洋子  
下句は具体的にいいのだが、好みの問題かもしれないが、もつ少し上品に

▽減量に歩き食欲また進み

○名月が歩く私について来る 多美子

○「名月が歩く」までがいいのだが、「私についてくる」では、折角の名月の歩くという着想が殺されてしまっている。

▽名月と一緒に歩く秋の道

○ふり向けば歩いた道に悔の穴 まさと

下五が凝りすぎの感。自然体の表現を

▽ふり向けば歩いた道に残る悔い

○歩き出す孫に我が家は春が来る ミツオ

下五が不適切。わずかなことだが

▽歩き出す孫に我が家は春となる

○きよろきよろと買得探す主婦の足 りつえ

上五に一考を要す。

▽パーゲンへせかせか歩く主婦の籠

○歩くから季節の風が見えてくる 徳三

季節の風の表現がすばらしい。

▽散歩道季節の風に逢うてくる

○散歩なぞ忘れたような今の人 省子

中七をもう少し考えて欲しかった。

▽散策のゆとりも持てぬ若い人

○収穫の大根貰った散歩道 一乗

中八を推敲すれば、過去形でなくても

▽獲りたての大根貰う散歩道

○歩いたと拍手で祝う三世代

「歩き初め」は陳腐な言葉だが

▽歩き初め拍手で祝う三世代

○足並みを揃えて歩く嫁姑 君江

下六「姑」をはほと詠み、目的を詠む。

▽市場籠歩幅揃えた嫁と姑

○指切りし共に歩いた五十年 トヨ子

これこそ典型的な「てにをは」添削

▽指切りが共に歩いた五十年

○健康に歩く早起き病み付きに 晩翠

川柳で一番難しいと言われる下五だけは、

言葉に十分配慮して欲しい。

▽健康に生きる老後の万歩計

○じつくりと牛歩に負けぬ大地踏む 正志

切り口が実にいい。ただ「じつくり」がいいか、「しつかり」がいいか、いずれにしても上五に一考が必要では

も上五に一考が必要では

○散歩道いつもの所に犬の糞 宏

いくら川柳と言っても句には品格が必要

下五は川柳になじまない。

▽散歩道いつもの場所にあの人が

住句

大陸を歩き回った燃え残り

会ったに母の歩幅が狭くなり 崇

金婚の峠はそこにあと一步 幸子

(金婚を迎える喜びが仄かに伝わる)

里帰り歩き疲れた子を背負い てる代

(母性愛がほのほのと)

分譲地とっても長い徒歩五分

泰雄

還暦に赤い花緒のジョジョを履き 公一朗

(地方色豊かでない)

物言わぬ妻には勝てず歩み寄る

年々に歩く姿が亡父に似る

歩かねば他人が越します人生譜

余命表延びよと続く万歩計

一病をいたわり歩く老い二人

庇い合い補い合って歩く老い

(右二句は我々老人の胸を打つ)

ハイヒール老いの歩幅を抜いていく

横丁を歩いて温い風に会い

(何と言っても庶民の風は温かい)

裏道を歩けば過去につき当る

(演歌調だが、アングルがいい)

ゆつくりと歩いて亀は策を練る

(亀の策が意表を突いている)

若い日の歩み火種にして余生

(まだ燃える余生の美しさ)

頷いて歩く親娘に陽はうらら

(水入らずのほのぼのとした風景)

神妙に犬の歩みも初詣で

(初詣での雰囲気が見えてくる)

ゆつくりと歩けば見える街の風

(こんないい句に出逢えて嬉しい)

私の句

知らぬ間に父が歩いた道歩む

宗明

睦子

彩子

智加恵

義男

ますみ

宏章

玲子

芳水

美恵子

郁子

幸枝

孝子

川柳怪異想誌

岡田 某人

—うら門のひとりであく日永かな 一茶—

○金の番とろくとしてうなされる 初篇

およそ怪異と名付けられるものの本体は、

如何なるものであろうか。枯尾花に幽霊を見、月光に鬼哭を聞く、何によって来るのであろうか。ただし茲に言うのは「怪異」であるが故に、お盆興行的な幽霊乃至は見せ物めいたお化けの類は扱われなく、しかも現世的見方感じ方に終始する川柳の世界に、普通期待される怪談なるものを採すのが無理と云うべく、一読過した柳多留初編より八編までに僅に十指を屈するに足らず、辛うじて得たそのものが、一として超現実なものでないことも見逃し得ないことである。

転居の紙をなぶる五月雨

○鶏の何か言ひたい足づかひ 初篇

したがって私が茲に怪異として取り上げたものも、一見何の妖しさもなく、素材に於ては何処までも一個の動かぬ現実であり、数千百の他の句と同じ世界を見ているに過ぎない

ものなのである。其処には何らお芝居めいた因果もなく、伝説もない。お膳の上に置かれた茶碗のようにあたりまえの現象なのである。にもかかわらず私は、私たちはその短い十七音の中に、ある種のおのきを覚えるのだ。

寝息静にもれるあばら家

○狐火の折々野路をほころばし 二編

別に其処に山気があるわけではなく、こしらえものあやふさどきつきが微塵もない。あるものは只、十七音字中に移された美しい物の見方、感じ方のみであり、幽玄な第三世界からの微光ばかりである。

裾のみじかい友の白臍

○新尼のわれをいやがるかげぼうし 四篇

すべて予期せざるもの、知識以上のものらを怪異とするは、初歩の意味に於ては肯けもしようが、それらもろもろの不可思議は、ここに扱われた怪異にはやや遠く、科学的努力によつていずれは解明され、いつかは常識にまで落ちぶれる運命にあり、真の怪異とは名付けがたいものである。しからば真の怪異と

は…。  
—(二句二章省略)—  
凄い音して落ちるハツ手葉

○ひとりでに釣べの下る物すこさ 五篇

茲に到つて、怪異もまた極まれりと云うべきであろう。理窟も議論も理性もない。徳川の昔、丁髷を備えた頭の中に慄然たるものを与えたこの一現象は、昭和の今、コンクリートと金属に囲まれて暮すロイド眼鏡にも、一読慄然たらしむる力を感しているではないか。それが些も懸引のない実在であるが故に、われらの神経が衝撃される力は減じない。この恐ろしき十七字の前には、わが畏敬するラフカディオ・ヘルンこと小泉八雲の「DARK」も、実は少年少女の読みものに過ぎないとの感が深いのである。

ひる寝の汗がおのが身の丈

岡田某人という才人には時折り感じ入る。

柳多留は一篇平均四十丁から四十三丁、一丁十八句が掲載されている。八篇までだと概算して六千句、怪異川柳の中に「鶏の何か言ひたい」や「おさへればすき」の句を入れているのも独自の解釈があるからだ。

一寸異なるが、四国霊場巡りをした時期、見えぬ光、聞こえぬ音を聞こうとしたの思い出し、子供の頃のおそれおののく心情をもつてもう一度川柳に対して見たいと感じた。

# 路郎先生の思い出

「司会は喋るな!!」

西田 柳宏子

六月二十八日の四先生合同追悼句会を執り行うに先立ち、第一回目路郎先生の思い出を書かせて頂くことになった。

厳格で妥協を決して許されなかった路郎先生のエピソードの一つに、門下生切つての謹言居士後藤梅志氏が、住吉区万代の路郎居(不朽洞と言っていた)で、どのような不興を蒙つたのか支関に端座したまま、じつと許されるのを待っていたという話がある。(この時はあとから来られた堀口塊人氏の執り成して入室を許されたとか……)

酒は大変お好きなので逸話も沢山あるよのだが、紙数に制限があり次回に譲る。次に私自身が路郎先生から頂いた宝をこ披

露しよう。不勉強な私は私の句で先生から直接教えを頂いた記憶はなく、僅かに数回同人欄に選んで頂いたことがある位しか覚えていないが、偶々私が紫香氏や菊田いさむ氏のあとを享けて句会の司会者をやらせて頂くようになった時、先生に呼ばれ「柳宏子：司会をするそうだね：司会は喋るな：司会の話聞きに来て居る人は居ない」：「はいノ判りませんでした。これが今までの私の処世の大きな教えであり、支えになっている。

偉大な反骨精神逞しい路郎先生の瘦身から逞しいお論しが今尚耳底に残っている。  
「司会者は喋るな」……と。

## 麻生路郎氏と私

楊 井 二 南

昔々の話で記憶も薄らいでいますが、私が川柳に手を染めたのは大正十二、三年頃未だ

学生時代でした。当時住んでいたのは神戸市花隈町という所で楳元紋太氏(元ふあうすと川柳社主幹)と極く近所でした。紋太氏宅は酒まんじゅうを主とする菓子屋でしたので、幼少の私が毎日通い詰めたものです。その頃神戸には四つの川柳社があり紋太氏がその指導に努めて居られました。私も氏を先生として真似ごとの川柳を作り始めたのです。昭和になり私は大阪高商(現在の大阪市大)に進んでから当時の大阪川柳界で活動を始めましたが、先ず懸意になったのは川柳雑誌社(川柳塔社の前身)の麻生路郎氏と番傘川柳社の岸本水府氏です。ところが偶然といいますが奇縁といえます。路郎氏は同じ大阪高商の先輩でした。従つて同氏から特別の御懇情を戴き、同人として入社を推せんされると共に同社の神戸支部組織を命ぜられました。当時路郎氏宅は南海沿線岸の里で喫茶店を営業して居られ、私はたまたま隣駅、玉出の市民会館で剣道の師範をやつて居り、毎日同氏宅を訪問、喫茶を楽しんで居りましたので、文句無しに此の役を引き受けることになりました。その頃神戸には未だ「ふあうすと川柳社」は出来て居らなかつたので、紋太氏も賛成して下さいました。此の支部創立句会にも、爾後毎月の例会にも出席して下さいました。

# 本社 二月句会

二月七日(金)午後五時半

メンズファッションセンター

## 席題「豆」

梶川 雄次郎 選

福豆を一〇〇粒食べる用意する  
煉炭の鍋でワルツを踊る豆  
イチローの豆は食わずに飾つとく  
成田山豆撒く方へまわりた

重人  
章久

途中まで数えた豆をまた数え

冬 葉

徹選の大豆のれん口恋い

正 雄

下戸の妻枝豆ばかり口恋いでいる

勇 太

七十を過ぎて煮豆のむつかしさ

楽 生

豆を撒く指の先から春を呼ぶ

あやめ

海老と豆 あなたをませて煮ています

昭 子

回想の豆まき亡母の子守唄

美 房

夢のない話に豆が煮くずれる

幹 齊

鳩に豆 本願寺さん長閑です

弘 直

黒豆のふくらみ隠し味

風云児

甘納豆で鬼千匹を手なずける

萬 的

腹立てで煮た豆だろろ心がある

千 秀

節分は満腹に入る寺の鳩

三 男

少年の夢をはぐくむ豆のつる

義 子

来し方をつくづく思ふ豆の数

希久子

不器用な箸が大豆に遊ばれる

英 子

豆板に祭太鼓が聞こえ出す

風云児

黒豆をふくらみ炊いて母の章

保 州

豆板を噛んだあの音戻らない

朝 子

重人

章久

東 雲

たず子

信 子

正 坊

桂 香

東 雲

正 坊

たず子

富 湖

雄次郎

房 子

鹿 太

正 坊

弘 直

しげお

絹 子

落 児

恭 昌

重人

章久

東 雲

たず子

信 子

正 坊

桂 香

東 雲

正 坊

たず子

富 湖

雄次郎

房 子

鹿 太

正 坊

弘 直

しげお

絹 子

落 児

恭 昌

重人

章久

東 雲

たず子

信 子

正 坊

桂 香

東 雲

正 坊

たず子

富 湖

雄次郎

房 子

鹿 太

正 坊

弘 直

しげお

絹 子

落 児

恭 昌

重人

章久

東 雲

たず子

信 子

正 坊

桂 香

東 雲

正 坊

たず子

富 湖

雄次郎

房 子

鹿 太

正 坊

弘 直

しげお

絹 子

落 児

恭 昌

重人

章久

東 雲

たず子

信 子

正 坊

桂 香

東 雲

正 坊

たず子

富 湖

雄次郎

房 子

鹿 太

正 坊

弘 直

しげお

絹 子

落 児

恭 昌

重人

章久

東 雲

たず子

信 子

正 坊

桂 香

東 雲

正 坊

たず子

富 湖

雄次郎

房 子

鹿 太

正 坊

弘 直

しげお

絹 子

落 児

恭 昌

重人

章久

東 雲

たず子

信 子

正 坊

桂 香

東 雲

正 坊

たず子

富 湖

雄次郎

房 子

鹿 太

正 坊

弘 直

しげお

絹 子

落 児

恭 昌

重人

章久

東 雲

たず子

信 子

正 坊

桂 香

東 雲

正 坊

たず子

富 湖

雄次郎

房 子

鹿 太

正 坊

弘 直

しげお

絹 子

落 児

恭 昌

重人

章久

東 雲

たず子

信 子

正 坊

桂 香

東 雲

正 坊

たず子

富 湖

雄次郎

房 子

鹿 太

正 坊

弘 直

しげお

絹 子

落 児

恭 昌

重人

章久

東 雲

たず子

信 子

正 坊

桂 香

東 雲

正 坊

たず子

富 湖

雄次郎

房 子

鹿 太

正 坊

弘 直

しげお

絹 子

落 児

恭 昌

重人

章久

東 雲

たず子

信 子

正 坊

桂 香

東 雲

正 坊

たず子

富 湖

雄次郎

房 子

鹿 太

正 坊

弘 直

しげお

絹 子

落 児

恭 昌

重人

章久

東 雲

たず子

信 子

正 坊

桂 香

東 雲

正 坊

たず子

富 湖

雄次郎

房 子

鹿 太

正 坊

弘 直

しげお

絹 子

落 児

恭 昌

重人

章久

東 雲

たず子

信 子

正 坊

桂 香

東 雲

正 坊

たず子

富 湖

雄次郎

房 子

鹿 太

正 坊

弘 直

しげお

絹 子

落 児

恭 昌

ゆつたりが過ぎはしないか冬の河  
ゆつたりとさせてはくれぬ消費税  
雑兵で終りゆつたりする余生  
自信あるプランゆつたりとつてある

森子  
武庫坊  
武庫坊  
柳宏子  
美房

ゆつたりと流れつて河は過去思っ  
核を捨て地球ゆつたりしませんか  
ゆつたりと人情包む藁の屋根

ダン吉  
メ女

ゆつたりと歩断は世間よく見える  
ゆつたりと油断をさせる海のなぎ  
勝算を秘めてゆつたりふところ手  
客一人だけでゆつたり行く渡し

昭子  
とし子  
愛論  
紫香

君が代をゆつたり聞いている平和  
ゆつたりとすればストレス入りこむ  
庵主さまゆつたりふくささばかれる

保州  
シマ子  
義子

ゆつたりの設計図引く子供部屋  
柚子風呂の湯気ゆつたりと柚子の里  
ゆつたりと妻がしているなにかある

隆盛  
萬的  
狸村

激動を生きゆつたりと読書好き  
ゆつたりと水車は春を奏でてる

久峰  
典子

安楽椅子でゆつたり過去を巻き戻す  
満ち足りてゆつたり放す母の乳  
帯ゆつたり締めて女将にある器量

たず子  
章久  
たず子

ゆつたりと入る柩を眺める  
ゆつたりと記憶の底へ糸をくる

しげお  
寿子

ゆつたりと春呼びよせるふきの薫  
地

友熙

ゆつたりとシヨパンに浸る雨の午後

寿美

冬の絵がゆつたり溶ける絵具皿  
軸  
ゆつたりと輪を描く鳶に隙がない

森子  
千秀

兼題「木」 高須賀金太選

桃の木は甘い約束ばかりする  
ブナの木の新芽がはてしない旅に  
木が待っているので靴をはきかえる  
神木の威厳府道を曲げさせる  
木枯しの森でいのちの声を聞く  
父の木に嘘ついてきた悔い残る  
木の精と心通わす匠の目  
考える人へせめても木の椅子を  
ざわざわと木が話してる風の森  
木登りをする子見つけた冬の詩  
木像の彫りの深さにこもる慈悲  
百年を斬るに無粋なチェンソー  
冬木立あつげらんかと身をさらす  
水害は木の精たちの涙です  
煩惱へ護摩木にかけた運だめし  
父の木の曲らぬ枝を子が揺する  
生きた木を変えぬ古木が凜と立つ  
一木に鉋をふるえはみ仏に  
どうしても未練がひとつ柿の木に  
実をつけて丹精の木の恩返し  
大樹のかげだんだん眠くなる私  
不景気の木に継ぎ木して春を待つ  
伐採へ孫子に残す木を植える

夕花  
ダン吉  
天笑  
雄次郎  
義子  
洞庵  
重人  
美房  
庸佑  
正坊  
千秀  
富湖  
みつ子  
一步

定年を告げると庭の木がゆれる  
北山杉 胸のつかえがおりてゆく  
日本の木にこだわりを見せるノミ  
一刀彫りに木は終焉の美を飾る  
植木市くにの訛りに買わされる  
星月夜 木々の寝言に落ちながら  
妻の木をゆすると愚痴が落ちてくる  
不景気で大樹の陰もたよりない  
木の雨戸やさしい音で閉められる

一風  
信子  
久峰  
千秀  
正雄  
柳宏子  
諷云児  
信子  
寿美子

一本も背く木がない母の森  
手づくりへ玩具の木肌あつたかい  
千年の木を千年生かすのも匠  
春の訪れ根から梢に打電する  
大黒柱になって大事にされている

諷云児  
朝子  
美房  
シマ子  
幹齊

木が地球の行方案じてる  
割り箸を裂く木の悲鳴聞きながら

利武  
富湖

新築のローンが重い木の香り  
軸  
木製のベンチが温いはなしする

重人  
金太

野良猫の危機を感じた目の動き  
来ぬ人の愚痴聞いている膝の猫  
のら猫も背なにストレス溜めている  
招き猫新地新駅活気づく

萬的  
愛論  
桂香  
正雄

兼題「猫」 宮口笛生選

招き猫新地新駅活気づく

正雄

愛嬌がよすぎて困るうちの猫  
 メシどきにもたちが来るうちの猫  
 淋しかったと猫がすり寄る旅帰り  
 膝枕しないと寝ないうちの猫  
 おもわくはどちらにもある猫の鈴  
 東照宮で生き方知った眠り猫  
 僕よりも妻には大事ベルシヤ猫  
 すさまじく睡魔追い出す猫の恋  
 つけ溜まる僕にも媚びる招き猫  
 新物のサンマを猫に試食され  
 好かんなど猫も知ってる猫ざらい  
 飽食の猫が鼠を見て笑つ  
 かつお節よりも缶詰好きな猫  
 糞さそうになつたが逃げてくれた猫  
 いたずらをそそのかされる猫のひげ  
 換気扇 猫はさんまと知っている  
 奥様の淋しさを知るベルシヤ猫  
 近所みな起して回る猫の恋  
 わずみとらぬ猫が大事にされている  
 温もりを猫とわけ合いひとり住む  
 捨て猫の安否気遣う雪の朝  
 飼い主に似てものぐさなうちの猫  
 靴を見て客の値踏み招き猫  
 早春が待遠しいと猫の恋  
 捨て猫のかなしい声からまれる  
 何んだ猫なんだ犬かとすれちがい  
 捨てられた猫も今日からホームレス  
 町内を睨み効かせてボスの猫

風云児 重人 大子 金太 絹子 勇太 満州 典洋 頂留子 文秋 英子 絹子 哲夫 柳宏子 悟郎 ますみ 房子 希久子 三男 利武 夕花 鬼遊 章久 昭子

猫抱くと甘い言葉になる女  
 夫婦喧嘩になると出て行くうちの猫  
 ぬくもりが欲しくて猫を抱いている  
 ノラ猫を聖子と呼んでいる長屋  
 猫のことで喧嘩するほど愛がある  
 膝にぐる猫も憎い日可愛い日  
 降つてきて猫の泥足ぐちる妻  
 母病んで少女はひと猫を抱く  
 寅さんみたい時どき猫が帰らない  
 兼題「フルーツ」 河内天笑選  
 フルーツの分だけ御飯減らさねば  
 フルーツが出たが杯はなささない  
 先客のメロンを食て来た見舞  
 油浮く海をいらんおでリンゴ噛む  
 フルーツの入るお腹は別にあり  
 病室で同じ話を聞くメロン  
 フルーツもあたりはずれのある浮き世  
 みかん剥く居間の空気がやわらかい  
 フルーツポンチ女三人寄る謀議  
 フルーツが出てから少し話題変え  
 渋柿の皮もぼくにはフルーツだ  
 フルーツ売場でカリフォルニアの陽が匂う  
 目立ちたがりやのイチゴゲーキの上に乗り

紫香 茜 朝子 露児 幹斎 たず子 頂留子 みつ子 笛生 満州 ダン吉 勇太 一風 典子 昭子 朝子 桂香 正雄 紫香 たもつ 文秋

フルーツ皿歌の上手な人ばかり  
 病室でフルーツ好きになりました  
 片づける妻へリンゴは僕がむく  
 フルーツポンチ口も腫もよく喋る  
 レモン強くしほつて今日を始めよう  
 夜の街 高いフルーツねだられる  
 丹念にフルーツ剥けたマヒの指  
 フルーツととても仲良しヨーグルト  
 三世代の皿で楽しい柿みかん  
 フルーツが話の腰を折りに来る  
 青春に選つてリンゴ丸かじり  
 消毒のこわさを思っ丸かじり  
 人間からみれば大きな枇杷の種  
 フルーツパフェ恥ずかしいが君となら  
 うぬぼれの強いメロンで時季外れ  
 フルーツと呼びだしてから匂がない  
 フルーツの味でグルメを締めくくり  
 ミキサーの中でフルーツ談合す  
 佳  
 まどろこしい恋へレモンを絞り込む  
 おこつたらあかんあかんとリンゴむく  
 フルーツも食べなあかんと女房言つ  
 仏壇のリンゴ毎日磨いている  
 お父さんメロン上手に五等分  
 お別れはフルーツにする御堂筋  
 フルーツ酒一寸御機嫌おばあちゃん

しげお 樂生 一風 みつ子 寿美子 愛論 満州 森子 重人 三男 信子 房子 英子 保州 ますみ 友照 寿美 美代子 哲夫 大輪 隆盛 たもつ 高栄

天 軸

フルーツの甘い香りをまく乳房

弘直

フルーツが出て二次会は喫茶店

天笑

兼題「やがて」

橘高薫風選

やがて春ふきのとうから便りくる  
 やがて夜が明ければ道が見えるだら  
 震災もやがては忘れられるのか  
 やがてやがて仮設出るのは何時のこと  
 このままでは沈没しかねない日本  
 やがてやがて地球はとないなるのかな  
 琴の音にやがて醒めますおひな様  
 やがての話人はきつと聞きながら  
 ほめ言葉やがてのりになってくる  
 借景もやがて消されてしまっだら  
 ロボットもやがて過労死するだらう  
 窓際へ同情やがて俺の番  
 やがて定年ここから孫とちがう道  
 やがて私を乗っける孫の乳母車  
 遺言は伴せては妻が書く気配  
 離縁状やがては父の想い入れ  
 適齢のやがてへ父の想い入れ  
 やがてやがてと今でも思っ喜寿である  
 やがてやがて女房殿に髭が生え  
 やがて倍になると虎の子巻きあげる  
 無党派がやがて目を出し角を出す  
 地へ還るやがては亡母のてのひらに  
 鬼もやがては仏になろう日を思っ

夕花  
 寿美子  
 保州  
 武庫坊  
 保州  
 義子  
 かすみ  
 洋  
 桂香  
 路児  
 風云児  
 正雄  
 正雄  
 ますみ  
 武庫坊  
 あやめ  
 白浜子  
 頂留子  
 三男  
 希久子  
 千秀  
 正坊  
 森子  
 美代子

やがて杜の車迎えに来るだらう

紫香

やがてくる春へ我儘の桜なり

笛生

やがてから春が一日早くなる

しげお

やがて春帽子も少し派手になり

紫香

ストーカーやがて虜になるあなた

房香

やがてにはできぬ昭和史抱いている

たもつ

闇の夜やがてを自問自答する

隆盛

飽食のやがてが見える都市砂漠

千歩

川瘦せるやがて他人になるように

大輪

住

やがてこうなる妻に娘をダブらせる

正雄

肩車やがてこの子に背負われる

勇太

山からぬすみぞろぞろ下りてくるやがて

度

核がある限り火の海見ること

グン吉

玉いつか瓦になっていくやがて

正坊

人

やがて雪還らぬ島が北にある

寿美

地

極楽か地獄かやがて乗る列車

遊草

天

夢ひとつやがてやがてと捨てきれず

恭昌

軸

やがて黄と赤に球根に詩人

薫風

### 第28回 川上三太郎賞作品

雑詠5句(未発表作品)、審査は時実新子・大野風柳。投句は4月20日必着で1000円

(小為替)を同封、〒956・新局局私書箱15号・柳都川柳社へ

## 川柳大原四〇〇号

## 発刊記念川柳大会

とき 4月6日(日)午前9時開場

ところ 大原町総合センター

お話し 大森風来子氏(川柳岡山社)

兼題と選者(各題2句・正午締切)

「駅」 大森風来子・河内 天笑

「原」 土居 哲秋・山口 流木

「芽」 林 荒介・土橋 螢

「続」 森田 熊生・神原日出夫

事前投句 「うれしい」 小林 妻子 謝選

会費 2000円(発表誌・昼食等)

◎昼食・宿泊準備のため、事前投句を設けましたので、出席者及び宿泊者はハガキで三月十日までに左記へ出すと申込をお願いします。

千707-04 岡山県英田郡大原町下庄町

小林 妻子

\*欠席投句およびご芳志は拝辞します

主催 大原川柳社

後援 大原町文化協会



毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

虫ほどの命があつて恋をする  
子も孫も片肺飛行にうろたえぬ  
客の目になってわが店ふり返り  
幾山河越えたる足が駄々をこね  
亡き父母が手招きしている朝の夢  
この辺で気合入れねば負けそうで  
へば将棋気合ばかりが先に出る  
手さぐりの道がまだまだ続きそう  
箒の目波のかたちに寺の庭  
ちちろ虫聞きほれました万歩計  
手さぐりでやつと登った八十路坂  
かなぶんが脳震盪でうずくまり

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

はるみ  
ふじ子  
菜々  
一宇  
民子  
聖子  
好栄  
ちよえ  
英子  
博利  
清泉  
白汀

おめでとつ孫の年賀に財布開き  
慣れすぎた豊作が待つ落し穴  
姑さんに心開いて甘えてる  
開封のときめきを知る赤いポスト  
開かれた古書からもうノートピア

末貞一  
江美  
正治  
十四郎

閉じた目を開けば夢が毀れそう  
親子仲開き直って見たものの  
その景が自慢で窓を開けて見せ  
幸いを掴むチャンスだ飛んでみる  
運のよい男でチャンス逃さない  
妻編んだセーター木枯し通さない  
露天風呂一人占めする宿の朝  
和解へのチャンス私が折れて出る  
豊かさは何も見えない老眼鏡  
春の絵に豊かな明日が匂いだす  
元旦の豊かな心持ち続け  
豊かになりたくて風穴をあける  
孫達の顔がほころぶお正月

川柳塔わかやま吟社 宮口 克子報

運開く無欲な人の掌の中で  
夢を追う男が持っている魅力  
君の背をみつめて進む道を選ぶ  
実力がついたら運もついて来る  
好運です勝者は言葉控え目に  
青春の無頼を通り抜けた運  
運だめしなどと本気になつてくる  
運を天に任して妻と住んだ町  
家に灯を点し続けた母の運  
耕して耕し運を掘り当てる  
運天に任す無謀もする若さ  
風呂敷で包めるほどの運でよい  
すばらしい笑顔が今日の運ひらく  
運命と笑うてのける苦勞人

鹿太  
夢之助  
紫香  
まさ  
すみ  
勇次郎  
六浦  
弘治  
向西  
美智子  
一閑  
澄子  
いわお

公  
誠子  
精子  
柳宏子  
正博  
清史  
豊太  
大輪  
愿  
三月男  
射月芳  
寿子  
保州  
富湖

ほたる川柳同好会

井上 直次報

壁破る努力へ運が味方する  
宝くじもしやの夢を買い続け  
球根を抱き夢見てる冬の土  
母さんのふところにある夢図鑑  
羽織い女ひとりの夢を組む  
勇気ある一歩に明日の夢を乗せ  
遠い日の夢が私の始発駅  
夢消えてまた夢描いて生きていく  
神前へ進む二人に嘘はない  
晩成を信じて進む茨道  
蟹のみをせせり話が進まない  
一つ進むただそれだけの長い列  
進むしか知らぬ男にある修羅場  
胸張って進もう明日が見えるから  
いい話進める春の帽子掛け  
どうしたのでしょうかわたしの男運

佐代子  
和重  
淳太郎  
輝代  
稚代  
君枝  
三枝子  
泰子  
金太  
太一  
萬的  
紫香  
重治  
吞天  
栄美子  
克子

ただし  
竹二  
英子  
喜美子  
蛭柳  
純次  
眞郎  
直次  
正安  
祥風  
正三郎

人の世の過客となつて今日も生き  
 年賀客待つてちびちびひとり酒  
 食べつぷり気持が良くて好きな客  
 嘘一つすつかり忘れて今日を生き  
 明日からはお客となつてくぐる門  
 お客より親爺がいつも威張つてる  
 すいさしの紅くつきりと妻の客  
 そのうちに人の名すつかり忘れそ  
 家計簿にすつかり慣れて主夫となる  
 借金をすつかり忘れる借りた人  
 すつかりと日暮れた街に石焼いも  
 ほめ上手心すつかりとらえてる  
 苦勞など語らぬ母の針仕事  
 裂き口を妻は無口に縫いはじめ  
 雑巾を七色で縫う梅日和  
 縫い目にも心の乱れ隠せない

川柳塔みちのく

小寺

花叢報

たけお よしろう 保子 キヨ子 昭子 ますえ まみ子 博史 方郎 善守 清史 久子 明光 馬洗 敞子 桂子 一光 凡々子 風蝶 アサ 柳々 順三 龍人 銀波 花匠 雅城 ツネ

妻が持つ金庫の中で飼育され  
 飲み放題胃袋からは赤信号  
 会計は別と割り切る嫁姑  
 若葉マークビクビクしながら運転し  
 飲み放題なんと優しい店だろう  
 貸方に行方不明の金がある  
 罪でしようか飲み放題のクリスマス  
 天気図にビクビクしてたりんご選る  
 飲み放題下戸は聖者の如く座す  
 アルコール以外のことをした会計  
 お愛想が近づく頃の長トイレ  
 会計という名の誠実なる無口

サークル檸檬

小林

一夫報

生恵子 ぶさゑ 雅子 隼人 篤子 黙人 千加子 隆樹 大吾 花峯 五楽庵 希久子 房子 みつ子 喜美子 智恵子 雅子 あずき 正坊 薫 一夫

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

虫達も遊び仲間だ裸足の子  
 お遊びに鍵盤叩く一家です  
 塾さばり遊んだ事は内緒だよ

ゆき 朗子 玲子

佳句地十選 (2月号から)

岸

桂子

寄り道で遊びヒントを拾ったよ  
 錯覚の中で遊んでいる輪廻  
 わたしは古い何処に居ても遊び下手  
 早熟の木の葉が風に舞い遊ぶ  
 赤い灯と遊ぶも脳の活性化  
 この指に止まって遊ぶ日が暮れる  
 野仏のあたりを遊ぶ少年期  
 遊びのないギアそのままの人だった  
 長いフンつけて金魚が遊んでる  
 蓮の葉の露ころころと遊んでる  
 長江で遊ぶ幾千年のとき  
 寺町に遊び上手な坊さんが  
 遊びから覚えた知恵に負かされる  
 それぞれの個性を覗く遊園地  
 名月と遊んだ事は悔いてない

千春 日枝子 紫布 瑞枝 富美子 荒介 天雀 亜弥 なみ ふみ 保子 恵子 美世子

羽づくろいしてそれなりに老いていく  
 風向きがかわり本音を裏返す  
 自己主張俺には俺の色がある  
 こだわりが体の中で燃えている  
 煩惱と同じ重さのいのちを抱く  
 空缶を押せばポコツと夏を吐く  
 この杭を打てばラストになる仲だ  
 片方の靴が昭和を脱ぎきりぬ  
 メモをして母の心を置いて出る  
 来る年の夢の下絵がまだ書けぬ

千里 雅文 隆盛 信善 倫子 親路 シマ子 宣司 友子 武庫坊

花いちもんめみんなどこかに消えちゃった  
竹とんぼ雲まで遊びに行つたらし  
遊ぶ事が解らず本を買ってきた  
留守電にして猫の面の遊びぐせ  
取つたり取られたり面白い遊び  
五歳からずつと女の子と遊ぶ  
人間の子を風の子にする広場  
辛い日も痛い日もあり日が巡る

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

初句会よし津の音が聞えそう  
はじめから結果わかつていた握手  
マルクスをはじめ知ってから狂う  
ゼロからはじまり積木積んでいる  
お早うで始まる朝のある弾み  
紅をひく女のいくさはじまりぬ  
冬寒に琴の音ゆかし須磨のみち  
玉砂利の琴の音きよき晴姿  
遠ざかる大正昭和母の琴  
琴の爪春のリズムでよく弾む  
琴の音に瀬戸の海鳴り浜千鳥  
乙女の日唄ぶ琴爪ある小箱  
遠い日のあなたをおもつ手風琴  
子離れでゆとり戻した琴の爪  
戦時中遠慮しながら弾いた思い出  
生き下手でまだ満足な絵が描けぬ  
身のほどに合った満足とは言うが  
それなりに満足がある汗の量  
満ちたりて満足感はあるわらない

晶子 花子 弘子 寿々子 正子 千代 八重子 光代 澄子 佳秋 能子 富喜子 いわゑ 義子 春蘭 まさお 房子 トミエ 涼子 佐江子 求芽 キク子 たず子 はつ絵 正とし 隆子

包み切れぬ喜び縫目破れそう  
月光に包まれ羽が生えてくる  
ほんわかと包まれてはいる家族の輪  
包み紙開くと亡母の海の音  
オブラートに包む小さな謀  
茶巾ずしに包む七色春の味  
床飾りの海老に寄りそう白椿  
職ひいてからの歳月冬木立  
独り言のように一行詩が溜まる  
雪舞う日一人詣でる金閣寺  
焼き芋の笛が寒さをやわらげる

岩美川柳会

羽津川公乃報

吹く風に鬼と仏が顔を出す  
不景気を吹き飛ばしたいので笑う  
売れ残りではないこれも添えたげる  
笑い袋もつてサービスしています  
似顔絵を少し美人にサービスす  
抜群のサービス裏があるらしい  
みかんの筋をきれいに取つてくれた人  
冬日和神のサービスかも知れぬ  
サービスも場所も悪いが味がよい  
サービスに女難の相と古い師  
催促をしたサービスが首を絞め  
酒のサービス良く丸太が横たわる  
サービスも地獄の沙汰と変わらない  
サービスは財布だ男振りじゃない  
サービスに飲ませる酒は爛ざまし  
サービスが過ぎセクハラと疑われ

てる みる子 高栄 源一 鹿太 絹子 正坊 森子 ルイ子 諷云児 多哥由 孝男 蟹郎 和歌子 節子 忠良 明美 きみ子 美恵子 一京 芳江 隆風 希久代 帆雀 はお 登

試供品の菓で治る偏頭痛  
サービスの裏に釣針仕掛けする  
サービスをしてくれたのは男です  
動物も人も貰えば尾っぽ振る  
サラ金のサービススティッシュ只だった  
サービスが少し重荷になつてくる

京都塔の会

松川 杜的報

ストレスの背広見切つた白軍手  
愛深し神も仏も見切りせず  
自由契約なんて見切りをつけられる  
逃げ道地図の余白に書いておく  
高根の花へ念入りに書くラブレター  
書く手紙燃やし胸の火まだ消えぬ  
追伸に一言書いて来た無心  
十二月の塵は重味を持つている  
塵ほど目関心がない世の動き  
事情だけ聞いて援助はしてくれず  
事情問う刑事煙草を喫う余裕  
別姓を名乗る事情もきたがる  
抜き足で歩く事情があるのです  
叱るのはとつくり事情聞いてから

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

公乃 單車 睦子 一夫 大漁 故照 女 百合子 友照 紫香 諷云児 波留吉 瀧小 芳子 武庫坊 圭坊 白溪子 葉子 杜的 隆盛 森子 柳宏子

そつめんの影から朝が動き出す  
星の王子がこぼして行つた朝の露  
日曜の礼拝堂は多国籍  
礼節はしつかり母の背が教え  
礼状は専ら妻が出している

天に地に人に退職ありがとう  
 長らえてお礼いたい人ばかり  
 ノックせぬ無礼に弾む春の胸  
 修身とともに礼節消えたまま  
 野心もとう果てゆつくりと爪をさる  
 越年へ野心を見せつけてこている  
 半眼に野心宿した兵馬備  
 野心家の男がさげるゴミ袋  
 欲ほけな野心と顔に書いてある  
 ポケットの底に沈めている野心  
 七十は七十なりにある野心  
 脱サラの野心妻子に支えられ  
 終章はきつと華やく瘻の夢  
 華やかな羽を孔雀の自己主張  
 華やかに明けて一人の餅をやく  
 華やいで説経聞いている寺の鯉  
 華やかに母が老いてく笑い皺  
 華やかに昔を語る石の庭  
 下手な嘘ついて世間をせまくする  
 嘘少し交せて話を盛り上げる  
 美しい嘘にはまってみるも春  
 嘘つかぬ鬼悪者にされてます

ふくべ川柳会

橋本多哥由報

欣之 柳伸 信博 美幸 東雲 祥一 ますみ 宏 たもつ 頂留子 一年風 春子 泰 弘直 朝子 透太 剛治 三男 夕花 萬的

和歌子 ひろ子 寛子 克己 信子

年上の笑顔が持つている火種  
 掛軸の鶴が飛び立つ準備する  
 義理ひとつ果たし時雨の傘を閉す  
 糟糠の妻がときどき逆手とる  
 鶴の舞う大きな庭がほしかつた  
 コスモスをいっぱい妻に採つて来る  
 夕鶴の芝居を見ては咽び泣く  
 仙人になり切れなくて山を降り  
 願かける子の合格へ月参り  
 同窓会歴史を語る顔並ぶ  
 君の名を呼べば淋しい時雨ふる

川柳塔鹿野みか月 土橋

明美 春恵 忠良 美恵子 昭恵 一夫 輪多朗 帆雀 孝男 多哥由 螢報 武恵 愛恵 明美 幸枝 友子 喜与志 野草 荒介 保子 艶子 みさ子 ひかり 孔美子 宣子 隆風 完司

福袋買つて得したことがない  
 福小籠抱いて無口になつてきた  
 裏門も開いて福の神を待つ  
 幸福な友が涙を拭いていた  
 これも福孫から貰うお年玉  
 福の神と福をこみそうな温い家  
 福草葺引き立て役にあきてくる  
 福相も皺にかかれてしまつたり  
 福音を心澄まして待つていた  
 洒落つけが過ぎて誤解をされている  
 須弥壇で洒落たお顔の仏さん  
 皺が増え似合うお洒落をするつもり  
 洒落てるな八重に桜を咲わせる  
 さすが東京じゃれた男が六本木

富柳会

池

森子報

久枝 茂 由多香 弘子 くに子 八重子 三千代 登美枝 ひろ子 和子 節子 実満 諷人 瑞枝 紅紫朗 悦子 昭子 美代子 とも子 冬虹 文子 秀樹 鐘造 アキ 昭水 絹歌

生き残るため賛成の手をあげる

任されて叩いた胸が薄すぎる

ときめきとときどき握手する火照り

雑音を聞きなれてる胡蝶蘭

目を閉じて妻らしい日をたぐり寄せ

病む子供そつと覗いている不安

案山子の顔今も昔もへのへのもへの

叩いたらそれは硝子の城だった

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

牛の眉間で始まっているサッカー

牛の春家族揃って恵方参り

平成の牛は運動などしない

牛舎から平成九年の声がする

一月元日牛が産気づいて来た

牛だつて走って見たいたい時もある

初詣でみな田満な顔ばかり

田満な顔して届く年賀状

田満解決待っている酒の壺

田満に話がついた餅の数

田満が何時も笑いの種をまく

夫婦田満故郷の山が美しい

もう上がる活気徳利がごろごろし

年新たな次第に活気取り戻す

孫誕生活気づいてる犬までも

子に孫に活気貰って生き延びる

牛の市祝儀相場で活気つく

活気ある店先でつい無駄遣い

老いてますますもつこからが言えせん

老いてますますもつこからが言えせん

二三子 登子 欣之 岳人 花梢 方子 伊勇 森子 章峰 ひふみ 螢 満江 早苗 一葉 明子 邦代 午朗 米子 太泡 芳枝 静江 清子 房子 知恵子 鳳笙

釣り天狗ますます誇張して聞かず

友子

初春へますます弾む姫鏡

義良

人間模様ますます辛くなる日記

文子

瞑想へますます浄土遠くなる

煩惱児

老眼鏡かけてますます小言増え

与根一

虹の橋エスカレーター付いた夢

鶴丸

夢多き女が登る繩梯子

みえ

紙ヒコキ夢があるから飛んでいる

寿美子

夢のまた夢は楽しく見るがいい

静恵

明日へ夢つないで今日は振り向かぬ

桂子

息災で小さな夢を抱いている

叮紅

川柳大阪

坊農 柳弘報

アバウトで国政やつては困ります

俊明

ああ階段ひたすら登る札所まで

多香

カラオケの自称名人フシがない

川童

軽いジョークチクリ本音も入ってる

しげお

牛歩でも幸せつかむ今年こそ

酔照

アバウトな時間が人間取り戻す

青道

仮眠中孫は構わず上に乗り

吠花

仮眠室目覚ましだけが起きている

良花

まどろみの仮眠いい夢起こされる

雅巢

アバウトな性格だから愛される

美花

アバウトの歩幅で妻と小春日を

洛花

お静かに我が家の天使仮眠中

まつお

ハイテクの仮眠へ花が轮番待つ

朝子

仮眠する宿直室へ非常ベル

鉄心

階段の途中で仮面取り替える

希久志

苦情処理すぐに返事をくれと言つ

柳昌

減量法聞けば早速まねてみる

かよこ

道順をアバウトに聞き迷つてる

河南子

不夜城への階段すつと引っぱられ

一風

寅さんに似ている俺を許す妻

元司

急がねば敵は噂をまくだろう

敏

仮眠した部屋に路郎も来て座り

比呂志

親だけが早速乗り気になる釣書

三十四

年賀状米作りには牛いらぬ

一步

アバウトになれず円形脱毛症

ダン吉

アバウトな男で流れ星が好き

金太

音階を外れる父の温い歌

笑風

階上へ出ると夕日が美しい

重人

仮眠から醒めて靴紐しかと締め

柳弘

さあ開通早速乗りに行きまひよか

柳弘

岸和田川柳会

田中

文時報

クッションが故障している膝枕

苑子

枕木になって耐えている人もある

鹿太郎

受験の子へ母の祈りのそば枕

さよ子

気安めの嘘病人の枕元

萬の

枕許足音盗めば蹴つますき

柳宏子

山奥で動きを熊に見張られる

順治

スピードの見張りが怖いねずみ取り

路子

銀行の内側カメラ見張れない

呂万

張り込みがボヤク底冷えする師走

文時

猛犬とあるが見張りは小さい犬

洞庵

大空を見張る我が家の鬼瓦

一弥

物溢れ試食ハシゴで腹満たす

敏光

無料という甘い誘いの落し穴

輝彦

無料だと字が踊ってるダンス会  
 ガン末期妻が女神に見えて来た  
 嫁った娘が女神に連れて里帰り  
 博愛のヘレンケラーは女神だろ  
 戎橋わたり女神に逢いにゆく  
 母ちゃんが女神に見えた日もあった  
 逆転へ女神はほえむホームラン  
 仲裁が下手で揉め事飛び火する  
 揉め事の続いた子年暮れてゆく  
 あの人が入るといつも揉めてくる  
 揉めるまで内部告発待つ地獄  
 核のある限りは揉めている地球

川柳塔打吹

奥谷

弘朗報

忘れた頃に督促状がやって来る  
 幸福に酔うと他人を傷つける  
 木漏れ日に幸福もらう藪こうじ  
 気分だけ若いつもりで火傷した  
 出世した子の名をなぜか言いたがる  
 むつかしい話の名をなぜか酒が出る  
 脳の激減つた分だけメモが増え  
 しばらくは何も忘れて白い雪  
 幸福が続くと人を下に見る  
 遊園地ママと子供の夢を掘る  
 幸福と雪に埋もれるのが恐い  
 晩酌の気分を抱いて床に入る  
 金持ちが幸福だとは限らない  
 酒のんで忘れる幸福なおとこ  
 洗脳をされてシベリア掘ってきた

盛之 一齋 辰郎 ひで 金太 白光子 狸村 基 弘象 甚一 蛙城 ダン吉 節子 幸子 玲子 勝見 季芳 たけの 孝恵 よしえ きみ子 睦子 蝨子 喜与志 かつみ 石花菜 弘朗

三幸川柳教室

三宅

保州報

ライバルの受賞を囲む美辞麗句  
 囲いから出てもピエロのまま  
 縄張りの範囲で泳ぐ雑魚でいい  
 怖いから囲いの中に閉じ込める  
 銅鐸を囲み最古の人に会う  
 殻脱ぐと温い仲間にもまれる  
 赤ペンで囲むと敵の目に触れる  
 責任となれば縮まる守備範囲  
 ゼネコンのあおりで折れた屋台骨  
 負けいくさ遺骨箱には木の破片  
 骨粉になって漸く地に還る  
 奔放に見せて通している気骨  
 骨太の平手打ちにもある温み  
 土壇場の男気骨は枯れてない  
 オルゴール鳴って祝いの電子文  
 満足以書けてかしこで締めくくる  
 雪の夜はサンタに手紙書いてます  
 一通の手紙今夜を眠らせぬ  
 熱烈な手紙で隠す場所がない  
 人形の家を出てゆく置手紙  
 ダイレクトメールうちの事情が漏れている  
 冬眠に入ると蛙から手紙  
 匿名の手紙それから雨期に入る  
 若いつもりが年齢かくせない仕事する  
 若者との話少々汗をかき  
 レコードに若い日々あり枯れすすき  
 そこに山あるから行くという若さ

秀男 みね 当代 三千子 豊太郎 めぐみ 和子 嘉平 初子 悟 美子 孝子 碧 百合子 健三郎 さち子 あいや 保州 朱夏 満洲子 町子 千秀 公子 敏子 正一 親路 鉄治

妥協するたびに若さがちびてくる  
 赤いバラ若くてトゲが未だどれぬ  
 わたしはワイン若い君より価値がある

城北川柳会

吐田 公一報

お土産を気にせぬ旅をしてみたい  
 耳達者 人の話を拾って  
 窓の灯が悲喜こもごもを眺めてる  
 札束をちらちら見せて油断さす  
 一万円 拾ってからが試される  
 油断から落した恋も若さゆえ  
 世間体 粗大ゴミが拾えない  
 団欒の灯をさける反抗期  
 窓の灯が招いています帰ろかな  
 たつぷりとイヤ味を聞いて飲みに出る  
 船便が着けば賑わう岬の灯  
 あなた拾ってそれから私捨てられる  
 たつぷりと流した涙 背は追わぬ  
 燃え尽きた野心を拾う夜の道  
 受験の子まだ起きている窓明り  
 新緑の空気たつぷり深呼吸  
 幸せは夕餉を囲む家族の灯  
 山ほどの話 靴に詰めて旅  
 毀れたかつかうか捻子を巻きすぎて  
 剪定にあずを見直す高い空  
 黙々と顔突き合わす胸のうち  
 弓なりにされて盆栽逆らわす  
 油断させ棘をさして秋の風  
 疵だらけの街で喜劇を拾ってくる

桂香 貞子 章子 あき子 美代子 秀夫 史風 典子 トヨ子 政子 あい子 昭子 扇帆 春蘭 とし子 高栄 静子 登美子 一枝 純子 八重 満津子 寿美子 久留美 ただし 睦子 達子

愛燦々私の心に灯がともる  
輪の中を全て味方と見た油断  
節くれの指が拾った今の幸

高槻川柳サークル卯の花 川島颯云児報

捨てられぬ父の代から鳴る時計  
嫁姑娘の忘れていった腕時計  
鳴き砂に愛着がある海の宿

愛着を振り切るように雲を見る  
愛着の椅子で潮騒聞いている  
愛着の辞典亡父の息遣い

山に愛着炭焼き小屋を守り抜く  
淋しがりやの鬼へ贈ろう愛のうた  
娘の便り何よりうれしい贈り物

贈り主の名前でもめている夫婦  
鐘の音に忘れたこと百八ツ  
老人の足元掬うジングルベル

しぐれては鐘渡りゆく無縁墓  
ひたすらに耐えて第九の晴れ舞台  
ひたすらに修羅の道にも影を追い

ひたすらに生きてひたすら祈る日々  
不器用に生きて馬の目に涙  
ひたすらに同じ仕事で受賞する

ほどほどの望みひたすら持つて老け  
風は気まま私の過去を聞きたがる  
美人薄命傘寿とくにすぎました

遺言を書く気おこらず年送る  
恥多き一年だった黒豆を煮る  
今年こそ役所みんな総懺悔

倫子  
白峰  
公一

柳宏子

カレンジャー一枚今年の余韻がぶらさがる  
来年の鏡を今から磨いとく  
欲望の手で引く紐はからみ合う  
血判の痛さを今も忘れない  
首枷を外し首から風邪を引く  
金も出るため息も出る十二月

川柳塔唐津支部 久保 正剣報

年の暮れ時計のネジを巻いてやり  
世情には暗いが畏はよけている  
金で縛ると愛に嘲笑されそうて  
ロボットのようになり娘は頭下げ  
孫にまで私は鬼の役はせぬ

嫁さんに三歩遅れて籠をさげ  
モウよして傘寿過ぎてのハンコ擦し  
しんしんとガラス障子に雪見酒  
いいことの子想目減りをさせておく  
牛乳もバターチーズも恵む牛

文鎮の牛は黄金の色でそく  
凍る月吼えたい私にふりそぐ  
意識革命マカガ川柳しみだした  
一銭で駄菓子が買えた良き時代

ペン皿の会 鍛原 千里報

好きな人どんな言葉も愛になる  
喜びは昨日と同じお茶の味  
古希過ぎて夢ばかり追う春炬燵  
十本の指に助けられてる余生  
福耳と言われて善しとする暮らし

杜的  
求芽  
茶の子  
しげお  
恵美子  
諷云児

虹  
弘  
主

晴翠  
あき  
高明  
幸夫  
公一郎  
四郎  
タミ

俊實  
正剣  
久仁於

久子  
勝子  
寿美子  
節子  
友美

喜びも悲しみも越え古希となる  
切れ味のわるい大根とりかえる  
楽天家窓はいつでもあいてます  
風の音励ましたらう戸を叩く  
嫁がくれた鉢植のバラ咲き始め  
片えくば恋の美学に酔っている  
電話するだけで喜ぶ母がいる  
初春は大きな文字の辞書を買う  
古希祝う表もつらもまだ女

南大阪川柳会 寺井 東雲報

感情に走り露骨になった口  
最新のモードできつい河内弁  
恋終りまた新しい夢を追う  
むき出しの嫌味感じぬお人柄  
幼児語をママが通訳してわかり  
押しつけへ幼児の悲しい瞳と出逢う  
毒舌の底に流れているなさげ  
終電車今日の疲れと揺れている  
河内弁露骨になつて怖がられ  
故郷の一番鶏に目を覚ます  
好き嫌いで顔に出てるわかれる  
ボランティア温い話を持ち歩く  
今日もまた空ビン並び終ります  
気を付けよう親は幼児にミスリード  
恋の唄歌いオシッコまだ言えず  
あからさま返す言葉のない露骨  
様式はどうであらうと派手好み  
大売り出し手を引く孫にくじ引かせ

庸佑  
ダン吉  
真砂  
たもつ  
文秋  
柳宏子  
重人  
寿美  
志華子  
度

式美  
晚子  
秋子  
いくの  
清子  
千里  
智子  
慶子  
凡子

直子  
市子  
哲郎  
東雲  
三男  
文江  
勝美  
信博

信博

信博

信博

信博

信博

ブライバシ―露骨に暴く週刊誌  
終章を飾る煙は一直線  
中華街ほのほのさせるルミナリエ  
愛終る予感ポトリと椿落つ  
毛糸あむそばで幼児を遊ばせる  
冬支度母が大根漬け終る  
隣から飛んでくるごみ掃き返す  
ほのぼのと瀬戸内明ける潮の色  
骨肉の争いまだまだ終らない  
風向きがかわり短い恋終る  
パパの靴履いて子の足よく遊ぶ  
幼児の分思わんとこから遺産分け

川柳ささやま社 酒井 靖子報

隙もなく生きてあしたへ急ぐ日々  
玉手箱あけると終りが待っていた  
恋終り見えないものが見えてきた  
和と書いた色紙眺めて振り返る  
講習の料理へ和む湯気が立つ  
この橋を渡ればきつと陽が当る  
衣食住足りて平和でボケはじめ  
豆つぶの一つ一つにある和合  
一病を持った同士の和が温い  
おはようと言えば明るい和の絆  
七転び八起きで米寿の橋渡る  
伴せなふりして渡る朽ちた橋  
わがままに飛べぬさだめの奴胤  
共に修羅越えて和の字にしくはなし  
踏みしめて夫婦で渡るいばら道

悟郎 柳伸 順治 千里 頂留子 秋子 映子 萬的 恒明 正博 シメ子 千梢  
とよ子 恵美 純子 芳乃 美智子 多美子 すす子 末野 市三 八重子 素水 とみ子 つや子 ヒサ子 和子

この川を渡ると会える里訛り  
三途の川渡ればほんまのことを言う  
くやしくて虹を渡ってみたくなる

竹原川柳会

時広 一路報

痛いのはあなたを思うこの心  
かつこい正義の味方どこにいる  
だんだんと亡父に似てくるのが怖い  
里帰りの一番に井戸の水  
もう少し生きたく薬飲んで  
花嫁の父は飲んで酔ってない  
人生暮色煎じ薬を飲んで  
何飲んでみても消えない罪がある  
一合を薬のように飲み逢者  
暮あけて三回忌も済ませ茶をすする  
年忘れ鍋を囲んで夫と酌む  
丑年のゆつたりとして初日の出  
誰よりも嫁御のお手の温さ知る  
いつだって母さんあなたの味方だよ  
クラス会みんな味方の顔をする  
生涯の味方は一人夫が居る  
親子でも敵と味方になる野球  
握手して味方と思う勘違い  
好きだからいつも味方とおもってる  
神様を味方につけて試験場  
味方にも敵にもなれる妻である  
盃を受けて味方になっておく  
女同士味方になって台所  
へそくりはいいつも私の味方です

富美 可住 靖子 高史 中千枝 喜美子 蘭幸 栄恵 年子 菁居 笑子 節夫 比呂子 汎美 淑子 喜久恵 房子 美佐雄 現代 清水 八重美 一枝 光子 寿枝 蝸牛 千代美 眞由美

猫じたは私に似てる子と孫が  
瓜二つ黒子が決めての双子ちゃん  
親子だな仕事までよく似てくるね  
こけし人形生まれた土地の顔になる  
糞虫に似た寝袋があたたかい  
僕の眼にみんな同じに見える蟻

川柳クラブわたの花

吉村

ひよつとして人目を計算した日記  
また一つ日本の心消えていく  
水琴窟幽玄な音に耳すます  
聞くまいとしても聞こえる耳の毒  
耳痛いこともしっかり受け止める  
華やかな和服二十へ満ちあふれ  
耳にたこ長寿長寿と言われても  
数の子を食べる歯ざわり耳ざわり  
血圧の揺れも野心は治まらず  
無表情のピエロ拍手へ最敬礼  
平成のおとこにピアス変でない  
終戦の玉音はまだ消えぬ耳  
聞こえないふりをしながら聞いている  
幸せをこの福耳に溜めておく  
良心がはやらせている小さい店  
耳よりの話おとなり養子来る  
福耳の孫が笑いを持ってくる  
パンの耳待ってたように犬が食い  
福耳と言われて育ちこの程度  
良心に誓って嘘をつきました  
いつの世も子ゆえに迷う親心

富司枝 静佳 夏喜 貞子 静風 一路 一風報 民子 八寿子 宏 剛治 ミツ子 道子 春江 幸枝 幸風 隆盛 友甫 朝子 ますみ 幸子 トシエ まさと 明子 けいこ 春江

馬耳東風明治の父は仏さま  
華やかな婚礼終えて母一人  
聴こえないようにバカだと言つてやる

知佐子  
美代子  
鬼遊

川柳東大版

森下 愛論報

侍と言われ無官で窓際で

一志

侍のたましい捨てぬ亡父でした

賢子

待の背中孤独をためている

三重子

被災地の夜は静寂に潰されそう

柳宏子

野仏がぼつんと辺り枯れている

太郎

新月に屋根の黒猫動かない

ばっは

便利さを貰い静けさ奪われる

度

補聴器を外すと石庭が見える

外吉

静かさを破る電話へ母危篤

朝子

コンビニに寄つた背広の無表情

恭昌

残業の足コンビニへ吸い込まれ

湖風

手のひらでゆうゆう夫を折りたたむ

柳伸

ゆうゆうと金の捨て場を考へる

愛論

信念がゆうゆう踏絵ふんでいる

真柳

痛い目を忘れるころにまた女難

章久

女難から左遷の冬を覚悟する

猪太郎

占いに今日女から遠ざかる

白兔

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

ストーブの噂話が飛火する

マツエ

愛犬が和装の妻に首カシゲ

治延

砕け散る波は男の貌でいる

あきら

妻の振るタクトにとても逆らえぬ

吟笑

松島に落ちる夕陽が彩を添え  
寒に耐えせめて心は温かく  
作法など何処吹く風と一気呑み  
青いの街に出たがるミニトマト  
ふるりの天気予報も雪模様

露天風呂気を使つてか月隠れ  
肩書がとれて世の中広くなる  
新築に亡夫の顔が見えかくれ  
亡夫の忌が済めば師走の風が吹く  
和やかなムードをこわす酔つ払い  
襖絵に栄華を偲ぶ二条城

裏木戸を開けて待つて母の愛  
快方へ寝させ起こせと無理を言つ

はびきの市民川柳会 榎本 吐来報

言うだけを言うて新たな悔いを抱く  
定年のない人生に秋の風  
一人では生きられないと知る師走  
デパートのグルメそっくり重箱に  
汗を生せばまっすぐに生きられる  
丑年を生きてよかつた年にする  
追書で賀状の文字が生きてくる  
狙われるものが何にもない強み  
引き金をひきかねている動局的  
狙つてあんな娘は横を向いたまま  
押しつけのサンプルやっぱり銭が要り  
骨一本サンプルにしてマンモス像  
公約はサンプルでした当選後  
いい匂いサンプルだけがする香り

放任  
正雪  
かおり  
坊太郎  
ひかり  
よしみ  
いさむ  
チカエ  
ふみ  
中なみ子  
くに子  
はつ恵  
文仙

原爆のサンプル日本だけでよい  
サンプルの酒へ咽喉から手が伸びる  
サンプルの天井だから湯気がない  
汗知らぬ金はやっぱり溜らない  
手術成功やっぱり神はいるんだなあ  
思案してやっぱり長いに巻かれ  
行革の風コップの中で消え  
好きだからやっぱり好きと言えません  
冬の風やっぱり受けてみることに  
水面下やっぱり話ついていた  
あの人の歳暮見越して買ぬぬ品  
お歳暮が素通りをする定年後  
ポナスが半分消えてゆく歳暮  
そろそろの足にもあつた自尊心  
道草もしてそろそろと老いの坂  
寒気くる そろそろ家も冬支度

川柳若葉の会 宮崎シマ子報

裏からの友はつかげ覆いて来る  
裏口のドアは年中開いてます  
裏庭の柿はそのまま冬に入る  
それも齡裏表気がつかなくて  
銀行もシナリオを練る舞台裏  
裏返つた虫の哀れを知っている  
裏話花の見頃はむつかしい  
ニコニコと裏の話にだまされる  
裏話聞いてやる気が盛り上がる  
裏切りのセレモニー聞く歳の暮れ  
色いろのことがおましたネズミ年

喜美子  
香住  
千枝子  
慶子  
あずき  
田実子  
能子  
欣史子  
弘直  
留吉

三人でやつとひとりの文珠知恵

清芳

横浜あおば川柳会

菱田

満秋報

自動ドアうっかり踏んで客となる

見早子

這いだした孫にベースを乱される

亜希子

お見合いで気持が揺らぐ何度目か

笑子

胎動を感じて母となる自覚

和可

引退も覚悟鈍ったこの動き

達也

保育器の指 天下を掴むかに動き

よし一

可愛さが心が動くお年玉

サト子

世の中の動きについていけぬ脚

政勝

百歳の生命の重さ影光る

ふみ

占いが生命線をもてあそぶ

広和

生き延びた命大事にボランテイヤ

ちよ路

限りある生命へ今日もムチを打つ

良子

わだつみの若い生命を読み返す

絹子

五感みな開けていのちを確かめる

道子

勝手に産んでと言った子 母になる

智恵子

契約書揃えいのちを値踏みする

純子

退院の胸いっぱいに深呼吸

天々

ないはずの生命静かに愛拾う

羊子

潮満ちて夢多きさが産れくる

明玄

限られた生命さきさら砂時計

あらた

孫の声財布の紐をゆるませる

雅子

奥様の甘い言葉で買われる

省子

甘酸っぱい想いも遠く蕩の窓

八重子

甘いつぼのぞいてみたい好奇心

加津子

底辺に届いてほしい甘い汁

徳三

一年の運百円でたしかめる

芳江

もう一度甘えてみたい母のひざ

トヨ子

はいと言う子に慣らされて動く親

由美子

信じない親に手をやく少年課

潮華

食べ頃を知らず湯豆腐踊りだす

満秋

川柳高知

川竹

松風報

定年の椅子が明日を考える

功

明日の夢両手に掴む呱呱の声

朱坊

ぬるま湯に浸かつて明日のない男

快風

フルムーンそんな甘い妻でない

孝雄

放し飼いされるような老夫婦

幸

中国の壺へ日本の新春を生け

菊野

中追の自然美で酌む年忘れ

竹萌

少しづつ夢を描いて春を待ち

和子

やや地味な和服に映える帯の色

良雄

薬帯の農夫が金を溜めている

子龍

武者ぶるいする黒帯を締め直す

三郎

逢いに行く帯はすこし地味にする

松風

川柳ねがわ

江口

度報

ときどきは鬼に化けたいほけです

朝子

化けてみる化かされてみる嫁姑

とし子

未だ女指の先まで化けたがる

静江

化け上手影の尻尾に気が付かぬ

高栄

ギョツとする綺麗な女に喉仏

亜成

化けて出てやるとは遺書に書いてない

小路

善人に化けると肩が凝ってくる

時弘

さあ早く決断せよと発車ベル

一途

まだ未練ためらいづく別れ道

権太

ためらいもせずにヤングは露天風呂

亜也子

封を切る指に期待とためらいと

光子

ゴーサインもつためらいは許さない

頂留子

忍び逢いためらっている影法師

日出子

ためらわず愛の手が押す車椅子

波留吉

先生のモラルが落ちている廊下

シマ子

先に死ぬ語を軽くする廊下

雅文

面会の廊下でメロンは合せ

かすみ

走りたい気持をそえる長廊下

庸佑

堪えてた涙がドツと出る廊下

恵子

一度廊下拭いてみたかろ仮設小屋

たもつ

昔から貧乏神と仲が良い

冬葉

本命と穴が裏目にくる不運

勇太郎

寝たきりでたらい回しになる不運

ルイ子

不運にも主役になれぬかすみ草

黎之助

風化した故郷さがす赤とんぼ

洋

親友へ贈る言葉はかざらない

英千子

看板がゴトゴトと鳴る歳の暮れ

弘直

縄抜けは出来そうもない除夜の鐘

磔

笑つてる写真をひとつ撮っておく

度

ゆつたりと牛が轮番を待っている

三郎

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

弘治

母と娘の命見せませず臍ルック

まさお

いくさ地震いのちの淵を二度渡る

すみ

天命と言うには惜しい計報聴く

伊三郎

爆弾を抱いた命と雑魚寝する

十四郎

点滴の重き命を屈伸す

いわゑ

落日の中へ命をただよわせ

命ある限り毎朝目が覚める

風船の軽さで崖を飛び降りた

コマーシャルと吾が脳軽いちにち

鎌足と皇子を偲んで多武峯

少子化が先で問題生みそうだ

人生にはじき出された老夫婦

脇役でいて長持ちしています

参賀ありこの不思議な国の童話

とある日の私が無理を言いたがる

ひたすらに信じられたのはむかし

糸すすき命あるものみな揺れる

扉一枚向うに佇っている言葉

伸び切ったゴムにもあつたうす笑

百八つ鐘の音吸って寒い月

今年はこちらへ向いとくはれえつきん

夕暮れも伏見の鳥居赤く見え

柳川

八十田洞庵報

倒れたら頼むと言って一人住む

頼まれて脚り切れぬお人好し

不治という御へ未練を添える杖

頼みごと素直な気持ちで書いてくれ

戦時中華式の写真ない未練

頼むのがうまいあなたに使われる

お賽銭はずんだよって頼みます

親のエゴ頼みもしない許嫁

ギャンブルに勝って上撰買いにやる

仏壇へ蘭を手向けて留守頼む

未練酒ボトルに浮かぶ影法師

鹿太

光穂

ハツエ

愛

昭三

一笛

紫香

義芳

美智子

澄子

薫

芳子

正治

比ろ志

キク子

正子

頼みごと脅しをかけて頭下げ

頼みごと恩に着ますといつも言う

知人から頼むと印をついおして

気安さに頼まれ受けたその重み

頼まれた釣書娘は恋してる

頼むからむかしのことは言わないで

頼まれて座った椅子はこわい椅子

溝口柳会

小西雄々報

出無精になつて炬燵の番をする

掘り炬燵亡母と語つた日を覚え

大山の初冠雪へ炬燵出す

農閑期炬燵で次のプラン立て

炬燵から雪を眺めて詩に耽る

炬燵からみかんの山がくずれだす

外吹雪むかしを語る老い炬燵

することがあるに炬燵を出られない

炬燵の中でイデオロギーが膨れそう

いずも柳会

園山多賀子報

頌春の温い光を両手にもらう

頌春に和顔愛語の雑煮膳

頌春と記す命が開花する

まだ俺がおれがと言っている意欲

リハビリの意欲履きよい靴を買う

トンネルを抜けた意欲に陽が当り

唇をはみだす紅が意欲的

目のまわり鼻のまわりが意欲的

意欲などなくした案山子立っている

鉄男

里子

龍弘

みや子

みつ子

みつ子

洞庵

静江

鈴枝

豊枝

久子

智恵子

弘子

信敬

康女

雄々

ひとつでも誰にも分ける母がいる

ひとつでも生きる支えをしかと持つ

縄のれん心の憂さがひとつ晴れ

この辺でひとつ男の見せどころ

ひとつ二つと大事なものを確かめる

決断へ決めた命はひとつきり

故里の渚知つてる足の裏

過去みんな流す渚の風に会う

渚から声があがつて朝になる

傷心の涙渚で捨ててくる

もつひとつ足したら満点パパになる

いびつでもひとつずつ積む石がある

ひとつだけ言わせて貰う屠蘇の妻

淋しさは言わずに卵一つ割る

確実にひとつひとつと石を積む

白無垢で親娘の絆染めかえる

初孫も白から染まる人生譜

物欲しそうな顔を待つてる白い畏

正直な心に白と黒も住む

ふる里の方へ流れる白い雲

何ごとか起ると白が濁り出す

川柳岩出

児島与呂志報

良いこともあつた気がする年の暮れ

古時計ネジを巻く日を待っている

封筒の中に仕舞つてある涙

無心言う娘の手紙丸い字で

督促へみな鬼になる年の暮れ

追伸に一言添えて本音吐き

蘭水

清子

正朗

芳子

文子

義良

ちかし

房学

雨学

ひろし

満江

治代

茂美

勝子

陽子

まこと

流石

青湖

昌枝

昭二

妙子

暮れる陽に鉄を休めて祈る明日  
待つことの喜びを知る岩田帯  
夕暮れに遊び疲れた靴帰る  
日本一短い文に愛溢れ

懐かしい昔の手紙箱の中  
ラブレター胸踊らせたこともある  
待つ身より待たせる側のつらさ増す  
三十分待たされそっとぬける会  
本心はお終いにあり子の手紙

翠洋会

藤井 正雄報

新曲をすぐものにして老い知らず  
つちりをつつく箸先よく喋る  
留守番の夫に愛想笑いする  
やる気満ちて翠洋会の初句会  
なにもかも経験してます成人式  
箸茶碗せめて新たに初春の膳  
割箸の子備も狩り出し隣組  
箸紙のおひねりがとぶおてもやん  
山坂を共に歩んだ夫婦箸  
生きて良し生きて不安な長寿箸  
初雪が飾る翠洋初句会  
夫婦箸買い整えて式を待つ  
新年へ五欲持ち越す神頼み  
今年こそプラス思考と初日記  
好きな物あり過ぎ箸が迷ってる  
よく噛んで食べろと牛に教えられ  
ありがと孫からもらう長寿箸  
げて物も珍味と言われ動く箸

悦男 保子 紳一郎 千鶴子 英子  
哲雄 重徳 与呂志  
光司 宣司 義  
英千子 蕉子 叡子 絹子 千歩 真砂 志華子  
さと美 綾子 蛙 みつ子 東雲 佳秋 正坊 恭昌

冬帽子もつと私をきたえねば  
割箸に下着をはさむ倦怠期  
品定め箸噛んでいるおでん鍋  
大阪の雪に寝ている子を起し

とっとり川柳会

武田 帆雀報

親展を急いで切れば請求書  
六十路坂急ぐな狂い咲きもある  
行く先は同じだ急ぐこともない  
白黒を急ぐと仲間逃げてゆく  
急がねばもう晩鐘が鳴っている  
不都合になると急ぎの用かいな  
仏滅も友引もない急用だ  
急いでも顔は洗っておきましょう  
お急ぎの方は裏口からどうぞ  
一升瓶に借金の愚痴封じ込む  
借金と子供背負った嫁が来る  
借金もあると資産を公開する  
家の借金済むころ爺と婆になる  
ダンボール借金も甲斐性もない  
借金シャッキン泣いて車が走ってる  
借金は隠して嫁に来てもらおう  
借金も妻子も捨てて北海道  
借金を返し損した気にもなる  
灰になっても借金つきまとう  
消費税ふくらむ割勘むつかしい  
飲んでから割り勘だった騒ぎ出す  
割り勘と聞いて下戸でも無理をする

希久子 久峰 正雄 鬼遊  
よしえ 玲子 圭一郎 孝男 宣子 鬼桜 睦子 帆雀 真理子 公弘 和歌子 忠良 悦子 きみ子 一瑤 昭恵 一京 石花菜 大漁 螢 明美 一夫 一枝

割り勘へ大風呂敷がホツとする  
酒強い女割り勘安過ぎる  
割り勘と言わずに俺について来い  
割り勘にせねば嬢がやかましい  
割り勘の席で説教聞かされる  
割り勘を集めるに來ない選挙前  
恋人と飲んで割り勘とも言えず

川柳塔おとり

上田 俊路報

岩風呂で星を数えて気も浴す  
菜風呂痛みもなやみ皆いえる  
薪でたく故郷の風呂あたたかい  
ハイテクの風呂で手伝うことがない  
嫁が気をつかってくれて湯が熱い  
お風呂から少し考え変えて出る  
重箱を家宝のようにたまに出す  
小箱だが大きな夢を入れて見る  
中流の意識みかんを箱で買う  
針箱に亡母の温みが生きつづけ  
難しく電話で言えぬこともある  
難しい話に酒が味方する  
難しい人と落語を聞きに行く

倉吉川柳会

谷口 次男報

美恵子 喬水 和枝 隆風 ひろ子 喜与志 完司  
道子 清子 俊路 幸次郎 みさを 艶子 せつ子 伝住 由多香 宏章 崇 孝子 真一  
目の前にホテルがあつて困り目の  
目前の宝石とんと縁が無い  
目前のケーキ気になる血糖値  
目前で予言たらたら世紀末  
目前で我が子がテープ切る快拳

一夫 和枝 御前 康子 喜美子

目の前にある石ころに蹴つまずく  
目の前を泥水はねて行く外車  
目の前のドブに指輪を投げ捨てる  
福の神目の前に来て動かかない

目の前の眼鏡時々探す癖  
目の前の行草お先真つ暗だ  
目の前にミカンと電気紙芝居  
面通しされて疑い晴れました

面外し眠れば深い海になる  
面倒くさいから朝めしを抜いて寝る  
面々と怖いお方が座り込む  
しつつける母の般若の面になる

目の前の美人見つけた合鏡  
無免許で白バイ抜いた暴走車

川柳藤井寺

高田美代子報

十二月第九コーラス熟年会  
十二月わたしを鬼にしてしまつ  
ポチ袋ふえ財布かかるなる十二月  
歳暮品あれこれ義理を思案する  
反省の数だけ酔つた忘年会  
花と野菜 高いところぼすも十二月  
願ひ事叶わぬまで十二月  
お隣の隠居も忙し十二月  
十二月みんなバブルのせいにする  
松葉ガニ思案のつづく十二月  
拍子木の音で心も火の用心  
ふるりの黒豆届く十二月  
人の名にかすみかかつて老いを知る

よしえ 玲子 ゆり子 秀峰 天雀 かつみ 石花菜 節子 雄々 苦句 和歌子 智子 康志 幸子 三郎 美代子 みよ子 二南 和樹 吸江 敦子 智久 柳太 キシ子 悦子 昭水 かつみ

忘れたい事だけ書いてある日記  
夫婦坂忘れられないあのあたり  
忘れることも神が与えた痛み止め  
忘れるのがとても上手な老母である  
補聴器を忘れて恋を聞きもらす  
新旧のけじめつけてる除夜の鐘  
この辺でけじめつけねば火傷する  
何時けじめロシアつける気北の島  
愛と恋けじめはちゃんと付けて行く  
ピカピカの靴でけじめをつけに行く  
けじめとは神がなされる仕事かも  
わかっているがけじめをつける金がない  
長い春にけじめがついたゴールイン  
死ぬほどのことかと恋にけじめつけ  
男と女 判子一つで付くけじめ  
大根煮仏と一緒に食べている  
度忘れが長寿のもとと医者は言う

豊中もくせい川柳会

田中正坊報

刈りたての頭みんなに叩かれる  
寝たきりの母いとおしく髪を刈る  
きつかけは綻び縫つたその日から  
すんなりと仕立てあがった晴小袖  
旅立ちの晴れ着は白い布で縫つ  
合戦のあつた林に無名墓  
ふくろうが森林伐採異議唱え  
旧参道けもの道ある杉並木  
鋭さのない平成の男たち  
老いてなお鋭い所ちらと見せ

しげお 扶美代 昭子 絹子 アキ 利武 花梢 史郎 六点 一屯 桂子 正一 修六 美房 志洋 鐘造 恒雄 明光 知香子 きく子 弘直 シマ子 紫香 計光 一笛 慶子 吉太郎

新同人紹介

福岡 雅が楓

— 薫風・正雄推薦

田中 節子

— 薫風・正雄推薦

松永 会美

— 薫風・正雄推薦

小林 周信

— 薫風・正雄推薦

三品 征子

— 薫風・正雄推薦

心眼を開けば鋭い頭となる  
ママは花好きコヒーローは二階です  
松過ぎて辛口酒の小正月  
神戸から友の元氣な年賀状  
星が流れて友ひとりずつ消える  
出発を決めたら早い方がよい

ローズ川柳会

山崎

君子報

冬が来て毬藻母なる湖の底  
石ころも宝の顔で旅土産  
持っている宝はいつも我が胸に  
早春賦まりもわたしも弾み出す  
立ち上がる力をくれた子は宝  
炭団がなくてさまにならない雪だるま  
優しさに飢えて花屋の前に行つ  
国宝を守る古寺人氣なく  
友が宝と教えてくれたあの地震  
歳月が宝物まで変えてゆく  
ホールインワンボールが招く大散財  
寶石をねだつたなんてことはない  
父という広場のまりがよく弾む  
はずまないまりに元氣を入れてやる  
国宝展観音様の首太し  
青い毬野山を弾み星になる  
ボールのような月に夜道を見送られ

堺川柳会

河内

月子報

何言つてもニコニコ笑う無口の子  
ワープロに一言手書き添えておく

春蘭  
八千代

酔つたなら笑い上戸になりたいね  
眠るまで厄病神を寄せつけず  
いい席だ隣の人がよく笑う  
ふきのとう軽いコートを陽に当てる  
税上げて庶民の財布軽くする  
片仮名で書くほど効いて来る薬  
生かされて友に書く文筆太に  
夫婦ですときには軽い嫉妬する  
明るさで運まで開け福を呼び  
謝ればそれでおしまいなのですか  
髪切つて頭を少うし軽くする  
ひとひらの雪をそおつと吹いている  
危険な微笑 カサブランカが開く  
避けられぬものなら笑つて立ち向う  
二人の力合わすと薄日差してくる  
役人の手に血税の軽いこと  
石段を登る無欲へ身が軽い  
あばら骨見え見え秤上がらない  
自分史のわが背景に飢えを書き  
母さんに作り笑顔を見破られ  
とし五歳 おもさ十キロさばを読む  
ピエロ見て笑う私がピエロめき  
仇とつてから笑わなくなりまし  
笑うこと私の脳内革命  
一笑されてやる気が燃え上がり  
愚痴なんて言えない軽い羽根ぶとん  
女です私一生闘牛士  
句読点程の軽さの賀状書く  
満津子さんの賀状一ばん上に置く

楓  
菜々  
半銭  
小雪  
二彰  
昭梓  
りつえ  
みつこ  
扶美代  
美代子  
こころ  
泰子  
東雲  
かりん  
朝子  
洞庵  
勇太  
布佐恵  
哲平  
紀美女  
千代  
冬虹  
頂留子  
健吾  
とし子  
高栄  
二三

志田千代  
— 薫風・正雄推薦

鴨谷瑠美子  
— 薫風・正雄推薦

中山キヨ子  
— 薫風・正雄推薦

黒台伊佐武  
— 薫風・正雄推薦

山本玲子  
— 紫香・公一推薦

# 柳界展望

く 川上 富湖  
②三宅保州③山田高夫  
〈あおい賞〉

背伸びするたびに花びら  
散って行く 柿花紀美女  
②松原寿子③玉井聖太  
〈たちはな賞〉

いい寝覚め真っ白な日へ  
墨を擦る 松本 良  
②青枝鉄治③日野 愿  
〈課題吟賞〉

俄雨 握り拳を挙げたま  
ま 桑野 昌子  
②垂井千寿子③三宅保州  
★第19回阪神文芸祭は2月  
23日、川西市みつなかホー  
ルで開かれたが、「季節と  
季節」と題する島津忠夫武  
庫川女子大教授の講義の後、  
入選歌句の発表と表彰が行  
われ、川柳部門では本社同  
人の奥田みつ子・川上大輪  
・田中正坊の3氏が秀句賞  
に選ばれた。

★尼崎桜保存会・尼崎川柳  
協会は4月13日、尼崎市立  
立花地区会館で第2回桜ま  
つり川柳大会を開く。宿題  
と選者は、桜―長浜澄子・  
児玉歌子・中野文廣共選▽  
風―萩原金之助▽動く―黒  
川紫香▽雑詠―森田栄一、  
各題2句で午後1時締切、  
会費1000円

★堺番傘川柳会創立70周年  
中田たつお句集「森ノ宮」  
発刊記念川柳大会が4月20  
日正午からグランドホテル  
新東洋で開かれる。宿題と  
選者は次のとおり。余る―  
田中新一▽鐘―杉森節子▽  
記者―住田英比古▽ヒロイ  
ン―木野由紀子▽積る―加  
藤琴谷▽袋―森中恵美子▽  
花道―橘高薫風(各題2句  
・午後1時締切)事前投句  
は、ホテル―梶川雄次郎選  
(ハガキで2句・3月20日  
締切)、会費3000円

★NHK学園川柳九州大会  
は5月11日午後1時から大  
分県・湯布院町中央公民館  
で開かれる。宿題と選者は  
許す―外山あきら▽深い―  
田頭良子▽印象―吉岡龍城  
席題選者は、坂本柳峯・佐  
藤真砂延。宿題事前投句は  
4月10日までに投句料16  
00円を添え、国立市富士  
見台2―36・NHK学園川  
柳九州大会事務局へ

★オール川柳賞記念大会'97  
は5月25日、三井アーバン  
ホテル(地下鉄弁天町)で  
開催、オール川柳賞表彰式  
に続いて記念句会を開く。

★厚生省と開催都道府県お  
よび長寿社会開発センター  
の共催により毎年、全国健  
康福祉祭(ねんりんピック)  
が開かれており、平成十年  
は10月31日から11月3日ま  
で愛知県・名古屋市中第11  
回大会が開催される。この  
大会では健康関連イベント  
と福祉・生きがい関連イベ  
ントがあり、これまで囲碁  
・将棋・俳句の大会が行わ  
れたが、愛知県大会から川  
柳が加えられることとなり  
準備を進めている。

▽出 版△  
■『いちろう遺句集』(松  
本一郎著・B6判上製本・  
124頁・松本篤子発行)  
橘高薫風・黒川紫香序文  
■『オール川柳年鑑'97』  
(A5判294頁・価30  
00円)川柳界1996年  
の回顧・平成8年のオール  
川柳一句集・私の会心の一  
句・わが柳社の作品の傾向  
などを収録、巻末に全国柳  
社一覽・川柳作家一覽・句  
集句書総覧等を掲載

▽こ 芳 志△  
■天満三千子さん(同人・  
和歌山市)、浜口秀子さん  
(誌友・室戸市)から金一  
封を拝受しました。

▼訂 正▲  
■2月号P84下段・最  
後の行・作者名「佳雲」↓  
「ひで」

☆平成8年度の熊本県民文  
芸賞が決まった。一席は原  
田のぶ子、二席は高瀬邦一  
三席は宮本美致代の各氏  
★三幸川柳教室は、新年句  
会で200回目を迎えるの  
を記念して、記念合同句集  
『集い』を刊行することと  
し、準備を進めている。

★川柳塔おっぱこ吟社では  
1月19日、句報280号記  
念大会を開いたが、同大会  
に白鳥町長が臨席、同人の  
工藤吟笑氏に町長賞と記念  
品が贈呈された。

★川柳塔わかやま吟社は、  
平成8年度の各賞を次のと  
おり決定した。

〈葵水賞〉  
すぐ曇る鏡 女として磨

☆NHK学園川柳九州大会  
は5月11日午後1時から大  
分県・湯布院町中央公民館  
で開かれる。宿題と選者は  
許す―外山あきら▽深い―  
田頭良子▽印象―吉岡龍城  
席題選者は、坂本柳峯・佐  
藤真砂延。宿題事前投句は  
4月10日までに投句料16  
00円を添え、国立市富士  
見台2―36・NHK学園川  
柳九州大会事務局へ

★オール川柳賞記念大会'97  
は5月25日、三井アーバン  
ホテル(地下鉄弁天町)で  
開催、オール川柳賞表彰式  
に続いて記念句会を開く。

★厚生省と開催都道府県お  
よび長寿社会開発センター  
の共催により毎年、全国健  
康福祉祭(ねんりんピック)  
が開かれており、平成十年  
は10月31日から11月3日ま  
で愛知県・名古屋市中第11  
回大会が開催される。この  
大会では健康関連イベント  
と福祉・生きがい関連イベ  
ントがあり、これまで囲碁  
・将棋・俳句の大会が行わ  
れたが、愛知県大会から川  
柳が加えられることとなり  
準備を進めている。

▽出 版△  
■『いちろう遺句集』(松  
本一郎著・B6判上製本・  
124頁・松本篤子発行)  
橘高薫風・黒川紫香序文  
■『オール川柳年鑑'97』  
(A5判294頁・価30  
00円)川柳界1996年  
の回顧・平成8年のオール  
川柳一句集・私の会心の一  
句・わが柳社の作品の傾向  
などを収録、巻末に全国柳  
社一覽・川柳作家一覽・句  
集句書総覧等を掲載

▽こ 芳 志△  
■天満三千子さん(同人・  
和歌山市)、浜口秀子さん  
(誌友・室戸市)から金一  
封を拝受しました。

▼訂 正▲  
■2月号P84下段・最  
後の行・作者名「佳雲」↓  
「ひで」

☆平成8年度の熊本県民文  
芸賞が決まった。一席は原  
田のぶ子、二席は高瀬邦一  
三席は宮本美致代の各氏  
★三幸川柳教室は、新年句  
会で200回目を迎えるの  
を記念して、記念合同句集  
『集い』を刊行することと  
し、準備を進めている。

★川柳塔おっぱこ吟社では  
1月19日、句報280号記  
念大会を開いたが、同大会  
に白鳥町長が臨席、同人の  
工藤吟笑氏に町長賞と記念  
品が贈呈された。

★川柳塔わかやま吟社は、  
平成8年度の各賞を次のと  
おり決定した。

〈葵水賞〉  
すぐ曇る鏡 女として磨

☆NHK学園川柳九州大会  
は5月11日午後1時から大  
分県・湯布院町中央公民館  
で開かれる。宿題と選者は  
許す―外山あきら▽深い―  
田頭良子▽印象―吉岡龍城  
席題選者は、坂本柳峯・佐  
藤真砂延。宿題事前投句は  
4月10日までに投句料16  
00円を添え、国立市富士  
見台2―36・NHK学園川  
柳九州大会事務局へ

### 3月各地句会案内

句会名	日時と題	会場と投句先
堺川柳会	6日(木)午後1時から 委す・好き(共選)	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼崎 いくしま	7日(金)午後1時から 男・止る・雑詠(A・B)	サンビック尼崎3F 阪神尼崎南西徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川柳塔 まつえ	8日(土)午後1時から 足音・期待・爽やか	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川柳塔 わかやま	9日(日)午後1時から 面・梯子・走る	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	10日(月)午後1時から 記憶・折る・飽きる・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川柳 同好会	11日(火)午後1時から 匂う・捨てる・サイン	豊中市立蛍池公民館 阪急宝塚線蛍池駅西へ150米 〒560 豊中市蛍池中町3-10-28 井上直次
八尾市民 川柳会	11日(火)午後6時から 理解・芽・治す・匂い	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
岸和田 川柳会	15日(土)午後1時半から 勇気・用事・来客・理想	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地埋村
川柳 ねやがわ	16日(日) 正午から 仲間・要求・青春・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川柳会	17日(月)午後1時から 鎖・ロビー・生き生き・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	20日(木・祝)正午から 粗末・あたふた・呟く・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-11 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
南大阪 川柳会	21日(金)午後6時から 憂さ・裏付け・潤う・上役	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
東大阪市 川柳 同好会	22日(土)午後6時から 嫌い・雀・おとな・斬る	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市民 川柳会	23日(日)午後1時から うすうす・ミス(失敗)・笛・研ぐ	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
富柳会	27日(木)午後1時から 石・菓子・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4丁目1-10 池 森子
京都 塔の会	28日(金)午後1時から 乳・過ぎる・行儀	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル弁財天町 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

☆「人生はいろいろ七味唐がらし」という高杉鬼遊さんの句がある。まさに、人生もいろいろ、考え方もいろいろである。だから「美しいから好き」な人もいれば「美しいから嫌い」という人もいえるわけである。

句ができて不思議ではない。また、熱心に句集などを読んで勉強していると、その他人の句が記憶の底に残っていて、フツと自分の句として浮かんできたりする。その錯覚が怖い。その他にも、自分自身が以前に作った句と、全く同じ句を作っているのに気がついて愕然とすることもある。

☆その辺りの他人との違いを自覚しないで、自分の考えばかりを主張すると摩擦が起きやすい。誰でも自分が可愛い、自分の意見が正しいと思いたいが、他人の意見も尊重し、反対意見でも認める余裕が欲しいと自戒をこめて、改めて思う。

☆本誌でも、二ヶ月続いた同じ句を投句してきたり、渺渺抄や茴香の花と、川柳塔または水煙抄に同一句を投句したりする人がいる。時には、過去にすでに発表された他人の句を自分の句と錯覚(?)して投句してくるのには大変困る。

☆いろいろな考え方もあるが、また、人間同じような事を考えることも多い。僅か十七音字の句だから同想句・類想句が出るのは当然である。一字一句違わない

☆昨年十二月号から山本希久子さんにこの欄に参加して頂き、田中正坊さん、西出楓楽さん、高須賀金太さんと奥田みつ子が担当していますのでよろしく。(み)

ひとこと

素朴な疑問

昨春秋、本社総会に参加して本社役員には、七十五歳定年なるものが存在する事を知った。株式会社や檜山じゃあるまいし、文芸の世界に定年制なんて少々淋し過ぎないか?と疑問に思っているのは一人私だけではあるまい。平均寿命の延長と共に、七十・八十は洩垂れ小僧よろしく若々しい先輩が多いこの世界である。

直して欲しいと思う。もう一つ日頃から疑問に思っていること。それは本社句会等での作品が披露されても呼名しい人が居ること。句に聞き惚れて呼名を忘れて居るのだろうか。苦心して生み出した句である。堂々と呼名して頂きたい。素晴らしい句と呼名のリズムが句会を盛り上げる事間違いない。木本朱夏

☆日本好きですかと突然質問をされた。勿論好きと答える。次に具体的にどこが好きと聞かれると答えられない。この頃の日本には不安材料がいっぱい。クリントンさんの笑顔と橋本龍太郎さんの肩間に皺を寄せた顔を描いた漫画を見せられる。陽性で前向きなアメリカ人と、男はむすずかしそうな顔をしているものという日本人的思想の表れか。

☆もつとも行政改革は遅々として進まず、官僚の不祥事は相次ぎ、膨大な財政赤字を抱えた上に、天災に見舞われ、内憂外患、ツイてないことに重油まみれの日本海となり、苦渋に満ちた表情をせざるを得ないのかも知れない。

☆そしてにこやかなアメリカさんは経済好調、ハイテク情報産業の分野でどんどん先を行き、今やインターネットのその先の時代に入りつつあると言っ

☆しっかりと書いてほしい日本でも大丈夫という声も聞か

☆私如き無知蒙昧の輩が案じるまでもない。あの戦後を乗り越えた優秀で勤勉な日本人、きつと信用回復、豊かで安心して暮せ、一〇〇%好きと答えられる日本になること間違いない。これは私の初夢、この辺で目を醒ますことに。(希)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

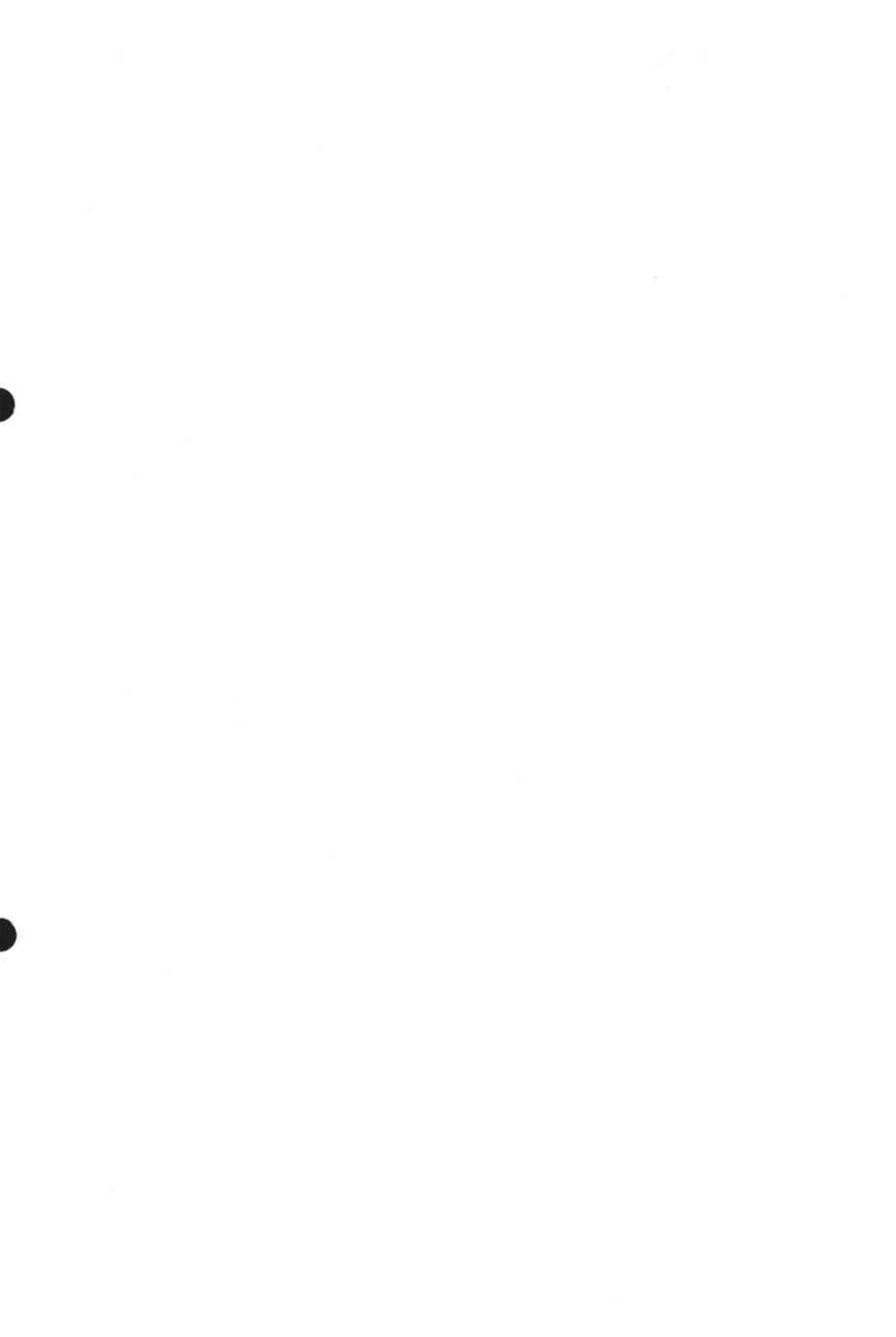
「 発表（5月号）

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。



## 作品募集

川柳塔(8句) 橋高薫風選  
 水煙抄(8句) 高杉鬼遊選  
 渺湖抄(3句) 八木千代選  
 茴香の花(3句) 西出楓楽選  
 「壺」 富田蘭水選  
 「手本」 井上直次選  
 「あいにく」 時広一路選  
 初歩教室 「コース」(3句) 吐田公一担当

5月号発表(3月15日締切)

6月号 課題吟「制」「習う」「手伝う」  
 初歩教室「置く」

## 本社3月句会

とき 3月7日(金)午後5時半  
 ところ メンズファッションセンター3F  
 中央区内本町1-1 電06・941・1918  
 地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角  
 兼題 「昨日」 門谷たず子選  
 「グラス」 神夏磯典子選  
 「旅」 宮西弥生選  
 「秘密」 宮崎シマ子選  
 「花束」 橋高薫風選  
 席題 1題 当日発表(各題2句以内)  
 会費 500円

本社4月句会 7日(月)予定

兼題 「雑誌」「乗る」「君」「うかれる」「証明」

## 夜市川柳募集

第10回「遊び」岩井三窓選  
 ハガキに3句 3月末締切  
 投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3  
 河内天笑方 堺川柳会

## 本社句会の投句について

川柳塔本社句会への投句を、4月句会から復活することになりました。  
 投句者は句箋(19×4cm)に1葉1句、各葉ごとに裏面に氏名を明記し、投句料(80円切手5枚)を同封、必ず句会の前月末までに到着するよう、川柳塔社事務所へお送りください。

## NHK川柳作品募集

課題「飾る」河内天笑選  
 ハガキに3句 3月10日締切  
 投句先 〒540-01 NHK大阪放送局  
 「文芸部」川柳係  
 発表 3月22日(土)午前11時5分  
 からラジオ第1放送(予定)

定価 六百元(送料76円)

半年分 四千元(送料共)

一年分 七千九百元(同)

平成九年三月一日発行

編集兼 橋高薫

発行人 美研アト

印刷所 大阪市阿倍野区三好町二丁目一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

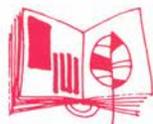
発行所 川柳塔社

電話(06)516914番

振替0098015133368番

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。  
あなたの思いをかたちにします

# 美研アート

〒530 大阪市北区浪花町9番4号  
TEL・FAX (06) 372-1178



【イメージ・キーワード】  
“Value for Human”  
バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの  
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7  
(06) 941-9631